
妖怪禪師

雨宮雨彦

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

妖怪禅師

【著者名】

彦雨宮雨彦

【ZPDFアード】

Z40581

【あらすじ】

『妖怪禅師』とは、妖怪退治を専門とするお坊さんのこと。 わかもざまな妖怪や死者の靈に立ち向かってゆきます。

「なんじゃと？　君は駅の自動改札機に嫌われてしまつた、と言つのかい？」

ゼロ禪師が目を丸くしたのも無理はないかもしません。ススムが話した内容はそれほど奇妙だつたからです。

ススムは毎日、学校へ行くのに電車を利用してきました。定期券を持つていて、一日に何回か自動改札機を通過ことになります。

「そのたびに毎回、僕は意地悪をされてしまつんです。今日だつて、買つたばかりの新しい定期券なのに、『これは期限切れだ』とブザーを鳴らし、ゲートをバタンと閉じられてしまつました」

「ほつ

「まわりのお客さんからじろじろ見られて、僕はどれだけ恥ずかしかつたか」

「駅員はなんと言つてるんだね？」

「駅員も首をかしげるばかりなんです。定期券を新しく作り直してくれたんですが、自動改札機に入れると、またブザーが鳴りました」

「自動改札機の故障ではないのかい？」

「僕と駅員が首をひねつている間にも、他のお客さんはみんなすいすい通り抜けていくんです。自動改札機にはまったく異常がないん

です

「それで？」

「このあと何をやつても、やはりだめでした。自動改札機は、どうしても僕を通してくれません。これはもう、機械が僕を嫌っているとしか思えないではありますか」

「この奇妙な事件をさつそくゼロ禅師が調査し始めたのは、いうまでもありません。数日後ススムの家を訪ね、ある知恵を授けたのです。

翌朝ススムは、胸をどきどきさせながら駅へと向かうことになりました。ポケットの中の定期券には、ある細工がありました。

スーパーマーケットへ行き、ススムはワサビを買ってきました。定期券にワサビをたっぷりと塗りつけてから自動改札機の中へ入れるよう、とこりのがゼロ禅師の指示だったのです。

もちろんススムはその通りに実行しました。

するとどうでしょう。いつたんは定期券をのみ込んだのですが、ブザーを鳴らす間もなく、自動改札機の様子が大きく変わったではありませんか。

ランプをしきりに点滅させ、ゲートをバタバタと激しく開閉するさまは、まるでのどをかきむしっている姿に見えなくもありません。

次の瞬間、自動改札機が突然立ち上がるのを目の当たりにして、目を丸くするどころか、ススムは恐ろしさを感じることになりました。

た。

自動改札機がフラフラと歩き始めるだけでなく、音を立てて鉄のボディーを床へ脱ぎ捨ててゆくのを、スヌムは果然と見つめたのです。

その下から姿を現したのは、なんと巨大なキッネだつたではありますか。

しかし、なんという大きさのキッネでしょう。

でもスヌムをぞつとさせたのは、それだけではありませんでした。怒りに満ちたその目がランランと輝き、彼をにらみつけています。

スヌムは逃げ出をなくしてはなりませんでした。

だけど足がすくんでしまい、駆け出すどじうか、スヌムは一歩下がることすらできなかつたのです。

背後から声が聞こえてきたのは、その瞬間でした。それを耳にして、スヌムがどれほどほつとしたことか。

「もうあきらめい。おまえの悪事もそこまでじや

もぢろんゼロ禅師の声です。

じゅやうキッネは、ゼロ禅師がこそこそか苦手だったに違ひありません。

舌打ちをしたかと思うと身をひるがえらせ、脱ぎ捨てた自動改札機を再びガラガラと騒がしく鳴らして、妖怪ギツネはあつという間に姿を消してしまったのでした。

ススムは、やつと口をきくべき「」ができるよつになりました。

「ねえ禅師」

「なんじゃなススム君？」

「あのキツネを何とかできないの？ 今日はこれですんだけれど、いざまた僕に嫌がらせを仕かけてくるんじょ」

「へぬだぬうな」

「ねえ、何とかしてよ」

「そう言われても困るな」

「だつてあ……」

「ならばススム君、やつを君の家族の一員として迎えてやつてはどうじゅうじゅうじゅうね」

「どうじゅう？」

「ふふふ、それがやつの本心だからや。そもそもこの悪さはすべて、はじめから君の関心を引くためなのじゅよ。家の中へ受け入れてやれば、もう一度と懲れさせねんじゅ」

「家中の中へ入れるつて？」

「興味があるのかな？ ななりません、君の『じ両親に相談しよ』。そのほうが話が早い」

そのままススムは、ゼロ禅師を家へ案内することになりました。両親の前に通され、ゼロ禅師はすぐに口を開いたのです。

「おたくのススム君は、妖怪ギツネに田をつけられております」

「なんですか？」

手短に、ゼロ禅師はこれまでのこきさつを説明しました。両親が田を丸くしたのは、いつまでもありません。

「しかし、なぜいつの息子なのですか？」

「それは、このおうちの住所と関係がありましょうな」

「『キツネ火ヶ丘』ですか？」

「そうです」

お父さんにに向かって、お母さんが文句を言い始めました。

「だから私は、ここに家を建てるのはイヤだったのよ。何か悪いことが起るんじゃないかとこいつがしていたわ」

ゼロ禅師は説明を続けました。

「こやいや奥さん、少しお待ちなわこ。」この家が『キツネ火ヶ丘』の中心に立っているのは事実です。名前の通り、このはかつて妖怪ギツネのすみかだったのでしょうか。

古巣ですから、やつはこじへ帰りたがつてこいるのです。だからスマ君に懲さをするのです。ならばこの家の家中に住まわせてやればよこではありますか

「妖怪ギツネをですか？ 私たちはびづなるのです？」

「ははは、心配ばりもつともですが、この家族には何も起じつません。それはやうどじう世人、そこにあるのはなかなか立派な柱ではありますか。私もいろいろなお宅にお邪魔するが、これほどもののはそつそつお田にかれません」

立ち上がり、手を伸ばして、ゼロ禅師は家の柱に触れたのです。お父さんの顔がほこりびきました。

「新築する際に奮発して、特によい材料を選んで立てた柱ですよ。なにしろ私と同じで、一家の大黒柱ですからな。それをケチつてはいけません」

「ええ、この柱ならやつも気に入るじでじょ。どうじょ。やつをこじの柱の中に住まわせてやつてもらひますまいか？」

この話に一番強く反対したのは、お母さんでした。家の中に妖怪を置くなど、やはり不安なのでしょう。

しかしゼロ禅師には考えがありました。

「とにかく奥さん、キッネを住まわせている家は大きな金運に見舞われる、といつ話を『存知ですかな?』

「なんですか?」

「住まわせてもらつてお礼として、キッネがあなた方にくれるものですよ。家賃のようなものと思えばよろしく」

「本当に大金が得られるのですか?」

「実を言つと、このわしがあやかりたいぐらいでしてな。うちの寺もなかなか貧乏でして、いつも苦しい生活をしております」

「そんなお寺のことなんかより、お金の話は本当なんですか?」

もう同意は得られたも同じでしょ。おなかの中での、ゼロ禅師は一やりと笑うことができました。

だからゼロ禅師は言葉を続けよつとしたのですが、『』で邪魔が入つたのです。

最初に田に付いたのは、ゼロ禅師の服が突然大きくふくらみ始めたことでした。まるで中に風船でも入つてゐるかのよつて、どんどん大きくなつてくるのです。

これにはみんなびっくりしてしまいました。

「これこれ、まだじや。『』の早いやつじやな

ゼロ禅師も驚いた顔で、ふくらむ部分をトントンとたたこつこありました。だけどふくれ上がるペースはおどろくよつとしました。

バリン。

音を立てて、とうとうゼロ禅師の服は破れてしまいました。その中から、こつたい何が姿を現したと想います？

もううん妖怪、キツネでした。ゼロ禅師の言いつけを守つて体を小さくし、服の下に隠れて余話に耳をすませていたのでしょうか。

だけどつこに我慢できなくなり、泣いてしまったのです。

悪氣があつたわけではないのでしょうか。ただあの柱の中にはむじとを認めてもらえそうな雰囲気だったからです。

キツネは空中に飛び出し、ジャンプしてヒリヒリと向きを変え、あつとこつ間に柱の中へと消えてしまつたではありますか。

本当に一瞬の出来事でした。

全員が驚き、息もできない様子でしたが、最初に口を開いたのはゼロ禅師でした。

「キツネもこの柱を気に入つてくれたようだ、何よりですな」

だけどもひるみ、お母さんの関心は別のところにありました。

「それよりも金運はどうなつました？」

「それは楽しみにお待ちなれ。キツネも憑こよひとはしないでし
ょ」

ゼロ禪師はウンツキではなかったようです。

翌日、思いがけずお父さんは道でサイフを拾い、もちろん警察に届けたのですが、なんと中には50万円も入っていたのです。

落とし主はとても喜び、1割のお礼をくれたのでした。

「の田から、お母さんは田課が一つ増えたことになりました。妖怪ギツネの大好きな油揚げを店で買い、家の柱の前に置くことです。小皿に乗せてお供えするのですが、ほんの5秒でも田を離さうものなら、もう皿は空になっているのです。

「の家の生活がキツネも気に入ったようでした。その後は一度と憑こよひしなかったのは、いつまでもありません。

お図鑑の正体

異変の始まりは、朝早くから『猫坂市』中の人々が知ることになりました。テレビやラジオのニュースがそれ一色になってしまったからです。

学校も会社もこの日はすべて閉鎖され、市民全員の避難が決定されました。

最初の数時間はなかなか足並みがそろわなかつたのですが、昼を迎えるころには事態の深刻さが知れ渡り、避難はスムーズに行われるようになりました。

両親と一緒に、もちろんススムも避難する人々の群れに加わっていました。

持ち出すことが許されたのはカバンが一つきりで、ほんの少しの着替えや貴重品のほかは、そのまま家に残しておかなくてはなりませんでした。

それほどの緊急事態だったのです。ゼロ禪師のことも気にはなりましたが、どうすることもできませんでした。

いささか信じがたいことですが、この日の朝から猫坂の町全体が、何万匹もの妖怪たちによって占領されていたのです。

まるで図鑑から抜け出してきたようなさまざまな妖怪たちで、雪女や狼男、牛鬼といった正体のわかる物も中にはいましたが、名前も知らず、ススムでさえ見たことのない妖怪も多かったです。

それらが突然、猫坂の町を満たし、人々を追い出しにかかったのです。

武器も持たない市民たちは、町から逃げ出すほかありませんでした。混乱はありましたが、夕方までには全員が安全な場所へ移動を終えることができたのです。

スヌムたちも、無事に市の境界線を越えることができました。これを超えると、さすがに妖怪たちの姿はなかつたのです。

両親と共に、スヌムも親戚の家に身を寄せることができました。

ほつとしたのでしょう。家族と顔を見合させ、思わずスヌムはため息をついたのです。

そうやつて3日間があつといつ間にすぎたのですが、猫坂市の状況に変化はありませんでした。人をまったく寄せ付けず、市内で何が起こつているのかを知る方法はなかつたのです。

ゼロ禪師の消息も不明でした。市外へ脱出することができたのか、まだ市内にいるのかさえ、わからなかつたのです。

両親に話すことも相談することもできないまま悩み続け、とうとうスヌムは決心しました。

靴をはいて、スヌムは親戚の家の玄関を出たのです。

もう夜遅い時間でした。家族にはついさつと「おやすみ」を言つたばかりです。スヌムが家の外にいることは、誰も知らないはずで

した。

「」は田舎の大きな屋敷です。庭のはずれの暗がりに身を隠すのは簡単なことでした。

ススムは、ポケットの中にある物を隠していました。ゼロ禅師から教えられたとおりに、今から使用するつもりなのです。

それは危険な仕事であり、ゼロ禅師がここにいれば絶対に反対したことでしょう。

しかしこれほど緊急事態なのです。自分の身に降りかかることなど、もうススムは気にしている余裕がないのでした。

ススムがポケットから取り出したのは、なんと鏡でした。

丸い形をし、化粧に使うコンパクトのよに小さな物でしたが、フタを開き、ススムは呪文をとなえ始めたのです。

となえ終わると、ススムは鏡の表面に田をこらしました。そして待つたのです。

ススムは待ち続けました。

でも何も起こらないではありませんか。ゼロ禅師の話とはだいぶ違うのです。

こんなはずはないのになあ。

ススムは思わず首をかしげましたが、背後から突然声が聞こえて

あたのせ、やのとせの」とでした。

「ススム、いろんなとじみで何をしてこるの?」

振り返るとお母さんがいました。二つの間にやつてきたのかそこに立ち、ススムを見つめています。

「ああお母さん。僕はどうしても氣になつたんだよ」

「おまえが何を氣にするところの?」

「もちろん禅師のことだよ。もつ何田間も、禅師からは連絡がないじゃないか」

「おまえが手に持つているその小さな鏡は何なの?」

「これは魔鏡と云つて、禅師からもつた不思議な道具なんだ。この魔鏡を手に、ある呪文をとなえると……」

「どうなるところの?」

「鏡の魔力が、一番近くにいる妖怪を、今すぐ僕の目の前へ連れてきてくれるんだ。妖怪ってね、よく人間に化けて、何食わぬ顔で町の中で暮らしてたりするんだよ。こんな田舎の町にも、一匹ぐらいいはいるだらうと思つてね。

魔鏡が、それを目の前に呼んできてくれる。呼ばれた妖怪は、僕の頼みを一つだけ聞いて、働いてくれるんだよ

「だがススム、妖怪に頼み」としたなら、後で礼をしなくてはな

らないだろ？ 悪い妖怪であれば、『おまえの命をよこせ』と要求してくれる」とだつてあるだろ？』

「それはあとで考える」としたんだよ。とにかく緊急事態なんだもん」

「それで妖怪はやつてきたのかい？」

「それが変なんだ。呪文をとなえてだいぶたつのに、まだ『気配もない。僕は呪文を間違えているのかな？』

「いや、呪文は悪くなかろ？』

「どうしてわかるの？」

「なぜって斯スム、現に私が、『』へ『』へ来て『』ではないか」

「お母さん？」

次の瞬間、とても恐ろしことが起つたのです。斯スムのお母さんはあつとこゝに姿を変え、なんと巨大な妖怪ギツネになつてしまつたではありませんか。

毛は長くツサツサとし、関節はやわらかく、身のこなしあるで猫のようです。ゆつくりと顔を近づけ、妖怪ギツネは斯スムの体の匂いをひとしきりかぎました。

「驚いたかい、斯スム」

「あなたは僕のお母さんじゃないの？」

「お母さんさわ

「どうして?」

「私がおまえの家の柱に住むようになつたいきさつを覚えているか?」

「うん」

「その後もおまえの母は、毎日欠かさず私に食べ物を供えてくれたのだよ。そしていつしか、柱の中にいる私に話しかけるようになつた。私たちは友人になつたのさ。」

そしてある日、おまえの母は私に告げたのだよ。自分がある恐ろしい病気にかかっているということを。治療法のない病氣であることを。おまえの母の命は、あと数週間に限られていた

「お母さんは、それをお父さんに話したの?」

「いいや、私以外の誰にも話してはおらぬ。彼女は家族に心配をかけたくなかつたのだ。悲しみを『うえたくなかったのだ。そして私に、ある頼み』)とをした」

「何を?」

「自分の死後、自分に代わつて家の主婦となり、家族の世話をし、見守り続ける」と

「お母さんは死んだの?」

「これには言葉を返さず、キツネはただうなずいたのです。

「そんなの……」

「事実であるから仕方がない。母が埋葬された場所は私がだけが知つておる。時が来れば、おまえを案内してやるつ」

「こつこつ」

「今ではない。とにかく今は、猫坂を占領している妖怪たちを追い払わねばならぬ。そのためにおまえは私を呼んだのだ」

「お母さんが死んでしまつたことや、あんたと入れ替わつてこる」とを禅師は知つてゐるの?」

「いや、たぶん知らぬであら」

「だけれど……」

「そんなことよりも、今は猫坂の話をしよう。おまえは何をしたいのだ?」

「ええと、まず禅師の安全を確かめて、それから事件の原因を探りたい」

「町全体が突然妖怪たちに占領されてしまつた原因だな」

「うん」

「やれやれ、これは面倒な仕事だぞ。しかしその鏡によつて呼び出された以上、私はイヤとは言えぬ。よしススム、ついて来い」

「どうするの？　ええっと、あなたの名前は？」

「ふん、そんなことはどうでもよいではないか」

「だけどお母…」

「そうや。おまえは私をお母さんと呼ぶクセをつけるがいい。おまえが大人になる日まで、家の主婦としての私の役目はまだまだ何年も続くのだ。

他の人間のいる前で、私のことを『おキツネさん』などと呼んでみる。どんなトラブルの元になるか。

だからおまえは、私を母と呼び続けるのだ。よいな？」

「うんわかった。お母さん」

いつもしてキツネとススムの冒険が始まったのです。ススムを背中に乗せ、キツネは風のよう夜の町を駆けたのでした。

市の境界線を越えて猫坂市に入ると、とたんに妖怪たちが襲いかつてきましたが、キツネのすばやさには、まるでかないませんでした。

妖怪たちの間を、キツネはすり抜けていったのです。

首のまわりの長い毛につかまりながら、ススムは目を見張らない

ではござれませんでした。

「ねえお母さん、どこへ行こうとしてるの?」

「ゼロ禅師の匂いを探してこるので。まあ見つけたが

「こんなに早く?」

「(J)べかすかではあるがな。ゼロ禅師がこの道を歩いたのは間違いないよつだ」

「くえ」

「ススム、この先には何がある?」

「ええつと地下街かな? 地下鉄の駅もあるよ」

「ああ、その入口はこの先に見えているな。しかし禅師は、何のためにこんな場所へ来たのだろうな。地下鉄は走っておらぬし、買い物をするにも店は開いていない」

「そういうながら、ススムとキッネは地下街の入口を降りていったのです。

地下街は真っ暗でした。

「お母さん、禅師の匂いはまだするの?」

「もうひがさ」

ところがスヌムたちは、思いがけず簡単にゼロ禅師と出会い頭に顔を合わせることになりました。ある曲がり角で、出会い頭に顔を合わせることになりました。

スヌムの持つ懐中電灯の光を見つけ、ゼロ禅師は遠くから警戒して、何者かを探っていたのでした。

「スヌム君、これはスヌム君じゃないか」

「やあ禅師」

「じゃんとこりで何をしているのだい？」

返事をする代わりに、スヌムは黙つてキツネを指さしたのですが、ゼロ禅師は一瞬で事情を察したようです。

「あなたは、スヌム君の家に住んでいるキツネじゃない

「そうとも。今日は家賃代わりに働いてやつておるのさ。それで禅師、この事件の原因はわかったのか？」

「ああ見当はついているよ。誰かが『呼び出しの呪文』を使ったのさ。それで市全体が妖怪で満ちてしまった」

スヌムは目を丸くしました。

「その呪文はそんなに強力なの？」

「そうなのだよ。ありとあらゆる妖怪を一度に呼び出すことができる呪文だが、あまりに強力すぎて、使うことは禁じられている。

それを犯人が市内のどこに書いたのか、いろいろ探したが、どつしても見つからん。市全体に広く魔力をおよぼしていることから考へて、てっきり地下街のどこかだと思ったのだが、いくら探しても見つからないのだよ。

だから考え方を変えて、別の場所を探してみよつてつ眞になつたところさ」

「襲つてくる妖怪は大丈夫だつたの？ ケガはしてない？」

「ああ、ありがとう。それは大丈夫だよ。妖怪よけの呪文を今日だけ何十回使つたことか。だがそれはいい。わしは、『呼び出しの呪文』が書かれている本当の場所の見当がついたような気がするのだよ」

「どい？」

「わしは地下街をさんざん探し回つたが、どいにもなかつた」

「うん」

「だがスム君、呪文を書くのなら、地下街よりももつとふさわしい場所があることに、わしはやつと気がついたのだよ」

「それはどいなの？」

「猫坂の頂上さ。高い高いビルの屋上であれば、呪文一つで市全体へ影響をおよぼすことができる。そつは思わないかい？」

「だけど禅師、それはどのビルなの？ 猫坂にはビルがたくさんあるよ」

「呪文を書くのもつともふさわしいビルとは、猫坂で最も背の高いビルということではないかな？」

ススムとキツネは、ゼロ禅師とはその場で別れることになりました。さすがの妖怪キツネも、一人を背中に乗せて走ることはできなかつたのです。

ゼロ禅師はうなずきました。

「わしのことは心配しなくていい。妖怪たちを追い散らしながら市外へ出るだけの力は、まだ残っているさ」

その言葉を信じて、ススムとキツネは出発したのです。地下街を飛び出し、再び地上を駆けていきました。

『やすのは猫坂で最も背の高い建物、『猫坂ステートビル』でした。

ステートビルが見えてくるまでに、ススムたちはまだまだ何匹もの妖怪をよけ、追跡を振り切らなくてはなりませんでした。

「お母さん、大丈夫？」

「妖怪どもをよけるのは難しくはない。だが数が多いので、いい加減うんざりしてきたぞ」

ついにステートビルが見えてきました。電気という電気がすべて

失われて いる猫坂市内でも、月の光を受けて輝いて いるのです。

ビルの姿をチラリと見上げましたが、キツネは足取りをゆるめる
「」とむえありませんでした。

「ススム、私は一つ気になる」とがあるのだよ

「何を?」

「『呼び出しの呪文』を誰が書いたにせよ、呪文のそばには護衛の
妖怪を置いているはずだと思つてな」

「護衛つて?」

「誰かが呪文を消しに来るかもしれないではないか。それを防ぐた
めの護衛だよ。巨大で強力な妖怪に違いないね」

「まさかあ」

「まさかであるものか。ステートビルの中に入つたら、私たちは必
ずその妖怪と出合つだらう。まず一筋縄ではいかん。作戦を考えて
おく必要がある」

そんなことを言われても、ススムは何も思いつくことができませ
んでした。

一人はそのまま、ステートビルの入口へ飛び込んでゆくことにな
つたのです。

ビルの中はもちろんひとけがなく、暗くひつそりしていました。

ススムは不安そうにキヨロキヨロしていますが、キツネは平気な様子で、トントンと階段を上がつてゆくのです。

ついに気持ちを抑えることができなくなり、ススムは懐中電灯のスイッチに手を触れようとしました。

「それはおやめ、ススム。敵に気づかれることになる」

「うん。ねえお母さん、お父さんやその他の人たちは本当に何も気づいていないの？」

「おまえの母と私が入れ替わつてこる」とかい？ もちろんせ。私がそんなくまをするものか

「だけどせ……」

「さあ静かにおし。もつすぐ屋上に着くよ。私たちがする」とは一つだけだ。呼び出しの呪文の書かれた場所を探すこと

「うん」

「さあ着いたぞ。この扉を開けると屋上だ。強い風が吹いているかもしれないから、気ををつけ」

屋上は暗いけれど、月があるので懐中電灯は必要ありませんでした。

「ところでススム、禪師から渡された物を、まさかどこかに落としきてはこまないな？ ないと困るぞ」

「ペンキの」とへ。 わやんとあるよ。 せり」

ポケットから取り出して、スヌムはカラカラと振って見せたのです。黒いペンキの入ったスプレー缶でした。これで呪文を塗りつぶしてしまおうといふのです。

「お母さん、僕はそんなドジドジやないよ。こつだつて……」

「お黙り。 いま何か音がしたぞ」

「どいじへ。」

「右手の物陰。物置小屋のむこうだ。へや、屋上とこから平らで開けた場所かと思っていたが、『うわや』『うわや』して何も見えんではないか」

「ねえ僕たち、二手に分かれて探したほうがよくない? ここは相当広いよ」

「妖怪に襲われたらどうする?..」

「そのときは悲鳴を上げるから、助けにきてよ。」

「まあそれでよいか。だがよく氣をつけのんだぞ。ケガなどされたら、おまえの母に顔向けができる」

スヌムとゼロ禅師は翌朝、ある場所で待ち合わせていました。

危険な場所へスヌムを送ることに、ゼロ禅師もためらいがなかつ

たわけではありません。でも他に方法がなかったのです。

待ち合わせ場所で、ゼロ禅師は気をもみながら待っていたのですが、その心配は結局は不必要なことでした。

時間きつかりに、スヌムは顔を見せたのです。

スヌムは元気がよく、ケガをしている様子もありませんでした。ゼロ禅師の口から大きなため息が漏れたのは、いうまでもありません。

「スヌム君、作戦はうまくいったのかい？」

「ステートビルの屋上へ上ると、呪文はすぐに見つかったよ。僕が見つけたんだ」

「ちゃんとスプレーで塗り消したかい？」

「うん。塗りつぶすのもすぐだった」

「呪文を護衛する妖怪はいなかつたのかな？」

「いたよ。ものす」」のが

「大丈夫だったかい？」

「やつつけたのはあのキツネで、手分けして呪文を探していたから、戦いの様子を僕は見ていないけど、護衛していたのは、石のこん棒を持つた鬼だった。ものす」く凶暴なやつ。

だけど変なんだ。キツネの血ひじき、つまくねびき寄せて足を滑らせるように仕向け、屋上のフェンスを突き破つて地上へ落とせたんだって。

ステードビルを離れるときに見たけど、確かに鬼は地上に落ちて死んでた

「それのどこが変なのかい？」

「だつて僕ははつきり覚えているんだよ。呪文を塗りつぶし終わって、キツネと合流したとき、僕は見回したんだ。屋上のフェンスはどこも壊れてなどいなかつた。奇妙に思つて、キツネの目を盗んでひとまわりしたから間違いないよ」

「すると、鬼が地上へ落とされて死んだのは確かだが、足を滑らせてフェンスを突き破つたというのはウソだとススム君は思うのだね」
空中へ一気に放り出したのだと呪つ。

「そうだよ。あのキツネは、何かとんでもない魔力を使って、鬼をうな、そんな呪文が存在するの？」

「Jの質問には、さすがのゼロ禅師も表情をくもらせてしまつた。

「存在するとは思つがね。しかし、たかだか妖怪、キツネに使う」とができるような呪文ではなかつ

「でしょ？」「

「ああスム君、あのキツネについては、わしももつと慎重であるべきだつたよ。スム君の家に簡単に住まわせてしまつたが、思つた以上に力のある妖怪なのかもしれない。これからは十分気をつけなくてはならないよ」

とはいへ、猫坂市を襲つたトラブルがこれで終わりを告げたことも事実だつたのです。

市民はみな家に戻り、数日たたないうちに、町は元のにぎやかさを取り戻したのでした。

敵の出現

ある夜、お母さんと一緒に、斯スムは暗い夜のとおりを歩いていました。

ちょっとした用事で出かけ、思いがけず帰りが遅くなってしまったのです。しかも家はまだ遠く、これからまず駅へ行つて電車に乗らなくてはなりません。

突然お母さんが、小さく声を上げました。

「おや？」

「お母さん、どうしたの？」

「気のせいか、あるいは見間違いだったか？　いや、そうではないぞ…」

「僕たちの背後に誰かいるの？」

「斯スム、今は振り返らないほうがいい。やつの正体がわからん。気がついていないふりをして、もう少し歩き続けよう」

やがて一人の前方に、駅の明かりが近づいてきました。

「ここへ達するまでに、あとをつけてくる人物について、お母さんはもう少し話してくれていました。

「斯スム、ついてくるのは一人で、年頃の若い娘のよう見えます。

そういう娘に知り合はいるか?」

「ハハん、いないよ」

「遠すぎて、顔かたちはまだわからない。すでに数百メートルも私たちのあとをつけている。

曲がり角や物影を利用して、ここまでうまく身を隠してきたが、駅のホームに出ればそうはいかないだろう。その姿をよく見せてもらおうじゃないか」

キップを買い、斯スムたちはホームに上がりました。青白い螢光灯が一列に長く、並んで光っています。その下で、斯スムははじめて彼女の姿を見ることになりました。

ホームのはしとはしに立ち、しばらく互いを観察し合つたのです。

娘といつても、日本人ではありませんでした。きれいな白人だったのです。

髪は金色で、服と瞳に合わせた青いリボンでふんわりとめられています。顔を伏せながら、斯スムはチラチラ眺めていました。

やがて電車がやってきました。

ところがどうしようと、娘の子は乗車するそぶりを見せないのです。斯スムとお母さんだけが乗り込み、電車はドアを閉めることになりました。

そして何事もなく発車したのです。

遠く小さくなつてゆく女子の姿を、斯くはガラス越しに見送つていました。

「ねえお母さん、あの女の子はどうして乗つてこなかつたんだうつね。つつき追いかけてくると思つたのに」

「私もそれが不安だ。何かいやな予感がする」

お母さんの予感は正しかつたのかもしません。駅を離れて、まだいくらも走つていないのに、電車が突然、奇妙な具合に変化を始めたではありませんか。

最初に声を上げたのは斯くでした。

「お母さん、電車の床がやわらかくなつた。ほら、足がもぐりこんじやう」

「いや斯く、床だけではない。壁も天井もみなそつだよ。やわらかくなり、ぬれて光つてゐるのではないか」

お母さんはあわてて斯くを立ち上がりさせよつとしましたが、うまくいきませんでした。足を取られ、斯くは転んでしまつたのです。

「お母さん、床はなんだかヌルヌルしてゐるよ。変な匂いもある」

「これは胃酸の匂いだ。くそ、私たちは妖怪の体内にこるようだ。」

「お母さんの中だよ」

「僕たちは妖怪に食べられちゃったの？」

「何がなんだか、私にもさっぱりわからん。」口をついておいで。今から呪文で、横腹に穴を開けてやる。妖怪め、覚悟するがいい

「お母さん」

「ススムは私の後ろに隠れておいで。ちょっと派手な呪文になるからね。目をつぶつておいでよ」

お母さんの言葉に従つたので、呪文の効果で何が起こり、妖怪の胃の中からどうやって抜け出すことができたのか、ススムにはよくわかりませんでした。

ただ妖怪が苦しそうに身をよじり、足元が大きく揺れるのが感じられ、でも気がついたときには、ススムは安全な地面の上にいたのです。

いつの間にか妖怪ギッネの姿に戻つたお母さんが、背中に乗せて運んでもくれたのに違ひありません。

ほつとして、ススムはあたりを見回すことができました。そして驚いたのは、もう電車の姿などどこにもなかつたことです。

ススムの目の前には、何かが横たわっていました。

それはもちろん死んでいました。腹を引き裂かれた、見たこともないほど大きなタヌキだったではありませんか。

翌日、ススムはさつそくゼロ禪師の寺を訪ねました。昨夜の経験

を話したのです。

興味深そうに、ゼロ禅師はうなずきました。

「つまりスヌム君、そのタヌキ妖怪が電車に化け、君をのみこんだ
といふことだね。そして胃の中で消化しようとした」

「だけど運良く、僕は妖怪ギツネと一緒に脱出したんだよ。ほら、僕の
家の柱の中に住んでいるでしょ」

「その妖怪ギツネの呪文でなんとか脱出できたというわけだね。タ
ヌキ妖怪が死んだあと、女の子の姿はなかつたのかい？」

「ううん、ビニにもなかつた」

「状況から考えて、その女の子がタヌキをあやつっていたと見て間
違いない。その子には、その後一度と会っていないのだね？」

「うん。だけどタヌキ妖怪の死体のそばで、僕は変なものを拾つた
んだ。だから見てもらおうと持つてきた」

「ほほう、何かな？」

スヌムはポケットから取り出して見せたのです。

田にしたとたんに言葉を失い、ゼロ禅師は驚きを隠すことができ
ませんでした。本当に奇妙な物体だったのです。

とがつた長いツメでした。驚くほど大きく、しかもグルリと曲が
つてカーブしているではありませんか。何者かの指から折れて外れ

たものでしょ、うが、眺めているだけで、この世のものなりぬ恋ひしさを感じるではありませんか。

「禪師、これは何のツメなの？」

「タヌキのツメではないのは確かだね。おそらく、ススム君の言つていた娘の物だらう」

「あの女の子がこんなツメを残していつたといつの？　あの時近くにいなかつたのに？」

「いやいたさ。家来のタヌキがうまくやるかどうか、近くへきて様子を見ていたのだらう。だから妖怪ギツネがタヌキの腹を呪文で破つたとき、巻き込まれてしまつたのさ。衝撃でツメの先を折つてしまつたのだらう」

「女の子の正体は何なの？」

「ススム君、このツメはとても珍しいものだね。しかも重要な手がかりになる。ススム君がどうこう敵を相手にしているのか、わしはわかつてきたような気がするよ」

「本当？」

「ああ本当だ。このツメの持ち主が敵なのなら、対抗して作戦を立てね」」とがでかる。ススム君、ちょっと耳を貸したまえ……」

こんなに大きな船に乗るのははじめての経験なので、ススムは少し興奮していました。乗船してもなく甲板の上で風に吹かれながら、お姉さんのミチコもこう言つたほどです。

「まあ、ちょっとした体育館ぐらいの広さがあるわね」

本当にその通りでした。これに乗つて数日間の航海ができるなんて、ススムは幸せな気持ちでいっぱいだつたのです。

ところがその幸せも長くは続きませんでした。出航して夕方になりました、ススムたちは船内のレストランへと出かけたのです。

白い布のかかつたテーブルがいくつも並んでいます。空いているテーブルへと案内されながら、ススムがさつと顔色を変えたことに気がついて、ミチコは首をかしげました。

「ススム、あそこのテーブルがどうかしたの？」

「お姉ちゃん、見ちゃだめだよ」

「どうしてよ？ ははあお母さん、ススムのやつ、あのテーブルのきれいなお嬢さんに興味があるらしいわよ。金髪の女の子が好きなのね」

「違うよ、お姉ちゃん。振り返つて見ちゃだめだよ。あの娘がこの間、タヌキ妖怪を差し向けて、僕をひどい目にあわせた犯人なんだよ」

ミチコの表情が一瞬で凍り付いてしまったのは、いつまでもありません。

「あの人ガ? へえそつなんだ。ちよつとおもじろそつね。お母さんちちはこにいてね。近くへ行つて、私は少し偵察してくるわ」

なんと無謀なことか、止める間もなくミチコは立ち上がり、娘がいるテーブルへと向かつて歩き始めたではありませんか。

ミチコがその次に取つた行動は、ススムを驚かせるビビリか、恐ろしさをえ感じさせることになりました。

娘に連れはおらず、大きなテーブルに一人で座つていたので、イスは余っています。ミチコはそこに勝手に腰かけてしまつたのです。

「ちよつとこじりをお借りしてもいいかしら?」

返事はせず、娘はじろりと皿玉を上げただけでしたが、ミチコは言葉を続けました。

「皿口紹介をするわね。私はミチコとこつのよ。あやこのテーブルで皿をむいてるのが弟のススムで、その隣はお母さん。仕事があつて、お父さんはこの旅行には来られなかつたのよ

娘は答えました。

「私の姉はラセツとこつのだよ。ススムのことは以前から知つてい
る。ゼロ禅師と一緒になつて、私の仕事の邪魔をするいやなやつだ

「あなたは何をしようとしているの？」

「それはおまえには関係ない。いま話さなくとも、明日の夜明けまでにはイヤでも知ることになる。」じらぶ。つこわつき日が沈んだところだ。今夜は楽しい夜になるだ

言葉をかわすのをやめ、ミチコがこちらのテーブルに戻ってくるまで、ススムは生きた心地もしませんでした。ほんの何分間かに過ぎなかつたのですが、ずいぶん長い時間に感じられたのです。

食事は早々に切り上げ、自分たちの船室へと戻つてから、ミチコは話し始めました。

ススムは皿を丸くしていますが、お母さんは落ち着いています。

「つまりミチコ、今夜のうちに攻撃を仕かけるつもりであるとリヤツは宣言したのだね。しかもススムを襲うつもりでいる

「どんな攻撃を仕かけるつもりなのかしら？ お母さん、船員たちに助けを求めるくてもいい？」

「どうやつて？ 惨い娘が呪文をあやつるので助けてください」とでも言つたの？ 誰も信じてはくれないわ。それはどうとミチコ、ちよつと私の皿を見て」「うん」

もちろんミチコは言われた通りにしました。そして、お母さんがとなえる呪文をまともに食らってしまったのです。

そのままミチコは石のように眠り、床の上にバタンと倒れてしまつたではありますか。ススムが思わず叫んだのも無理はないでし

よつ。

「あつお母さん、何をするのかへ..」

「ちょっと呪文で眠らせただけだ。心配はない。田を覚ましても、今夜のことは何も覚えていないだら」

「だけど…」

「ススムは私と一緒に甲板へおいで。ラセツを迎撃つ準備をしよ

う

どうしていいかわからず、ススムは言葉に従うしかありませんでした。夜の甲板は暗く、ひとけもありません。お母さんはサッと妖怪ギツネに姿を変えました。

「ああススム、私の背にお乗り」

「うん」

お母さんの背中にに乗ることに、ススムはもうすっかり慣れています。いつもどおりにお母さんはすぐに駆け出すかと思えました。ところがそうはいかなかつたのです。

どこへ通じるものなのか、二人のすぐそばにはドアがあつたのですが、大きな音と共にそれが突然破られ、敵が姿を見せたのです。

これにはススムもびっくりしてしまいました。

敵は体が大きく、頭をかがめないとドアをくぐり抜けることがで

きません。いかにも鬼族らしい牛に似た顔つきですが、一番の特徴は、なんといっても田玉が3つあることでしょう。

しかも3つ目の田玉は、額の中央で宝石のように輝いているのでした。

ススムは叫びました。

「お母さん、ここがラセツだよ。ほら、手の指のツメが一つ欠けてるもん」

すでにお母さんは全力で駆け始めました。うなり声を上げ、もちろんラセツはあとを追つてくるのです。

しかしここは船の甲板です。いつまでも逃げ続けることができるほど広いわけではありません。何を思ったのか、お母さんは突然走る方向を変えたではありませんか。

「お母さん、何をするの？ そつちは海だよ」

ススムは思わず身構えましたが、心配はなかつたのもしれません。

なんとお母さんは大きくジャンプし、船べりを飛び越えてしまつたのです。

お母さんは、なんでもない顔で波の上にストンと降り立ち、沈んでしまひどころか、そのまま水面を走り始めたではありませんか。

それは信じられないような眺めでした。

なんでもない土の地面と変わらないかのよつて、お母さんは駆けていたのです。足の裏がぬれる」といふなかつたに違ひありません。

「お母さん、これまたひつひつしているの？」

「世の中にはやまやまな種類の呪文があり、私はそれを自由自在に使こなすところ」といふ

「へえ」

「うセツゼビツたつ」

「あこつも船べつから海へ飛び込んだよ。泳いで追つてくる

「やつせ、私はど高度な呪文は使えぬところ」とか

「あつ、うセツの姿が見えなくなつたよ。水中くもぐつた

「足の力をゆるめ、やがてお母さんは立ち止まつてしまつました。

「お母さん、なぜ立ち止まるの？」

「私は前を見張るから、おまえは後ろをよく見てこなのだよ。うセツがいつどから現れるかわからないぞ」

「やつは水中から来るの？」

「おやうへな。しつかつと見張るのだよ。不意打ちを食らひのせうめんだ」

「うそ

やうやつて何分かがきました。波のせいで斯スムとお母さんは
ゆらゆらと揺れ続けましたが、それ以外はいつにいつに何も起らな
いのです。とうとう斯スムは我慢できなくなってしましました。

「ねえお母さん、もうあきらめて、ラヤシはどうかへ行っちゃった
んじやないの？」

「いや、やつはまだ私たちの真下にいるわ。配を殺し、水中から
チャンスをうかがっているのさ」

「チャンスって？」

「私たちがしひれを切らし、注意力を失うのを待つてこらのだよ。
ステートビルの呪文を消してしまったことで、私たちはずつひのひ
みを買つてこらね。やう簡単に復讐】をあきらめてくれるものか

「じゅあじゅあじゅの？」

「ここ子だから、私と一緒にそのままお待ち。見張りをおこしたるの
ではないよ」

「うそ、あいつだお母さん」

「うそした？」

「僕は今、うそと思って出したことがあるんだ。ラヤシのことだよ」

「どんなことだ？ やつは弱点でも見つけたか？」

「タヌキ妖怪をやつつけたとき、僕は小さなツメのカケラを発見したんだ。それについて禅師から教えてもらつてたのを、きれいに忘れてた」

「ゼロ禅師は何を言つた？」

「それはここでは言えないよ。水中で、ラセツが聞き耳を立てるかもしないんでしょ？」

「ああ、やつは確かにそつしているだろうな。それでスヌム、私にどうじると言つのだね？」

「もしもラセツが水面に現れたら、逃げたりせずに、逆にやつに寄つてくれる？ やつの鼻先をすつと通り抜けて欲しいんだ。できるだけ近くをだよ」

「なんだか知らんが、危険なことをさせようといつのだな。まあいい。一度だけならやつてやる。だが一度は無理だ。ラセツもバカではないから、2回も出し抜くことは不可能だぞ」

「うん、一回で十分だよ」

海の上に立ち、スヌムたちと一緒に待ち続けました。

そしてついに、ラセツが行動を見せたのです。スヌムたちからは少し離れた場所でしたが、突然波が割れ、水音と共に姿を現したではありませんか。

お母さんのように水面を歩く力はラセツにはありません。しかし強い腕力で、イルカのように水面に飛び上がることができるのです。

水しぶきを飛ばし、サメのようにスヌムたちに飛びかかるのうじのうじょう。

このチャンスをお母さんが見逃すはずはありませんでした。スヌムの通りに、ラセツへ向けてバネのように駆け出したのです。両者の距離は、あっという間に縮まるようになりました。お母さんが飛び込んでくるなど予想もしていなかつたのでしょう。ラセツは驚いている様子です。

それでも呆然とするよのうなことはなく、腕を伸ばして、スヌムたちにつかみかかってくるのでした。

距離はもう何メートルもあつません。スヌムはこの瞬間を待つていたのです。

スヌムの右手はポケットの中にある、ある物をしつかりとつかんでいました。

ラセツへと向かつてスヌムがそれを投げつけたとき、あまりの意外さにお母さんも目を丸くしたものでしたが、警戒心をゆるめることがありませんでした。

スヌムと約束したとおり、ラセツの鼻先をかすめ、お母さんはさつと通り抜けたのです。

ラセツめがけてスヌムが投げつけたのは、なんと豆でした。

本当に大した物ではありません。ビニにでもあるただの大豆だったのです。しかもたつた20粒かそこらでしかありません。

妖怪世界の不思議の一つですが、鬼一族はみな豆が苦手だったのです。神話時代にまでさかのぼる話なので、理由は誰も知りません。タヌキ妖怪のそばに残されていたツメの形から、敵の正体が鬼であることをゼロ禅師は探しだし、斯スムに命じて大豆を一つかみ、いつでもポケットの中に入れておくように言つたのです。それが役に立つたわけでした。

ギャーッヒラセツの叫び声が海の上に響きました。大嫌いな大豆とこうだけではなく、田の中にまで入つてしまつたのです。

特に額の中央にある第3の田の痛みが激しかつたようです。両手で顔をおおい、そのままラセツは海中へ倒れこんでゆきました。

水中に沈み、その姿は見えなくなりましたが、痛みと苦痛は続いたに違いありません。身をのた打ち回らせているせいで、海面はまるで嵐のときのように波打つていてはありますか。

その後、ラセツが姿を見せることはもうありませんでした。やがて波は静かになつてしまつたのです。

ススムはおそるおそる口を開きました。

「お母さん、ラセツは死んだと思つ？」

「まさか死にはすましよ。重要な第3の田をやられたので、一時的

に逃げただけや。おたいつか戻つてくんだらつ

ススムがある方向を指をしたのは、このときの」とでした。

「あれお母さん、おそこで何か浮いてるよ」

ススムの指を追つて皿をじりじましたが、お母さんの表情の変化はとても急で、ススムは驚きを感じました。

「ススム、あれをお拾い。わあ今すぐお拾い。早く」

その物体が浮いている場所へと向かつて、お母さんはすでに駆け出しています。いかにもあせつてこるふうにお母さんがそばに立ち止まると、手を伸ばしてススムは拾い上げる」とができます。

それは一冊の本でした。お母さんの皿の色がやけに変わったのは、いつもでもあります。

ススムの手には、そのずつしりとした重さが感じられました。表紙が革でできた本当に立派な本だったのです。

お母さんの声は少し震えています。

「ススム、表紙を開いて」りん

ススムはその通りになりました。

本の中身はむちむちと白紙ではなく、小さな文字がびっしりと書き込まれていました。

何ページめくつても、やはり同じでした。そしてススムは、妖怪たちが呪文を書くのに用いる文字と似ていることに気がついたのです。

「お母さん、これには何が書いてあるの?」

「おまえには関係のない内容さ。この本は私がもらっておいた」

「禅師にも見せようよ」

「人間なんぞにこれを読むことができるものか」

「でも禅師はいろいろ勉強しているから……」

「お黙り。私はこの本を誰にも渡すつもりはない。それともススム、おまえは力ずくで取り上げようとしたのかい?」

「だけど……」

「ああいっ子におなり。いっ子になつて、今から一〇秒間だけ目を閉じていなさい。何も見ていはいけないよ。そう、それでいい」

ススムはお母さんの言葉に従うしかありませんでした。そうやって目を閉じている間にお母さんが何をしたのか、知る方法はなかつたのです。

ただ手の中から本が持ち上げられる気配があり、目を開くともうどこにもなかつた。それが、ススムに感じることのできたすべてでした。

スヌムとお母さんは船に戻り、ミチコの呪文をといてやり、そのあとは何事もなく航海が続いたのです。

毛皮が消えた

学校から帰ってきて、自分の部屋の中に入るなり、ミチコは呆然としてしまいました。なんだか見慣れない物が、床の上に大きく広げてあるではありませんか。

どう見てもキツネの毛皮です。

こんなものが家にあるなんて、ミチコは聞いたこともありませんでした。誰が、何のために持ち込んだのでしょうか。

「これはいったい何に使うものなのかしら?」

ミチコの心の中で好奇心が頭をもたげました。手を伸ばし、震える指先でそつと触れてみたのです。

ススムが家に帰ってきたのは、ミチコよりも少し後のことでした。

階段を登つて自分の部屋へ行き、ススムも目を丸くすることになりました。自分の部屋の中に、妖怪、ギツネの姿を見つけたのです。

「あれお母さん、僕の部屋で何をしているの?」

キツネは振り返り、口を開きました。

「ススムなの?」

「お母さん、お姉ちゃんはまだ帰っていないの? もう帰つてくる時間だから、早く変身しないとまずいことになるよ」

「いつたい私が何に変身するといつの？」

「何言つてゐるの？ 元の人間のお母さんの姿にだよ。自分の母親が妖怪、キツネと入れ替わつてゐることを、お姉ちゃんは知らないんだよ。忘れたの？」

「いいえ、忘れてはいないわ…。 そうだ斯ム、郵便受けを見てくれないかしら？ 私は見るのを忘れていたのよ」

「郵便受けなんて、お姉ちゃんがいつも見てくれるじゃないか」

「いいえ、今すぐ行つてきなさい」

キツネの口調は思わぬ強さでした。首をかしげながらも、斯ムは従つたのです。

郵便受けから一階へ戻つてきて、斯ムはキョロキョロとまわりを見回すことになりました。キツネの姿がなかつたからです。

斯ムは首をかしげたのですが、思ひがけない声が突然部屋の中に響き、びっくりして飛び上がることになりました。

「おい、斯ム」

声は確かにそう聞こえたのです。

「だれ？ どこのいるの？」

キョロキョロしながらグルリと振り返り、やつと斯ムは相手の

姿を見つけることができました。

「この間じびつやつて入ってきたのか、なんとフクロウがいるのです。洋服のボタンのように大きな丸い目をして、じりりを見つめているではありませんか。

ススムは不思議そうな顔をしました。

「今のはあんたがしゃべったの？」

「当たり前じゃないか。フクロウにだつてしゃべると口があるんだぜ。といひでススム、オレはおまえに伝言を伝えにきたのだよ」

「伝言？ 誰から？」

「オレの偉大なお師匠様からだ」

「お師匠様って？」

「お師匠様とはこの家に住み、おまえの母親に化けている方の」と
だ。オレはその弟子なのさ

「何を醫つ弟子なの？」

「魔力やじり姿身術やら、宇宙の秘密やじりこころね」

「ふう」と

「ではおまえに、偉大なるお師匠様の伝言を伝える。お師匠様はお
つしゃつた。

『ススムよ、家へ帰るのが予定よりも遅れる。すまないが、ミサワの部屋に干してあるキツネの毛皮を片付け、押入れの中に隠しておいてくれ』

「ススムは、首をかしげないではいられませんでした。

「キツネの毛皮ついて?』

「今日はここ天氣なので、脱いで部屋の中に広げ、干しておられたそうだ。学校から帰つてから//ナリに見られた前に、それを片付けておいて欲しいことこのことだ』

「お姉ちゃんの部屋?』

廊下を後戻りし、ドアを開けてススムはのぞき込んだのです。

「ほひね。お姉ちゃんの部屋は空っぽだよ。キツネの毛皮なんてないよ』

「おや本当だ。ススム、おまえが帰つて来たらとき、すぐ毛皮はなかつたのか?』

「このドアが開いていたから、部屋の中はよく見えたけど、何もなかつたよ。そのとき、お姉ちゃんは家の中に立つておいたよ』

「そんなはずはない。お姉匠様は、朝からずっと家を廻歩いていたはずだ』

「そんなことないよ。僕はつこねつねお母さんで会つたもん。その

あと郵便受けを見にいった、2階に戻つてきたら、あんたがいたんだよ」

「オレはお師匠様には会つておらぬぞ」

「じゃあ入れ違いになつたんだね」

「それはありえぬ。お師匠様がお帰りになつたはずはない。外で大切な用事をしておられるのだ。途中でちよつと抜け出すなど不可能な用事だ。

「なあ斯ム、これは大事件かもしれないぞ。何かの理由で、ミチコがおまえよりも早く学校から帰つてきたといつことは考えられぬか?」

「まさかあ」

「でもそれを確かめるのは簡単なことでした。ミチコの学校カバンを探せばいいのです。

「それが部屋のすみに落ちてこりのを見つけたとき、斯スムとフクロウは顔を見合わせないではいられませんでした。

「ねえフクロウさん、これはじつじつだと想ひへ.

「おまえには想像がつかぬか? これは本当に困つた事態だぞ。ミチコは普段よりも早く学校から帰宅し、お師匠様が脱いでおいた毛皮を見つけたのだ」

「その毛皮つて何なの?」

「なあススム、まさかおまえは、あのキツネの姿がお師匠様の正体であると思つてこるのであるまい?」

「えつ違ひの? 僕はてつきつ…」

「お師匠様の正体がキツネなどであるものか。毛皮を着て、お師匠様は妖怪ギツネに化けているだけなのだよ」

「どうして?」

「そのほうが、人間たちの目を『まかしやすいからさ。妖怪ギツネなど、猫坂では珍しくないからな。ゼロ禅師の目をあざむくのに、お師匠様も苦労しているのだ』

「なぜ禅師をだます必要があるの?」

「今はそんなことを話している暇はない。学校から早く帰宅し、ミチコは毛皮を見つけたのだろう。そしてほんの好奇心からかもしぬが、毛皮を自分で着てしまつたのだ。

つまり今は、ミチコが妖怪ギツネの姿をしているわけだ。さつきおまえがしゃべつたといつキツネはお師匠様ではなく、ミチコだつたのに違ひないぜ」

「そんなまさか…」

「そつとしか考えられぬではないか。おまえが郵便受けを見にいつてこぬ間に、ミチコはどうかへ行つてしまつたのだよ」

「どうして？」

「すでにミチコは、ミチコではなくなっていたからさ。あれは普通の毛皮ではない。魔力に満ちたとても不思議なものだ。」

お師匠様のよつな方なら、問題なく着こなすことができる。しかしだの人間に過ぎないミチコが着たときには……」

「どうなるの？」

「ミチコは逆に、毛皮によつて支配されてしまつたところじゃ。ミチコはミチコの指輪をはめていなかつたからな」

そういつてフクロウは、翼の下から器用に何かを引っ張り出したではありませんか。

ススムが目をこりすと、確かに指輪でした。どうこう材質なのか、サンゴのような赤い色ににぶく光つていています。

「それは何をする指輪なの？」

「これを指にはめてさえいれば、普通の人間でもあの毛皮を着て自由に動くことができ、毛皮から支配されたり、乗つ取られたりすることがないのさ」

「じゃあお姉ちゃんは？」

「今も言つた通り、あの毛皮に乗つ取られ、取り付かれてしまつたのだ。自分がいま何をしているのかもわかつていなうだろ？」

「お姉ちゃんはどこへ行ったの?」

「見当がつかない。とにかくススム、おまえはこの指輪をはめてみる」

「うん」

よくわからないま、ススムはフクロウの葉に従ったのです。まるであつらえた物のよつに、指輪は彼の指にぴったりと納まりました。

フクロウは満足そうです。

「よし、それでいい。斯く、おまえは『チチ』が生まれた場所を知つているか?」

「猫坂市民病院だよ。僕も同じように生まれたもん

「その病院は今もあるのか?」

「うん」

「町の地図を持つていい。その病院の場所を確かめたいのだ」

わざとく一階へ降りてゆき、お父さんの部屋からススムは地図を持ち出したのです。それを手に再び階段を上がり、自分の部屋の中をのぞきこんだと、ススムは田を丸くすることになりました。

部屋の中央に、巨大なキツネの毛皮が置かれていたのです。

でもこの毛皮が、お母さんのものではないことは明らかでした。色がまったく違っていたからです。

これは黒に近い暗い銀色をしていました。でも光をはね返し、と
「ハリハリのまぶしく輝いていました。

スヌムは思わず声を上げました。

「これは何？ なんだかとてもきれいな物だね」

パチリとワインクをし、フクロウは答えてくれました。

「氣に入つてよかったですよ。これからおまえはこれを着て、//チコの
あとを追いかけてゆくのだから」

「僕が？ ビリヒ？」

「他に行ぐ者はおるまい？ だが心配するな。おまえはその赤い指
輪をしていろし、//チコの行き先はわかつてない

「ビリヒ？」

「猫坂市民病院さ。ああ地図を見せろ。はは、こいか。おまえは
運がいいな

「ビリヒ？」

「下水道の中をはつていかずすむからや。こんな昼間の明るい時
間に、この毛皮を着て町の通りを歩くわけにはいかんだけつ？」

「それはやつだけビ」

「地図を見ひ。」Jの家から病院まで、ずっと川沿いに川原を歩いてゆくことができるんじゃないのか」

「川原にも人はいるよ」

「人の里にいるのは、ある程度は仕方がないさ。おまえは病院へ先回りして、ミチコを待つんだ」

「もしもお姉ちゃんが先に病院に着いていたら?」

「それはありえない。あのキツネは町の地図など持つておるまい? いいか 스스로、あの毛皮はミチコではなく、もはやただの妖怪、キツネだということを忘れるな」

「でもやつが病院へ向かうと、どうしてわかるの?」

「それは魔力の秘密に關することだ。やつはミチコが生まれた場所へ行き、ある呪文をとなえよつとしている。わづかめと...」

「どうなるの?」

「ただの毛皮ではなく、やつは一匹の妖怪、キツネとして完全に復活することができる」

「生き返るの?」

「だがそのときこな、ミチコは死んでしまうのだぞ」

「まさか」

「まさかではない。さあ早く行け。ミチコの命がかかっているのだ。オレはお師匠様に連絡して、手助けをお願いしてみよう。

おまえは病院へ行き、やつが呪文をとなえるのをなんとしても邪魔するのだ。さあ行け。無駄にしている時間は1秒もないのだぞ」

そういう終わつたかと思うと羽音を響かせ、フクロウはあつとう間に窓の外へと見えなくなつてしましました。スヌムは一人になつてしまつたのです。

でもグズグズしている暇はありません。心を決め、毛皮に手をかけました。

毛皮を着る方法について、フクロウは何も説明してくれませんでした。しかし心配は要らなかつたのかもしれません。さつと持ち上げて肩にかけるだけで、毛皮のほうから勝手に動き、スヌムの体をすっぽりと包み込んでくれたのです。

あつという間にスヌムの姿は、一匹の妖怪ギツネへと変わつたのです。

これで準備は整いました。大きく息を吸い、スヌムは窓の外へと体を投げ出したのです。

あとは4本の足に任せ、病院をを目指して駆けてゆくだけでした。

毛皮の魔力に、スヌムはただ驚きを感じるばかりでした。まるで本物の野生動物のように、すばやく力強く行動することができたの

です。

体の大きさゆえ、目撃した通行人を何人か、もう少しで気絶させてしまうところでしたが、それ以外はスムーズにスムーズに病院へやつてくることができました。

太陽はもう沈みかけています。塀を乗り越え、スムーズは簡単に敷地へ足を踏み入れることができました。

ところがここで、ちょっととした驚きが待っていたのです。病院には人影一つなく、もうそろそろ灯つていいいはずの明かりさえ一つもなく、建物の窓はすべて真っ暗なままであります。

これではまるで廃墟のような眺めです。

いつたんは首をかしげましたが、スムーズはすぐに納得することができました。建物が古くなつたので、病院を改築することが決まりたといつてコースを思い出したのです。

そのためみな退去したあとなのでしょう。あと数日で工事が始まるに違いありません。

グズグズしている暇はないのです。ガラスの割れている窓を見つけ、スムーズは建物の中へと入つてゆきました。

内部は暗く、薄気味悪く感じないではいられませんでした。ベッドや診察器具はすべて運び出され、どの部屋もガランとしています。分厚い毛皮の中にいるのに、スムーズは思わず体を震わせてしましました。でも気味悪がつてばかりもいられません。

「お姉ちゃんが生まれた場所といえば、やはり分娩室かな？」

すでに田はすっかり暮れていましたが、スヌムは院内の案内看板を見つけることができました。

「なんとまあ、分娩室は地下にあるのか」

これはあまりうれしい話ではありませんでした。地上の階ですらこれほど暗いのです。地下など、鼻をつままれてもわからないほどでしょ。」

だけど心を決め、スヌムは階段を降りていったのです。

階段にはすぐ着くことができました。しかし階段が終わり、最初の曲がり角を曲がりましたといふと、とうとうスヌムは立ち止まってしまいました。

ここから先はもう地上からの光も届かず、インクでも流したような闇が広がっているのでした。田をこらしても何をして、もはや何一つ見ることができないのです。

「どうしよう」

前進しなくてはならないとは思つのですが、どうしても足が前へ出でられません。スヌムの前足は、何回か足踏みを繰り返すことになりました。

「おじスヌム」

暗闇の中から突然声が聞こえてきたのは、そのときの「」だったのです。

「ひいっ」

ススムは思わず悲鳴を上げました。背中の毛まで一本残らず逆立つてしましました。

だけど謎の声がやむことはなかったのです。なんと嘘せ、いかにもおかしかつに笑い始めたではありませんか。

「ふふふ。ススムよ、おまえはなんと臆病なのだ」

その声に聞き覚えがあることに、ススムはやつと気がつきました。

「お母さんなの？」

「もううんうんうん」

暗闇の中に足音が聞こえ、肩に手が置かれるのをススムは感じました。

「お母さん、もう来てたの？ 僕はもう少しかかるのかと思つてた」

「ミチロの命がかかるつてこりのだ。フクロウから知らうわ、飛んできたのや」

「やつはせどりで呪文をとなえると悪いへ。」

「分娩室のある階である」とは間違いない。この廊下の先は少し

広くなつていって、そこならやりたにも広々として便利だつた

「暗闇の中でも、お母さんは物を見る」とができるの?」

「もううんでもいいわ。妖怪はみなそつだよ」

「お母さんは妖怪なの?」

「当たり前さ。人間だとでも思つていたのかい?」

「それはそつだけど……」

しかしススムは、最後まで言葉を続けることができませんでした。お母さんの手が伸びてきて、突然口をふさがれてしまつたのです。

「静かにおし。上の階で何か物音がしたぞ」

ススムの体をまるで電気のように緊張が走り、今度は背中ビクビク、体中の毛が逆立つてしまつたのは、いうまでもありません。

だけどあることに気づき、ススムはお母さんにしゃべつたのです。

「あれは妖怪ギツネじゃないよ。かすかに光が見えるもん。きっと懐中電灯だよ。禅師が来てくれたのかもしけないよ」

「ソレにゼロ禅師が来るものか。私は知らせてなどいない

そのころにはススムも、状況のおかしさに気がつきはじめていました。階段の上から差し込む光は懐中電灯とは違い、なんだか緑色がかつていてるのです。いかにも不自然な感じではありませんか。

自分の背中にねぐらんがまたがるのをススムは感じました。お母さんがわらわもました。

「これほほずいわ。思つたよりも魔力の強いギッネのよつだ。尾をあんなに光らせてこるではないか」

やがて角を曲がり、妖怪ギッネが姿を見せました。お母さんの言つとおり、表こしきをまわるで油光灯のよつに光らせたりました。

じてな光景は、ススムは話に聞いたこともあつませんでした。本当に不気味な眺めです。おのじいの母のものとは思えません。

「お母さん、どうするの？」

「やつをあす、ビリかへ誘こ出すほかあるまい」

「ビリかへ？」

「おまえが何かして、やつを怒りせねばこい。あの田舎じいさん。ハハーンと輝いてこらでほなにか。いかにも短気やうだ」

「僕、そんな」とやきなこよ」

「ええこ困つた子だ。やこに落ちてこる古いバケツをよこつ

ススムはやの通りに、お母さんはバケツを受け取りました。

「お母さん、そんなものをビリするのへ。」

「決まりでいるわ」

なんとお母さんは、バケツを妖怪ギツネめがけて投げつけたではありますか。

ススムは悲鳴を上げそうになりました。バケツは妖怪ギツネの鼻に命中したのです。

青白かつた妖怪ギツネのしつぽの輝きが、あつとこつ間に焼けた鉄のように赤く変わり、ススムをやにに驚かせました。になりました。

「それススム、ぼやぼやしてこるとかみつかれるわ」

お母さんを背中に乗せたまま、地上へと続く階段にススムはひとつに飛び込みましたが、妖怪ギツネが駆け出すのもちうん同時にした。お母さんの声がススムの耳に届きました。

「ススム、やつを屋上へ誘い出すのだよ」

「誘い出して、じつかるの？」

「私の得意技を使う。やつを地上へ投げ落としてやるわ」

「そんなことをして大丈夫？ お姉ちゃんが死んじゃわない？」

「そのくらに加減はするわ。妖怪ギツネの毛皮はとても頑丈なものだ。ちよつとやわつとのことでケガなどしない」

「ああお母さん、屋上へ続くドアが見えてきたよ。あのドアにもしも鍵がかかっていたらどうするの？」

「どうもしなこれ」

お母さんは自信に満ちた様子です。手にしていた魔力の杖をお母さんは大きく振りました。

魔力は空中を伝わっていき、ドアを簡単に吹き飛ばしてしまったではありませんか。斯スムは足をゆるめる必要さえありませんでした。

妖怪ギツネの鼻先をかすめるよつにして、一人は屋上へおどり出ることができたのです。

もちろん妖怪ギツネもすぐ追いついてきます。

お母さんの指示で、斯スムは屋上のすみに位置を取り、妖怪ギツネを迎撃つことになりました。

妖怪ギツネはさつきよりもさらに強くしっぽを光らせ、田舎もギラギラ輝いています。背中の毛はすべて逆立っていますが、4本の足はしっかりと床をつかんでいるのです。

いつ床をけつて飛びかかるかと、斯スムは生きた心地もしませんでした。

ところがお母さんは落ち着いているのです。戦いを楽しんでいるのかもしません。

「斯スム、昔の騎士は、いつもして1対1で決闘をしたものだよ。馬に乗つて長いやりを突き出し、互いに突撃するのだ」

「お母さん、僕は馬じゃないよ」

「霧雨氣を壊すこと言つものではないよ。せつかく私は騎士の氣分でいたのに、情けないやつだ」

「あの妖怪ギッネの内側にはお姉ちゃんがいるんだよ。忘れちやつたの？」

「忘れるものか。しかし騎士同士の決闘とは、それはそれは勇壮なものだつたのだぞ」

「お母さん…」

ススムは口を開きかけたのですが、続きを言つことはできませんでした。床をけり、といとう妖怪ギッネが突っ込んできたからです。

ところが勝負は、あっけなくついてしまいました。

妖怪ギッネが駆け出すのと同時に、お母さんの指示で、相手めがけてススムも駆け出したのはいいのですが、怖くなつて、なんと途中で立ち止まつてしまつたではありませんか。

おかげでお母さんは、相手までもまだ距離があるのに魔力の杖を振るう羽目になりました。

だけど魔力に距離は関係ありません。

杖を離れて魔力は妖怪ギッネへと飛びかかり、あつという間に持ち上げ、屋上のへりを越えて、地上へと投げ落としてしまつたので

す。

妖怪ギツネの上げる長い悲鳴が、ススムの耳に届くことになりました。樹木にでもぶつかったのでしょうか。バリーンと大きな音も聞こえてきました。

ススムがあわてて屋上のへりへ駆け寄ったのは、いつまでもあります。

地上では大きな木が一本、見事にへし折られていきました。そのわきに妖怪ギツネが転がっているのを見ることがあります。

でもピクリとも動きません。しつぽも光を失い、ダラリとしたままです。

落下の衝撃で破れたらしく、毛皮のおなかが裂け、ミチコの姿が見えています。

ミチコはケガをしているようには見えず、ほっと息をつきかけたのですが、不意に聞こえてきたキンキン声に驚き、ススムはあわてて振り返ることになりました。

そこには、またあのフクロウがいたではありませんか。

「やあススム、じ苦労だったな」

自分の背中の上にもはやお母さんがいないことに、ススムは突然気がつきました。

「あれ、お母さんは？」

「お師匠様か？ どうしてお帰りになつたわい。お忙しい方なのでな。おまえももつ家へ帰つてよろしく」

「お姉ちやさまじうかるの？ 毛皮は？」

「後始末はオレがしてやるよ。ナムリを家へ連れて帰るぐらこの魔力なら、オレだつて持つてこるわ」

「へえ」

「いやつて今回の冒険は終わつたのです。毛皮を脱いで病院を抜け出し、バスに乗つてスヌムは家へと急ぎました。

家に帰るとミナ「がすでにいたところのせ、驚くべきことではないかもしません。自分の部屋でイスに腰かけ、うたた寝をしている姿を見つけることができました。

スヌムの足音でミナ「は田を覚ましたが、彼女が本当に何も覚えていないこととは、一言も言かわすだけですぐに確かめることができます」

金所へ降つてゆくと、お母さんの姿を見つけることもできました。ナムリタ食のしたくを終えよつとしているところでした。

スヌムと田が合つとお母さんは口を開きかけましたが、そらくミナ「が顔を見せたので、先ほどの冒険について語るのはあきらめるしかありませんでした。

でも今夜のおかずにはスヌムの大好物を選んでいたことから、お

母さんの感謝は十分に感じ取れることができたのです。

普段の年であれば、猫坂の町にはあまり雪が降りません。

でもあの冬は違っていたのです。まだ12月も終わらないというのに、すでにひざの深さにまで達していました。

当然学校はお休みになり、早めの冬休みが始まっています。

スヌムの家は問題なかつたのですが、古ぼけたゼロ禅師の寺は丈夫だらうか、雪の重みでつぶされていなかつらうかと突然気になつて、スヌムは出かけてみたのです。

だけど寺はしっかりと立っていました。

ゼロ禅師も元氣で、スヌムを歓迎してくれたのですが、ちょうどそのとき寺を訪れていたお客さんの姿が、スヌムをひどく驚かせることになつたのです。

ジョーモスという人はアメリカ人でしたが、何十年も前に日本に帰化し、最後は猫坂の市長になつたことはスヌムも知つていました。

部屋の中でゼロ禅師と話していたのが、このジョーモスの幽靈だつたのです。ピンク色のとがつた鼻や白い口ひげには、スヌムも見えがありました。

ゼロ禅師とジョーモスの会話は、ちょうど終わるとこだつたようです。

「では禅師、勝手で申し訳ないが、この件についてはくれぐれもよろしくお願ひします。」

「ええ、ジマークスさん。わしもできるだけ努力してみましょひ。その言葉にうなずきながら、ジマークスの幽靈はゆっくりと消えていったのでした。

ほつと息をつき、ススムは口を開く「」とがであるようになつました。

「禅師、今のは元市長のジマークスさんだよね」

「せうだよ。しかし大変な」とを頼まれてしまつたな

「どうして？」

「気象台の予想では、この雪はこれからも止むことなく降り続け、毎日数センチずつ積もつてゆくやうだよ」

「今だつて、もうかなり積もつているもんね」

「それが、降りやむ可能性がほととどない」というのだよ。いまに猫坂の町は、完全に雪の下に埋もれてしまつだつ

「それとジマークスさんが関係あるの？」

「アハハハ。ジマークスさんによる」と……」

ゼロ禅師は説明を始めたのです。

お母さんの予想外の頑固なこと、斯スムは当惑してしまいました。寺から帰るとさつそく相談を持ちかけたのですが、まるで聞く耳を持たないのです。

「でもねえ、お母さん…」

「お黙りススム、私はゼロ禅師が苦手なのだ。協力する気などないぞ。そう返事をしてやれ」

「だけどお母さん、いま猫坂の町が大変なんだよ。このままでは、あと一週間で雪の下に完全に埋もれちゃうんだ」

「それがどうした?」

「お母さんは、そんなに禅師が嫌いなの?」

「ああ嫌いだね。私の口の中にワサビを入れたのは、あいつではないか。涙が出て、私がどれだけ苦しんだことか」

「でもねあ…」

「ああひひひひ。とにかくお黙り」

クルリと背中を向けて、お母さんは自分の部屋の中へと消え、ピシャリとドアを閉めてしましました。

「ううなるともう絶対に言ひひ」と聞いてくれないのは、斯スムも

よく知つていました。どうしようもありません。

もちろんその後も雪は降り続いたのです。学校だけでなく、会社や商店までが次々に閉じられ、市民の生活は不便さを増してゆきました。

除雪も追いつかず、あちこちで道路まで不通になり始めたのです。人や物の動きは、今やからうじて地下鉄だけが支えていました。

日々の買い物や食べ物の入手にも困るようになり、しぶしぶながら、とうとうお母さんも承知してくれたのでした。

「だがススム、私はゼロ禅師と行動を共にする気はないぞ」

「じゃあどうするの？ 魔力エンジンの停止方法は禅師しか知らないんだよ」

「禅師の代わりに、おまえが私についておいで。エンジンの操作方法は、おまえがゼロ禅師から習えばよい」

最善の策とはいえたかったのですが、他に方法はありませんでした。雪をかき分けて、ススムは寺へと急いだのです。

いついう事態を予想していたのかもしません。ススムの口から事情を聞かされても、ゼロ禅師は驚いた顔を見せませんでした。すぐには紙とペンをとり、機械の停止方法を説明してくれたのです。

古来から、猫坂は魔力の強い町でした。だから現在でも多くの妖怪が住んでいるのです。

魔力研究所とはもう何十年も昔、ジョームスが市長だった時代に作られたものでした。魔力エナルギーを人類の生活に役立てる研究を行っていたのです。魔力エンジンと呼ばれる装置を開発しようとしました。

この魔力研究所は、猫坂の地下深くにありました。万一事故が起つても、地上に影響が及ばないようについて配慮だったのです。

でもおかげでスヌムとお母さんは、長い長いトンネルを歩いていかなくてはなりませんでした。そもそもお母さんが不満を口にしたのは、いまでもありません。

「スヌム、まだ着かないのか？ 私は足が疲れてしまつたぞ」

「文句言わないでね。僕だつて歩いてるんだから。ねえお母さん、気のせいかな？ なんだか暑くなつてきたんじやない？」

「気のせいではなかろうよ。魔力エンジンとは、まわりの魔力を一ヶ所に集める装置なのだろう？ 魔力が集まる場所には、自然と熱も集まることになる。

そういう性質があるのさ。だから町の上空には逆に寒気が集まり、あのような大雪になつてしまつたのだよ」

「へえ」

一人は歩き続けましたが、トンネルの温度はゆっくり上昇を続け、とつとうスヌムは上着を脱がなくてはならなくなりました。

「お母さんは暑くないの？」

「」の毛皮を着ているかぎり、少々の暑さは平気だ。考えてみれば、まわりの温度に敏感な人間とは不便な生物だな」

「でもねえお母さん、人間だつて…」

ところが斯スムの言葉は途中で止まつてしましました。背中をくわえて突然引き戻され、ひつくり返りそうになつたからです。

「お母さん、何をするの？」

斯スムの耳に口を近づけ、お母さんをさつとさせやきました。

「静かにおし。その角のむじに何かの氣配があるわ」

「氣配つて？」

「息を潜め、何者かが待ちかまえているところだ。斯スム、魔鏡は持つてきているね？」

「うん、ポケットの中にあるよ」

「私にお貸し。念のために呪文をかけておこう。よし、これでいい。さあ斯スム、行くぞ」

魔鏡を返してもらい、あまり氣は進まなかつたのですが、背中を押されるよつにして、斯スムは前進をはじめました。トンネルはここでカーブになつていて、それを曲がるとすぐに相手の姿が見えてきたのです。

だけど意外な姿に、口をポカンと開けてスヌムは立ち止まつてしましました。お母さんは油断のない田つきをしていますが、一人の前に現れたのは、なんと小さな女の子だったのです。

女の子はたつた一人で、赤いきれいな着物を着ていました。

手には盆を持ち、透明な氷の浮いたグラスを一つ乗せていく」とがわかります。いかにも冷たそうな飲み物ではありませんか。

女の子は言いました。

「よつじやおいでくださいました。お飲み物などいかがですか？」

振り返り、スヌムはお母さんと顔を見合せないではいられませんでした。

お母さんが言いました。

「私は要らぬ。スヌム、おまえが一つともお飲み

「えつ？」

田を丸くしたのはスヌムも女の子もほとんど同時でしたが、とにかくスヌムは手を伸ばすことにしたのです。でもスヌムの指がグラスに触れる直前に、再びお母さんの口が動きました。

「スヌム、その子に鏡を貸しておやつ。鼻の頭に何かついてるよ

女の子は顔をパッと赤くしました。ポケットから取り出して、スヌムが魔鏡を貸してやったのは、いうまでもありません。

「だけど鏡の中をのぞき込み、女の子はすぐに不思議そうな顔をするようになりました。」

「私の鼻のどこに物がついているのです？ 何もついてはおりませんよ」

お母さんが答えました。

「おや、その鏡の中に、おまえは自分の顔を見ることができるのかい？」

「当たり前ではありますか」

女の子から受け取り、魔鏡をたたみ、ススムはポケットの中にしまいました。

お母さんがクスリと笑います。

「ススム、ついさっき私はその魔鏡に呪文をかけただらう？ あれは、人間の姿がその鏡には映らなくなる呪文だつたのさ。その鏡に姿を映すことができたのなら、そいつは人間ではないということになるね」

お母さんがそういう終わるころには、あれほどかわいらしかった女の子の表情はすっかり変化していました。あざむかれたことに気がついたのでしょうか。

次の瞬間には表情だけでなく、女の子の姿全体が大きく変化することになりました。突然ムクムクとふくれ上がり、姿を現したのは、

なんとお母さんにも負けないサイズの犬だったのです。

それは恐ろしい眺めでした。ススムは呆然と見上げるしかありません。

犬の筋肉は引き締まり、黒く短い毛の下にゴシゴシと透けて見えています。足はしっかりと床をつかみ、しっぽはピンと立ち、敵意を隠そうともしません。

だけど何か変なのです。犬はまったく静かで、うなり声やほえ声どじるか、ハアハアという息づかいさえ聞こえないではありませんか。

「お母さん、これはどうなってるの？」

不思議そうな表情で、ススムは振り返らないではいられませんでした。お母さんも少し困惑した様子です。

「ススム、どうやら魔力エンジンは、あまり調子がよくないようだね」

「どうこう」となの？」

「スイッチを切りにきた私たちを追い返すために、この猛犬を作つたのだろうが、なんとこの犬には頭がないではないか」

「しっぽは2本あるよ。前と後ろに一本ずつ」

「この犬には上半身がないのさ。下半身を一つ、向かい合わせにくつづけあるだけだ。よくじらぐ。足は4本とも後ろ足だよ」

本当にお母さんの言うとおりだったのです。ススムもあきれないではいられませんでした。頭がないのでは、犬は見ることも聞くことも、匂いをかぐこともできません。

その後もでたらめに足を伸ばして、犬はひとしきりあたりを探つていましたが、もちろんススムたちを捕まえることはできず、やがて見当違いの方角へと歩き出し、そのまま見えなくなつてしまつたのです。

「お母さん、何がどうなつてゐるの？ 僕にはよくわからないや」

「今も言つたる「魔力エンジンはひじく調子が悪いからしこのや。整備もされぬまま、何十年も放置されていたのだろう？」

「うそ、やうなんだろ？ ね」

一人はさりにトンネルを進み続けました。

お母さんと一緒に歩く」と、ススムは特に不安を感じませんでした。お母さんは強く大きく、また魔力の使い手でもあるのです。お母さんを打ち負かすことができる者など、そういう存在するとは思えません。

ところがお母さんにも弱点があつたのです。数分後、ススムは驚きを隠すことができなくなりました。

懐中電灯で前を照らし、トンネルの中を順調に進んでいたのですが、突然お母さんが立ち止まつてしまつたのです。

「お母さん、どうしたの？」

お母さんは少し苦しそうに答えました。

「ああ斯スム、私はこれ以上前へは進めなくなつた」

「どうして？」

「トンネルの中がさらに暑くなつたことに気がついただろ？ 魔力エンジンが、猫坂中の魔力を吸い集めているからだ」

「そのスイッチを切りに僕たちは行くんだよ」

「だが私は、これ以上一步も前へ進むことができない。周囲の魔力が強すぎ、体にまとわりついて、もう苦しくてたまらないのだよ。今にも氣を失つてしまいそうだ」

「お母さんー！」

「いや、これ以上前進しなければ、氣を失う」とまではないだろ？ この先は斯スム、おまえが一人で行くしかないね」

「えつ？」

思いがけないことでしたが、お母さんの言つとおりにするほかなによぎでした。しぶしぶ斯スムは首を縦に振つたのです。

「だけどお母さん、この先は僕一人で大丈夫かなあ」

トンネルの中に、斯スムの声が不安そうに響きます。そんなに苦

しこのか、お母さんはどうつら腹ばいになってしまった。

「お母さん」

「私なら心配いらない。おまえが戻つてくるまで、ここにで休んでいることにしよう。これを持っておいき。きっとおまえを守つてくれるだろ?」

キツネのおなかを留めているボタンが1つか2つ、パチンと外れるのがススムの目にに入ったのは、このときのことでした。

毛皮の内側にいる者が姿を見せようとしているのでしょうか。思わず胸がドキリとして、ススムは見つめないではいられませんでした。

でも期待は外れてしまつたのです。毛皮の中にいる者が姿を見せたのではなく、ススムに見ることができたのは腕だけだったのです。

だけど肌の白い、女らしいきれいな腕ではありませんか。その手は魔力の杖をつかんでいたのです。

魔力の杖が、ススムの前に差し出されました。

「ススム、この杖を持つてお行き。きっとおまえを守つてくれるだら?」

「それがなくてお母さんは大丈夫なの?」

「ふふ、杖などなくとも多少の呪文は使えるさ。自分の身を守ることはできる。さあ、早くおどり

ススムは言葉に従いました。

魔力の杖とは学校で使う定規ほどの長さで、あまり大きなものではありません。手の中に握り、ススムは何回か振り回してみないではいられませんでした。

だけど振り回して何が起こるというわけではなかつたのです。光を発するわけでも、火花が散るわけでもありません。

「お母さん、これは本当に魔力の杖なの？」

「私の命よりも大切なものを。ていねいに扱いなさい」

「うん」

「では行つておいで。妖怪どもの相手は、みなその杖に任せんがいい。おまえはただ、魔力エンジンのスイッチを切ることだけ考えればいいのだよ」

「わかった」

立ち上がり、ススムは歩き始めました。たつた一人の冒険が始まつたのです。

最初の曲がり角を曲がつてしまつと、振り返つてもお母さんの姿は見えなくなりました。ススムは本当に一人になつたのです。

トンネルはしばらくそのまま続きました。だけどやがて少しづつ広くなり、いつの間にか大きな部屋の中にいることにはススムは気が

ついたのです。

田の前には壁があり、ドアが一つあるのを見るのはことができます。
このドアのむこうに魔力エンジンがあるのだということは、ゼロ
禅師から教えられていきました。ゼロ禅師は簡単な地図を描いてくれ
たのです。

ドアに鍵がかかっている様子はありませんでした。

ノブに手を伸ばしかけたのですが、斯スムは一瞬ためらうこと
なりました。ドアの脇に誰かが立っていることに気がついたからで
す。

「お姉ちゃん」

それは本当にミチコだったのです。学校帰りなのか、地底のこんな
場所なのに制服を着て、カバンまで持っているのが奇妙でしたが、
見間違いではありません。斯スムの目には本人に思えました。

「斯スム、こんなにおもしろい地底の大冒険に私を誘わないなんて、
ひどいじゃないの」

「だつてお姉ちゃん」

「あんた一人なの？ ゼロ禅師はいないの？」

「あれ？ なぜ禅師が一緒だと思うの？」

「決まっているじゃないの。自分たちの都合で何十年もほつておい

たくせに、やつと自力で動き始めた魔力エンジンを邪魔に思うような地上の人間たちが相談を持ちかける相手なんか、ゼロ禅師以外はないじゃないの。

ねえススム、あんたはゼロ禅師と一緒に来たんでしょう？」

「ううん、僕は一人だよ」

「うそおっしゃい。ゼロ禅師はどこに隠れているの？ 見つけ出して、背中をけつとばしてやるわ」

「お姉ちゃん黙れ」

魔力の杖を取り出し、ミチコに向けてススムは軽く振ったのです。

思つていたとおりミチコは偽者で、杖の魔力を受けてあつと いう間に正体を現し、毛むくじやらの真っ黒なコウモリに変化したではありますか。そしてバタバタと羽ばたき、あわてて逃げていったのです。

ため息をつき、今度こそ手を伸ばして、ススムはドアを開けました。

魔力エンジンとは、思っていたよりも小さな機械でした。第1号の試作品だったからかもしません。

洗濯機ほどの大きさしかなく、部屋の中央に置かれていました。

形は少しヒョウタンに似ています。鉄でできたボディーの上にスイッチがいくつも並んでいるのを見ることができます。

ランプがいくつか点灯し、メーターの針は何かの数字を示しています。

この針はもう少しで振り切つてしまいそうで、この場所に集まっている魔力の強さを表すのでしょうか、でもお母さんとは違つて、ススムは何も感じることができませんでした。

ゼロ禅師の説明から、ススムが切るべきパワースイッチは一番右にあるやつだとわかつていました。さっそく彼は手を伸ばしたのです。

ところがススムの指は、スイッチに触れることができませんでした。まるでウサギのように、突然魔力エンジンがピョンと前方へ飛んで、逃げたからでした。

驚くといつよりも、ススムは思わず笑い声を上げてしまいました。

「ひり、逃げるんじゃないよ」

もちろんスヌムは追いかけました。だけど魔力エンジンは、またピョンと飛んで逃げるのです。

スヌムが再び追いかけたのは、いつまでもありません。しかし魔力エンジンも逃げ続けました。

スヌムもあきらめるわけにはいきません。息をはずませながら、後ろを走ってゆくことになりました。

まるで鬼ごっこをして遊んでいるように見えたかもしれません。だけどついに、魔力エンジンはドアを突き破り、部屋の外へと出でしまったのです。

もちろんあとを追つて、スヌムも廊下へ飛び出してゆくことになりました。ここから追いかけっこが始まったのです。

「待てえ」

魔力エンジンが姿を変え始めたことに気がついたのは、このときのことでした。

最初スヌムは自分の目を信じることができなかつたのですが、魔力エンジンは一つのタイヤを生やし、とうとうオートバイへと姿を変えてしまつたではありませんか。

もちろん誰も乗つていらないオートバイです。アクセルを吹かすものだから、スヌムは顔いっぱいに排気ガスを引っかけられることになりました。

オートバイが相手では、スヌムは追いつけっこありません。かと

いつて立ち止まるわけにもいきません。あつとこく間に見えなくなつたオートバイのあとを追い、データデータと駆けていったのです。

お母さんと別れた場所までは、すぐに戻つてくる」とができました。

突然現れたオートバイには、さすがのお母さんも驚いたのでしょう。目を丸くして見送つたところへススムがやつてきましたのです。

「お母さん」

「ススム、今のオートバイはなんだ? 誰も乗つておらぬのに、風のようになけて行つたぞ」

「あれば魔力エンジンが変身した姿なんだよ。早く追いかけなくちや」

「なんていじだススム、私の背中に乗り」

考える間もなく、ススムは言葉に従つたのです。お母さんはすぐに全力で走り始めたのですが、ススムはおかしなことに気がつきました。

「あれお母さん、魔力が濃すぎて苦しいんじやなかつたの?」

「それが突然楽になつたのさ。オートバイに変身するときには、魔力エンジンは相当量の魔力を消費してしまつたらしい。あつとこく間に薄くなつた。もう心配はないさ」

オートバイのあとを追い、ススムとお母さんは走り続けたのです。

「お母さん、この道の先はどうなつてたつけ?」

「一ヶ所、地底の裂け目を渡る橋がある他は一本道のトンネルだつたよ」

「うん、あれはすごい橋だつたね」

お母さんの背中につかまつていながらも、斯スムはありありと思いい浮かべることができました。大地が大きく裂け、まるで渓谷のようになつた場所があるのです。

斯スムたちが進んでいる道は、細い橋になつてそこを渡るのでした。

「だから斯スム、やつが私たちを待ち伏せするとしたら、あの橋だろうよ」

「どうして?」

「狭くてやたら高いくせにガードレールもない。私たちはトンネルから出た直後で、見通しはきかぬ。『わつ』と飛びかかられたら、反撃できぬではないか」

「その橋まであとどのくらい?」

「ああトンネルの出口が見えてきたぞ。『氣をつくな』

『やうやつて一人はトンネルから飛び出していつたのでした。

橋は長く、本当に狭く、まるでワリバシの上に乗せられたような気がススムはしたものでした。

お母さんの言つとおり、ここで襲われたらひとたまりもありません。そしてそれはまったく正しかつたのです。

二人は身構えながら橋にさしかかったのですが、誤算の一つは、敵が上からやつてくるとは想像もしていなかつたことでした。

突然のエンジン音に、一人は思わず上を向いたのです。そして音の正体に気がつきました。

もちろんオートバイではありません。一人をめがけて飛行機が一機、かなりの速度で飛びかかつてくるところだつたのです。

魔力エンジンが変身したものですから、あまり大きな飛行機ではありません。せいぜい大型模型飛行機といつところでしょうか。

それでも大きな音で翼を鳴らして、プロペラをブンブン回転させています。体当たりしようつといつのかもしれません。

あまりのことにお母さんでさえ立ち止まり、思わず頭を引っ込めてしましました。

翼の先とはいえ、まともにぶつけられたのでは、ススムはひとたまりもありません。あつという間に、お母さんの背中から振り落とされてしまいました。

しかもここは、ガードレールもない狭い場所なのです。すぐに橋からも転げ落ち、悲鳴を上げながら、どこまで深いかもわからない

暗闇へ向かって、ススムは落ちていったのでした。

雪がとうとう降りやんだことは、地上の人々にもすぐにわかりました。戸口の前に積もった雪をかき出し、おもてへはい出して、みんなほつとした表情で空を見上げたものでした。

ゼロ禅師もその一人だったのです。今日あたり屋根の雪下ろしを始めなくてはならないと思っていたところなので、本当に胸をなでおろしました。

雪がやんだということは、スヌムとキッネが魔力エンジンの停止に成功したからに違いありません。

ところがゼロ禅師の安心も長くは続きませんでした。部屋のすみの暗がりに何者かが潜んでいることに突然気がついたのです。

「おや、どうやら様かな？」

だけど返ってきた返事はトゲトゲしいものでした。あの妖怪ギッネが姿を現したのです。

「おじゼロ、おまえのせいでスヌムは大変なことになってしまったのだぞ」

怒りに満ちて、キッネの田はランランと輝いているではありますか。

「スヌム君が？ 魔力エンジンはどうなった？」

「ふん」

鼻息も荒く、キツネはゼロ禅師の足元へ何かを放り出しました。
床にぶつかって、ガチンと音を立てます。

ゼロ禅師が目をこらすと、大きく変形した機械部品のようでした。
でもスクラップ同然ではありませんか。

「これは何かね？」

「魔力エンジンの成れの果てさ。私がめちゃくちゃに壊してやった。
ススムにあんなことをされて、冷静でおられなかつたのでね」

「ススム君はどうなつた？」

「魔力研究所の手前に、巨大な大地の割れ目があることを知つてい
よう？ それを渡る橋の上で襲われたのだよ」

「それで？」

「あの底なし穴の中へ、ススムは落ちていつたのさ」

「まさか」

「まさかではないぞ、ゼロ。しかしそススムもケガはしておるまい。
私が魔力の杖を貸し与えていたからな」

「魔力の杖だつて？ あんたはそんなものを持つているのかい？」

「そんなことは今はビリでもよい。問題なのは、あの底なし穴から

「うやつてススムを助け出すかとこいつだ。おまえのせいで、私はこれから泥棒を行かねばならんのだぞ。」

本当にうおまえを食い殺してやりたいところだが、ススムのことを考えると、そつもいかぬわ」

「待てキッネさん、もしやあんたは、大野家に所蔵されている『ムササビ笠』を盗みにこくつもりかね？」

「よくわかつたな。だが止めても無駄だぞ。あの穴を飛び降りるには、どうじても必要なのだ」

「止めはせんよ。わしこうに考えがあるのを。おや、あればビヒリ置いたのだったか。確かこの物置の中だと想つたが

戸を開け、ゼロ禅師はゴソゴソと中を探し始めたではありませんか。そして古ぼけた笠を取り出したのです。

それは昔風に本物のワラでできいて、手で持つではなく、帽子のよつと頭にかぶる笠でした。

「ほらキッネさん、見つかったぞ」

「それは何だ？　ずいぶん汚いものだな

「古じものだから仕方がないこと。しかしづくじりん。これはムササビ笠にそつくりではないかな？」

「まあな。しかしそんなものをどう使うのだ？」

「それを今から説明するわよ。あなたへお聞け」

「いたあ」

その「ころススム」は、しきりに自分の腰をさすっていました。

魔力の杖がいくらブレークをかけてくれたといつても、あの高さから落ちてきたのです。穴の底にぶつかるとき、多少の痛みはあって当たり前でしょう。

でも幸運にも、どうもケガはないうでした。少し休んで痛みがやわらぐと、やつと立ち上がる気持ちになりました。

スヌムはギヨロギヨロとまわりを眺めました。

地底なのだからもちろん暗いのですが、魔力の杖が蛍光灯のようにぼんやりと輝いて、光を作り出してくれました。だからスヌムは見ることができたのです。

よくみると、足元には道があるではありませんか。ハイキング道のようにひらちなものだけれど、道には違いありません。

「この道をどっちへ行けばいいんだろう?」

手がかりはなく、斯ムは困つてしまつたのですが、頼りになるのはやはり魔力の杖でした。

まずスヌムはあてずつぱうに左へ行こうとしたのですが、どうい
うわけか魔力の杖は不意に光るのをやめ、あたりは真っ暗になつて
しまつたのです。

当惑して、スヌムは体を右に向けました。するとどうでしょう。
魔力の杖はすぐに光を取り戻したのです。

「ははあ、右へ行けということなんだね」

スヌムは歩き始めました。もちろん魔力の杖は輝き続けたのです。
杖の光以外は真っ暗だといつても、周囲に音がなかつたわけでは
ありません。右手のどこかでサラサラと水が流れているのをスヌム
は耳にすることができました。

「ふうん、ここの穴の底にも小川があるんだな」

スヌムは歩き続けました。やがて前方に小さな家が姿を現し、彼
は目を丸くすることになったのです。

それは小屋のようにな小さな家でした。一軒だけポツンと立ち、あ
まり立派にも見えません。だけど窓からは光が漏れでいるではあり
ませんか。

足音を忍ばせて近寄り、スヌムはそつと中をのぞき込んだのです。

思いがけない光景に、スヌムははっと息をのみました。四角い部
屋の中央にいろいろがあり、そこで燃える炎がまわりをオレンジ色に
照らしているのです。

部屋の中は雑然とし、あまり片づいているとはいません。こんな地底にも動物がいて、ここに住む人はそれを狩つて生活しているのでしょうか。毛皮が何枚か壁にかけられています。

でもススムを驚かせたのは、その住人の姿だったのです。

「あれをヤマンバというんだな」

声には出しませんでしたが、ススムは思つたのでした。

いつから切つていないのか、バサバサした髪は腰に届く長さがあります。顔も手足もしわだらけで、いったい何歳なのか見当もつきません。

着物はぼろぼろで、色の違う布や毛皮を使って、あちこちにツギが当たられています。牙はとがり、ツメもクギのように長く恐ろしい妖怪なのでした。

ススムはヤマンバの小屋の中をのぞき込み続けたのですが、あるものを発見して、突然胸がドキンとしました。

部屋のすみには棚があり、道具類が雑然と乗せてあります。その中に分厚い本が混じつていることに気がついたのです。

表紙は革で作られ、立派すぎて、この場にはどうも似つかわしくありません。だけどススムを驚かせたのは、その本にはどこかで覚えがあることでした。

すぐに思い出しができました。お母さんが手に入れ、大切そうに毛皮の中に隠している1冊です。あの本は3巻でセットになつ

ていて、そもそもお母さんは、それを探しに人間世界へ来ていたのです。

あの棚の上にあるのは、その3冊の「ひのへ冊」に違にありません。体が熱くなるような興奮をススムは感じ始めました。この地底からどうやって脱出するかという問題はひとまず脇に置き、『どうしたらあの本を手に入れることができるだらう』と考え始めたのです。あの本を手に入れ、手渡すことができれば、きっとお母さんは喜んでくれるに違ありません。

ススムは頭をしぼりましたが、いい知恵はなかなか浮かびませんでした。

相手はあんなに恐ろしそうな妖怪なのです。正面からぶつかっても、まず勝ち目はないでしょう。

それにつひやって小屋のすぐ外については、いつ見つかってしまうかもしれません。ススムは、いったんこの場を離れることにしたのです。

足音をしぶせ、ススムはゆっくりと歩き始めました。そしてすぐにつひ水音を聞いた小川のそばまでやってくることができました。岩の陰になつて、ここならヤマンバに見つかることはないでしょう。

地面に腰かけ、ススムは考え続けました。

だけど向の結論も出ませんでした。頼りにならうなのは、結局

魔力の杖以外になかったのです。

ススムがあることを思いついたのは、この瞬間でした。

「なんとかして、僕はこの魔力の杖を使いこなすことができないかな」

もちろんススムに魔力の心得があるわけではありません。だけど、とにかく試してみることにしたのです。

日がすっかり暮れたことを確かめてから、ゼロ禅師とお母さんは寺を出ました。田指すのは、もちろん大野の屋敷です。

屋敷の前に着きました。もう夜だし、降りやんだといつても深い雪におおわれてるので、あたりに人影はありません。何かをこつそりやるには好都合ではありませんか。

お母さんが驚いたのは、雪の上に指で、ゼロ禅師が屋敷の見取り図をさつと描き始めたことでした。いかにもテキパキとしているのです。

「ゼロ、どうしておまえが屋敷の中の様子を知っているのだ？」

「」の家の主人から、少し前に妖怪退治を頼まれたことがあったのです。結局は断つたのだがね

「なぜ断つた？」

「今はそんなことよりも、屋敷の中のことを話さうじゃないか。値打ちのある古い道具をコレクションすることを、この屋敷の主人は趣味にしていた。

そのコレクションを、小さな博物館のよじにして飾っているのだよ。ムササビ笠が展示してあるのは、まれこの部屋さ。

鍵のかかるガラス戸棚に入れてあるが、ガラスを壊すのは簡単なことじやうつ？」

「おまえは何をする？」

「わしはここに残つて、物音を聞きつけた家人が飛び出しあきたら、一芝居打つことにしよう。なあに、まず失敗はしないぞ」

ゼロ禅師の予想は正しかつたようです。足音をしのばせ、お母さんは屋敷の中に忍び込むことに成功しました。そしてゼロ禅師のいうとおりの場所でムササビ笠を見つけ、盗み出したのです。

戸棚のガラスを割るときには、もちろん大きな音がしました。それだけでなく、警報ベルまでが屋敷中に鳴り響いたではありませんか。

笠を口にくわえ、お母さんは身をひるがえらせることになりました。もう一度ガラスを割つてお母さんが外へ飛び出してきたのが、さつきゼロ禅師と示し合わせていた窓だったのです。

ガラスのカケラをまき散らしながら雪の上に降り立つてさつと駆け出し、お母さんがあつとく間に姿を消してしまったのは、いつまでもあつません。

屋敷の人々はもちろんすぐに追いかけてきました。でもこの人たちが発見したのは妖怪、ギツネではなく、なんと雪の上でしりもちをついているゼロ禅師の姿だったのです。

「ゼロ禅師、どうなさいたのです？ 泥棒の姿を見ませんでしたか？」

起き上がるのを助けてもらひながら、ゼロ禅師は頭をかきました。

「いやいや、ひどい目にあいました。あんなに大きな妖怪ギツネは見たこともありませんな。おたくの窓を突き破つて突然飛び出してきたのです。妖怪ギツネにとつても思いがけないことだつたらしく、わしと正面衝突してしまいましたな」

「そのギツネは、この屋敷から大切なものを盗んでいったのですよ。すぐに捕まえないと」

「いや、あとを追う必要はありますまい。わしとぶつかったショックで、せっかく盗んだ物をやつは落としていきました。ほら、ここにありますよ」

そういってゼロ禅師は、古ぼけたあの笠を取り出したのです。

「こんなに暗い中では、当然かもしれません。人々はすっかりだまされ、お礼まで言ってゼロ禅師から笠を受け取り、屋敷の中へ戻つていつたのでした。

そのころお母さんは地下トンネルを進み、もうあの橋までやつてきました。

その頭にはムササビ笠が乗り、笠を留めるヒモも器用に結び合わされています。そして息を吸い、お母さんは橋の上から身をおどらせたのです。

もちろんいつたんは落下を始めたのですが、ムササビ笠には強い魔力があります。すぐに風をはらみ、まるでパラシューートのよう働き始めたのでした。

如前のとおり本当にマサナビのようではありますか。 ゆっくりとした速度で、おゆるく下降しました。

そのころススムは、魔力の杖の使い方をいろいろと試していくところでした。しかし、なかなかうまくいきません。

「おい魔力の杖、なんとか言え」

でも何も起こらないのです。光が消えることはありませんでしたが、何か役に立つ道具が現れるわけでも、どこから頼もしい味方を呼んでくれるわけでもないです。

ススムは、だんだんイライラしてきました。

「おいおまえ、僕をバカにするんじゃないぞ。お母さんと言いつけるの」

だけどやはり何も起こりません。ススムは魔力の杖を振り回し続けました。ところが突然、背後から誰かの声が聞こえてきたのです。

「ほう、おまえはなかなかよい道具を持っているじゃないか」

ススムは飛び上がって驚き、あわてて振り返りました。

そこにはあのヤマンバがいたのです。

いつの間に忍び寄ったのか、ススムはまったく気づいていませんでした。でももちろん、魔力の杖を振り回すのに夢中になつて上げた声を聞きつけられたに違いありません。

何一つ行動を起こすことができないうちに、ヤマンバの長い腕がさっと伸びてきて、魔力の杖はもぎ取られてしまいました。ススムにさじつかることもできなかつたのです。

5分後には、ススムはヤマンバの小屋へと引きずり込まれていました。両手首をつかんでぶら下げられ、抵抗することもできなかつたのです。

ヤマンバは腕を長く伸ばし、なんとかさじつけてやるかうとするススムの足をたくみに逃れたのでした。

小屋の中の様子はさつきと変わらず、オレンジ色の炎があたりを照らしています。草のつむを使って手足をしばられ、ススムは床に転がされてしましました。

ところがヤマンバは、思わずことで田をパチクリさせることになりました。何の予告もなく魔力の杖の光がすうっと薄くなり、ついには完全に消えてしまつたからでした。

腰に刺していた魔力の杖を引き抜き、ヤマンバはススムに迫りました。

「おー小僧、この明かりはどうやって使うのだ? どうすればもう一度光らせることができるのだ?」

さじつからヤマンバは、魔力の杖をただの照明器具だと思つているようです。手の中でブンブン振り回しながら、同じ葉を繰り返しました。

「小僧、わしに呪文を教えい」

「呪文つて？」

「これを光らせるための呪文だよ。暗闇の中での棒はとても役に立つに違いない」

「ああ、その呪文ね」

ススムは急いで頭を回転させなければなりませんでした。うまい答えを返さなくてはなりません。その答えが、彼の運命を決めるのです。

だけど幸運にも、ススムは思い出すことができました。以前お母さんに魔鏡を見せたときに、こんな言葉を聞かされたのです。

「ススム、おまえには鼻歌を歌うクセはないだろうね」

ススムはたずね返しました。

「鼻歌つて？」

「何か用事をしながら、知らないうちにフンフンと歌つていることや。魔鏡をポケットに入れておくのはいいが、不用意に歌うと大変なことになるのだよ」

「どうして？」

「事情があつて、魔鏡はある歌がとても嫌いなのだよ。魔鏡に聞こえるといひで、それを口ずさんだりしていひと……」

「どうなるの？」

「それはおまえ…、とにかく大変なことになるのや。よく覚えておおや。魔鏡が最も嫌う歌を、おまえだけに聞こえるよつて、これから歌つてやるわ」

やうにうつスムの耳に口を近づけ、やれやくやうにうつお母さんは歌い始めたのです。

スムはびっくりしてしまいました。

「お母さん、それって誰でも知っている歌じゃないか」

「やうだよ。だから危険なのさ。おまえが魔鏡をポケットに入れているとき、そばで誰かがこの歌を歌い始めたとしてござりや。タン口づの一つや二つではすまないのだからね」

やうこつ余話をお母さんと交わしたことを、スムは思い出したのでした。

ヤマンバはまだしゃべり続けていました。スムの肩をつかみ、大きく揺さぶるのです。

「やい小僧、この棒を光らせる呪文を教える。教えないといひにあわせるわ」

「ああ教えるよ。教えるよ」

「では早く言え」

「だけど呪文じゃないんだよ。その棒を光らせることは、あんたが歌を歌わなくちゃならないんだ」

「歌だつて？ どつしてわしが？」

「だつて、その棒はあんたが使つんでしょ？」

「ああ、言われてみればそうじやな。では一体、何の歌を歌つのだ
？ 早く言え」

本物のムササビのみでクルクルとカーブを描きながら、お母さんは地底へと降りてゆきました。

穴の底があつとこづ聞に近くなり、ストンヒツモヘ着地する」とができたのです。

お母さんはあたりを見回しました。もちろん、しつぼを光らせることを忘れてはこません。そしてすぐに、カラカラと水の流れる音がすることに気がついたのです。

“ひや、ひいかに小川があるよつです。足音をじのばせ、お母さんせ走り始めました。

小川はすぐ見つけられることができました。透明な水が勢いよく流れています。その水に乗つて、並ぶつかりながら何かが流れることに気がついたのは、このときのことでした。

拾い上げてみると、なんとハンカチだったのです。

もちろん見覚えがあつました。この日の朝、スヌムの手に持たせたものだったのです。

これは何かのおつに、スヌムがポケットから落としたものに違ないつません。するとスヌムは、この小川の上流にこむのです。

小川にさつて、お母さんがさつと走り始めたのは、こつまでもあります。

だけどお母さんも、めったやたらと騒けたのではあります。鼻を近づけ、地面の匂いをかぎ続けることを忘れませんでした。

いくらも進まない「ひ、ひ、ひ」と、ススムの匂いをかぎつけることができました。それはもちろん、ススムが座り込んで、魔力の杖の使い方を練習したあの場所だったのです。

匂いをさうにしたひ、ひ、ヤマンバの家を見つけるのは簡単なことでした。

ヤマンバの家に近づき、用心深くお母さんを、まず内部の様子を探ることにしました。そして、聞こえてくる物音に眉を上げたのです。

家中では、誰かが泣いているようです。その泣き声に混じつて、なんとススムの声が聞こえてくるではありませんか。

泣き声を立ててているのは、さうめいが取った女のようです。

「ああ痛い、おお痛い。坊ちゃん、お願ひだから、わしをたたくのをやめなけどおくれ」

それに答えるのはススムの声です。

「ふん、今せら坊ちゃんなんて言つても遅いよ。このヤマンバめ

「悪かった。わしが悪かった。あやまるから、この乱暴な鏡をなんとかしておくれよ。光る棒も返すよ。あんたが欲しがつている物もあげるよ。まあ持つておこい」

「よおし。じゃあ魔鏡よ。僕のところに戻つておいで。

おこいひ、違つよ。僕はヤマンバじやない。かみつゝやつがあるか。持ち主の顔を見忘れたのかい？」

その後もしばらべドタバタと騒ぎは続いたのですが、やがて静かになりました。

少しして小屋の戸が開き、ススムが姿を見せたではありませんか。お母さんが戸を丸くしたのは、いつまでもありません。

「ススム、おまえは中で何をしていた？　これは誰の小屋なのだい？」

小屋の中からヤマンバのうめき声がまだかすかに聞こえますが、ススムは平気な様子です。

「これはヤマンバの小屋だよ、お母さん」

「ヤマンバ？」

「でも大丈夫。魔鏡が守ってくれたからね。ヤマンバがあの歌を歌うように仕向けたら、魔鏡が怒つてね。まるで「ウモリみたいに飛び回つて、ゴシンゴシンとヤマンバを体中じづきまわすんだよ」

「おまえはケガをしなかったのかい？」

「魔鏡がひどく興奮して、ちょっとかみつかれたけど大丈夫だよ」

「それならよいが…」

「ナリだお母さん、これを返すよ」

「ああ、私の魔力の杖だね。役に立つたのならよかつた。といひでススム、おまえは疲れないかい？ ヤマンバももう憑さはしないだらうから、よければ私は、この穴の中を少し調べてみたいのだよ」

「どうして？ 何か探し物でもあるの？」

「なんだススム？ なぜおかしそうに笑う？ ああ、むちゅん私は探し物があるのを」

「何を探すの？」

「ある場所で噂を聞いたのだよ。私が探ししている本の一冊が、猫坂のもつとも深い地下に眠っているとね。それがなんと、サラサラと小川の流れている穴の中だそうだ」

「ふうん。小川ならそこにあるよね。でもお母さん、苦労して探す必要はないと思つよ。ほら」

体の後ろに隠していた物を、このときススムはそつと取り出したのです。

皿を丸くし、続いてお母さんが瞳をそつと小さくするのは、見ていて楽しい眺めでした。

「ススム、この本をおまえはどこで見つけたのだい？」

「話は帰つてからにしてよつよ。僕はおなかがすいたやつた。禅師も心配してこらだらう」

「ゼロ禅師のことなど、私にほんとうもよー。さあ私の背にお乗り。早く家へ帰り」

もつ地底には用はないのです。斯スムもうなづきました。

降下していくときにはムササビ笠が必要でしたが、今は魔力の杖があります。

杖の魔力で、斯スムとお母さんは、あつとこつ間に橋の上まで戻つてくことができました。あとはトンネルを抜け、地上へ戻つてゆくだけでした。

レバして今回の冒険は終わったのです。一人の無事な帰りを、もちろんゼロ禅師は喜んでくれました。でもそれだけではなかつたのです。

お母さんの頭からはずされ、ムササビ笠はゼロ禅師に手渡されました。だからゼロ禅師は、どうこつ理由をつけてこれを大野家に返したものか、頭を悩ませることになつたのです。

でも禅師のことです。あつと何かいい手を考えることでしよう。

町をおおつていた深い雪もすっかり消え、猫坂は再び平和を取り戻すことができました。

「猫坂の町には、急にネズミの姿が増えたのではないか」

そういう噂が、突然広がり始めました。

はじめは斯スムも半信半疑だったのですが、あるとき何十匹もかたまつて道路を横断する姿を目撃して、ついに信じざるを得なくなりました。

家にいても、思いがけないところに現れるネズミに「悲鳴」を上げることは、珍しくなくなりました。

さすがにお母さんは平氣な様子でしたが、勝手口を出入りしたり、物置の戸を開けるたびに、ミチコはビクビクするよつになりました。彼女はあまりネズミが好きではなかったのです。

学校で授業を受けていても、ネズミが天井からボトンと落ちてくることまであるほどでした。電車に乗れば、イスの上に2、3匹座つている場合だつてありました。

これはもう絶対に異常な事態ではありませんか。

ネズミの大繁殖に関しては、もちろんゼロ禅師も相談を受けました。その場には斯スムも居合わせたので、話を聞くことができたのです。

相談者は猫坂の市長でした。しかし相談内容に新しい点はなく、ただ「ネズミが増えて困っている。なぜこうなったのか、理由はま

つたくわからない』といつだけで、何の参考にもなりませんでした。

「朝もネズミが電線をかじつて電車を止めたものだから、学校に遅刻しそうになり、スヌムも関心を持つていたのです。家に帰つてから、スヌムはお母さんに話しかけました。

「ねえお母さん、最近本当にネズミが増えたね」

「私も気がついているよ。ミチコなどは、一日に何回も悲鳴を上げている。あの子はネズミが好きではないらしい」

「お母さんはネズミが嫌いじゃないの？」

「私は好きでも嫌いでもないな。食つてもあまりつましくはない」

「えつ？ お母さんはネズミを食べたことがあるの？」

「妖怪ギツネの毛皮を着ていると、食べ物の好みもギツネに似てくるのだよ。それでも私は、ネズミをあまりうまいとは感じないな」

「ふう」

安心して、スヌムは少しため息をつきました。

「だがスヌム、ネズミはそもそも妖怪ギツネの大好物なのだよ。もしかしたらネズミの急な増加は、妖怪ギツネと関係があるのかもしないね」

翌日寺を訪れたとき、ススムはむづやく、お母さんが言つたことを伝えたのです。

ゼロ禅師は首をかしげました。

「ススム君の家の妖怪ギツネがそんなことを言つのかい？ ふうむ、これはいいヒントかもしれないぞ。少し調べてみようじゃないか」ススムを連れて、ゼロ禅師は町へ出ました。裏通りを歩いてみることにしたのです。

すぐゼロ禅師は眉をひそめることになりました。

でもススムには意味がわかりませんでした。ススムの町には、いつもと変わらない町の風景としか見えません。

「禅師ギツしたの？ 何か変なことがあるの？」

「わしたちは、もうかなり遠くまで來たじゃないか。だがこれだけ歩いても、妖怪ギツネの氣配をまったく感じることができないのじやよ」

「妖怪ギツネの氣配つて？」

「この町の妖怪ギツネたちは巧妙に姿を隠し、人間に見つかれないよつこして生きてる。それでも匂いや氣配まで完全に消すことはできなこり」

「本当に一匹も気配を感じることができないの？」

「できないまま、もう40分近く歩いているね。普段ならすでに7匹や8匹は感じてよむやうなものだが」

「まさか、猫坂の町にはもう一匹も妖怪ギツネがいなくなつたといひことなのかな？」

「たぶんそうじゃろう。斯スム君の家にいる一匹を除いてはね。すまないが家に帰つたら、このことを質問してみてくれるかい？」

「うん、わかった」

でもその必要はなかつたようだ。寺へ戻つてきた一人を、思ひがけず迎えてくれた者がありました。

寺の中庭には一匹の大なキツネがいて、地面につづぶせになつたまま、ゆっくりとしつぽを動かしていました。もちろんそれは、斯スムにはおなじみの姿だつたのです。

ゼロ禅師が目を丸くしました。

「おやキツネさんではないか。ちよつといい。斯スム君に伝言を頼むつて思つていたところだよ」

お母さんはジロリと見つめ返しました。

「気軽に話しかけないでもらいたいな。今日は妖怪ギツネ一族を代表して来ているのだぞ」

「代表だつて？」

「町の中に妖怪ギツネの姿が見えないのを私も不思議に思つて、少し調べてみたのさ」

「それで何がわかつた？」

「誰かが大規模に妖怪ギツネ狩りを行つてゐる。それを恐れて、妖怪ギツネたちは猫坂を離れ、みな避難してしまつたのさ」

ススムが口を開きました。

「それとネズミが増えたことが、どう関係あるの？」

お母さんは答えました。

「ネズミは妖怪ギツネの大好物だからさ。その妖怪ギツネがいなくなり、取つて食べる者がいなくなつては、ネズミが大発生するのは当たり前だよ」

「ふうん」

ゼロ禪師が言いました。

「妖怪ギツネ狩りというが、すでに何匹か狩られているのかな？」

「それが100匹は下らないらしいぞ。『妖狐ハンター』というらしいが、この妖狐ハンターがいなくならないかぎり、妖怪ギツネたちも猫坂に戻る気はないそうだ。猫坂は、

「いずれネズミで埋まつてしまつだらうな」

ゼロ禅師はしぶい顔をします。

「キツネさんや、その妖狐ハンターとやらせ、どにどいるのかな？
正体はわからないのかい？」

「残念ながら、正体は誰も見たことがないそうだ。見た妖怪ギツネ
はすべて狩られてしまつたのでな」

「ふつむ。しかし猫坂中の妖怪ギツネが姿を消した今、妖狐ハンタ
ーはあせつてゐるだらうね」

「それはやうかもしれんな、禅師。とにかく私も氣をつけろ」と
しきり。まあススム、家に帰るから私の背にお乗り」

「うん」

ゼロ禅師に手を振り、ススムは言われた通りにしたのです。

さつと駆け出し、お母さんとススムの姿は、ゼロ禅師の前からあ
つとこづ間に消えてしましました。

お母さんの背中に乗って、共に駆けるのがススムはとても好きでした。

お母さんは風のよけに速く、何回もジャンプを繰り返しながら、家々の屋根づたいに飛びように走ることができたのです。お母さんのしなやかな足は、着地してもコトコトとも音を立てず、瓦を一ミリ動かすことなどありませんでした。

寺を離れると、すぐにススムは話しかけました。

「ねえお母さん、妖狐ハンターの正体は誰だらうね？」

「私も知らんが、妖怪ギツネを100匹狩るなど、尋常なことではない。何か理由があつてのことだらうね」

「妖怪ギツネの毛皮って、お金になるの？」

「ならぬことはあるまいがススム、おまえは、私が着てているこの毛皮のことを言つていいのかい？ これは自然死した妖怪ギツネから作ったものさ。狩られて死んだ妖怪ギツネでは、魔力の強い毛皮は作れないのだよ」

「へえ

「ああ斯スム、我が家が見えてきたぞ」

その言葉に身構え、斯スムも着陸する用意をしたのです。でもそ

れは無駄になってしまった。

お母さんの体に突然緊張が走るのが、毛皮越しであつても感じられたのです。

「お母さん、どうしたの？」

「ススム、しつかりつかまれ」

そう叫んだかと思うと、なんとお母さんはもう一度大きくジャンプしたのです。長い毛をギュッとつかむのがなんとか間に合ひ、ススムは振り落とされないですみました。

家の屋根はあつという間に小さくなり、ススムとお母さんは道路の上空に出ました。そこからは電柱の頂上をつたい、まるで忍者のよひことして、お母さんは再び走り始めたではありませんか。

本当の全力疾走でした。お母さんのただならぬ様子に、ススムも口を閉じていることにしました。お母さんは、それほど緊張して見えたのです。

電柱の頂上から頂上へと、お母さんはジャンプを続けました。心を決め、ススムが口をそつと開いたのは、少したつてからでした。

「お母さん、僕たちは誰かに追われてるの？」

「家の近くまで来たとき、私は気配に気がついた。案の定、今も追つてきているよ」

「本当に？ 僕には何も見えないや」

「何かの魔力で姿を隠しておるのだから。よべ、じらふ。やつが足をついた瞬間、電柱が震えることがわかるよ。」

それはお母さんの言つとおりだったのです。振り返つて田をこじらしたのですが、斯スムにも見ることができました。あとを追つてくる見えない敵が足をついた瞬間、たしかに電柱がピクリと震えるのです。

「電柱の震え方がすばらしいや。やつはお母さんよりも大きいの？」

「そうかもしねないね。とにかく、私たちの家の場所をやつに知られるわけにはいかないのさ。うまくまいてしまわないと、家には帰れない。それはおまえも覚悟をおし」

「うん、わかった」

しばらぐの間、斯スムとお母さんは走り続けました。それでも敵はピタリと着いてくるのです。

「しつかいつつかまつてこるよう！」と斯スムにさせやらせ、お母さんは何度もサークスのように急な方向転換や、左右折をやってみました。

それでも敵は離れず着いてくるのです。まるで機械のように正確ではありませんか。

次第にお母さんも、薄気味悪く感じ始めました。

「斯スム」

「どうしたの？」

「どうも敵の様子がおかしいとは思わないか。いくらなんでも正確に追つてきすぎるのではないか」

「本当にやうだね。僕も不思議な気がしてきた」

「少し実験してみよう。おまえも協力おし」

「実験つて？」

「あそこにある閉店してしまったレストランの看板が見えるか？」

「うそ、もう何日も空き家になっている感じだね」

「看板に書いてある電話番号を覚えておきなさい」

「どうして？」

「いいから覚えておおき。次に前方のあの大きなビルを『こらん。あのビルの陰に入つて敵の目から見えなくなる一瞬、私はおまえを地上に降ろす。その後、私はまた電柱の上に戻つて走り続けるが、おまえは…』

「何をするの？」

「公衆電話を探して、さつきの空き家のレストランに電話をかけるのだよ。電話番号を間違えるな。10円玉は持つていいね？」

「うん、あると嬉しいよ」

「 もうススム、ビルが近づいてきたぞ。用意はいいな？ 行くぞ」

一瞬息を止めるよにして、ススムとお母さんとビルの裏側へと飛び込んでいきました。

作戦はうまくゆきました。地面に降りてススムは駆け出し、お母さんはジャンプして、電線の上に戻ったのです。

お母さんがそのまま走り続けたのは、いつまでもありません。

敵が頭の上を通り過ぎるとき、電柱が揺れ、電線が重そうにたわむのをススムは見ることができました。

公衆電話もすぐに見つけることができました。受話器を取り、ススムはダイヤルを回したのです。

電話線のむこうで、すぐにベルが鳴り始めるのがわかりました。誰もいないレストランの中で、電話機がけたたましい音を立てているさまを、ススムは想像することができました。

だけど、のんびりしている暇はありません。受話器をダラリとぶら下げたまま、お母さんと別れた場所まで、ススムはまた駆け戻つたのです。

お母さんは1分もしないうちに姿を見せました。再びススムを背に乗せ、電柱の上へと飛び上りました。

「お母さん、どうだったの？」

「ススム、私たちは間違っていたようだ。やつは今も私たちの後ろを走ってきているか？」

ススムは振り返りました。

「やつん、いないみたいだよ。電柱もしならないし、電線も揺れてない」

「だらうね。つこさつきわかったことだが、やつは私たちのようだ。電柱の上を駆けているのではなかつたのだよ。やつは電線の中を走つていたのさ」

「本当に？ まるで電気みたいじゃないか」

「私も最初は信じられなかつた。おまえが電話をかけた後、やつがあのレストランをたたき壊すさまを見せてやりたかつたよ。やつは、おまえが家へ電話したと思つたのわ」

「じゃあやつは、僕がかけた電話を追いかけて、電話線の中を通り、あのレストランまでたどつていつたといつたといつたの？」

「やつとしか考えられまい？ やつは私たちの家を知りたがつていたのさ。家の場所さえわかれれば、たとえ今日取り逃がしてしまつても、またいつでも私を待ち伏せできるではないか」

「お母さんのことを、この町に残つた妖怪ギツネの最後の一匹だと思つてゐるんだね」

「やつらじこ。おまえのかけた電話にだまされ、やつは私を見失つてしまつた。家を知ることもできなかつた。だから腹いせにレストランをたたき壊したのだよ」

「やつの姿は見えた？」

「いいや、それが何もわからなかつた。姿の見えぬままたき壊したのさ。まるで透明な巨人に踏みつぶされたかのよつた眺めだつたよ」

「でもとにかく、やつをまく」とには成功したんだよ

「いや斯スム、安心はできぬぞ」

「どうして?」

「敵の正体がまだわからぬいからや」

翌朝になりました。お母さんが口を開きます。

「ススム、今日は学校へ行くのはおやめ

「どうして?」

「昨日の妖狐ハンターに警戒しなくてはならなかから。やつはおまえの顔を見ているのだよ。今も町の中をうろつき、おまえを探しているに違いない」

「でも今日、僕は学校でテストがあるんだよ。休むわけにはいかないよ。お母さん、どうせやつも僕」

「テストなどほっておおき」

「ダメだよ。僕は行くからね。お姉ちゃんももう登校しちゃったんだ。僕も急がないと」

「ええいお待ち。仕方がないから、今日は私も着てこへ」という

「お母さんも学校に来るの? そんなのダメだよ

「うるさい。私はもう決めたのだ。今日のおまえは、とても危険なのだ」

「うなつたら、何を言つてももう絶対に聞いてくれないことはス

スムもよくわかつていました。だからお母さんの同行を承知するしかなかつたのです。

「だけどお母さん、どうこう格好で学校へ来るの？ その毛皮のま
まじゃだめだよ」

「いわゆるお母さん、少しの間、むいづを向いていなさい」

もちろんスムは言われた通りにしました。10秒後に再び振り
返り、目を丸くしたのです。

「あれお母さん、女の子に変身したの？」

スムの言葉どおり、そこには女の子がいたのです。スムと同じ年頃でしょうか。黒い髪をお下げにあんでいます。セーラー服まで身につけているではありませんか。

「どうだスム、これでおまえの同級生に見えるか？」

「見えるナビお母さん、本当にまえのむせびこいで、目を光らせていなくてはな
らん」

しぶしぶだつたのですが、お母さんを連れてスムは家を出たのです。そのまま駅へと急ぎました。

校門を入りながら、お母さんが呪文をとなえ始めていたことに気がつき、スムは小さな声でしゃべりました。

「お母さん、何の呪文をとなえているの？」

「私の姿を見ても、誰も怪しまないようこなしたのだよ。ずっと以前からいるただの女子生徒に見えるようこなした。誰も気がつきはしないわ」

「ふうん」

じつして、ススムの長い一日が始まったのでした。

まず最初の問題は、教室にお母さんの机がないことでした。

だけどいくら呪文を使っても、机を作り出すことはできません。他の方法で解決しなくてはなりませんでした。

「ススム、予備の机やイスはどこに置いてある？」

「1階の物置の中だよ」

「やつか。ではちよつどこい。あそこを歩いてくるジジイに持つて
いきよつ」

窓の外を見ながら、お母さんは何かの呪文をとなえているようでした。

だけど数分後、ススムは目をむくことになったのです。ガタガタと机を運んで教室に姿を見せたのは、なんと校長先生だったではありませんか。

「お母さん、あれは校長先生だよ」

「それがどうしたススム？　ああおまえ、じ苦労であつたな。机はそこに置け。よし、もう帰つてよろしい」

平気な顔をしているお母さんの背後に、ススムは隠れてしまいいたい気持ちでした。あまりの出来事に、同級生たちもみな驚いている様子です。

でも呪文の支配下にある校長先生は何も感じないようで、黙つて廊下を戻つてゆきました。

ベルが鳴り、担任の先生が姿を見せました。すぐに出席を取り始めます。

ススムの耳に顔を近づけ、お母さんがやせやいたのは、このときでした。なんとお母さんは、ちやっかりススムの隣に席を取つていました。

「ススム、私の名は何と言つのだ？」

「知らないよ、そんなこと。お母さんの名前は出席簿に載つてないんだよ。先生が変に思つに決まつているよ」

「ふうん、あのノートは出席簿とこいつのか。だが今ならススム、呪文をとなえて、私の名を出席簿に書き込むことができるわ。

まあ早く私の名を考え出せ。時間がないのだぞ」

ススムは大急ぎで頭を回転させなくてはなりませんでした。女の子の名前で、出席簿の最後に載るのだから、アイウエオ順も考えに入れなくてはなりません。

「ええつと、このクラスでアイウエオ順が一番最後の女の子は、なんて名前だつけ？」

ススムは頭を悩ませました。

むづくつしてこる余裕はないのです。ススムがお母さんにてれや
き返すことができたのは、むづきり、ぎりのタイミングでしかありま
せんでした。

でもそれもなんとか間に合って、名簿の最後に、先生はその名を読み上げてくれたのです。

「輪々野わわ子さん」

それに答へ、お母さんは平氣な顔で返事をしました。

『輪々野』なんて名子は、実在するかどうかもわからなかつたのですが、ススムが苦しまぎれにでつち上げたものです。

でもこの前前なり、文句なく出席簿の一一番最後になるに違ひありません。

テストは無事に終わり、毎食の時間になりました。

今日は給食のある日でしたが、当然ながらお母さんの食事は用意されていません。お母さんはお母さんやあきました。

「困ったなススム。私はもう腹ペコなのだよ」

「ちよつと教室を出て、外で何か食べてもらひへ」

「ちよつといえば、この学校でもネズミがたくさん出て困つてこないと言つたな?」

「お母さん、もし校内でネズミを取つたりしたら、僕は一生口をきかないからね」

「ひむかこやつだ。ではどうじろとこつのだ? おまえの給食を半分よこすか?」

「それはイヤだ」

「では仕方がない。外へ出て、何か食べてこよつ

お母さんはサッと姿を消しました。そして毎食時間が終わる頃、何食わぬ顔で戻ってきたのです。

「お母さん、何を食べたの?」

「おまえの言いつとおり外ですませたのさ。ついでに学校のまわりも一回りしてきたが、妖狐ハンターの気配はなかつた。少しほ安心してよいのかもしだれぬ」

「外で何を食べたの？」

「校門の前にすし屋があるだろ？ あそこへ行つたのさ。なかなかつまかつたぞ。おまえも来ればよかつた」

「あの店は教頭先生の奥さんが經營してるんだよ。その姿のままで行つたんでしょう？ あとで職員室に呼び出されると想つよ」

「何を言いつ？ では私は妖怪ギツネの姿で行けばよかつたのか？ すぐに妖狐ハンターに見つかってしまうではないか」

「ひひん、僕が言つてるのはそつこつことじやなくて……、もういいや」

「細かいことは気にするな。教師たちがおまえをどんなに叱つても、私が守つてやるよ。妖狐ハンターの正体がわかるまでは、私は毎日この学校へ来ることに決めたのだから」

ススムは思わずため息をつきましたが、もう何も言ひませんでした。このときススムは、妖狐ハンターが早く現れてくれればいいとまで思つていたかもしれません。

午後の授業が始まりました。

午後の最初の授業は数学でした。

授業が始まつて早々、なんと先生はお母さんを当たではありますせんか。黒板には練習問題が書いてあり、それを解いてみよといつのです。

斯スムは思わず胸がドキリとしましたが、どうする?とわざわざせん。お母さんはすつと立ち上がり、口を開きました。

「なあ教師よ、私にそのような問題を解くことができる?と、おまえは本気で思つてこるのかね?」

もちろん先生はすでに魔力の支配下にあつたに違いありません。顔色を変え、深くお辞儀をしたのです。

「ははつ、私が心得違いをしておりました。まことに申しわけございません」

「わかればよろしく。では授業を続けたまえ」

お母さんはまた斯スムの隣に腰を下ろし、いかにも恐縮した様子で、先生は授業を続けたのです。

先生は生徒を屋上へ連れ出しました。

「お母さんがあなたがわざわざおもした」

その次の授業は理科でした。「雲の観察をする」とこつひとと、

「なあススム、あの教師は何を教えるつもりなのだ？　雲に乗つて空を飛ぶ術を教えるのか？」

「そりじゃないよ。セキラン雲とかイワシ雲とか、雲にまつろんな種類があるんだよ。それを勉強するんだ」

「ふん、そんなおとなしい雲よりも、どうせかなつかうナリ雲を眺めるほうがよほどおもしろいではないか。よし、一つ呼んでやる」

「お母さん、そんな」としきりやだめだよ

「なぜだ？　せっかく勉強に協力してやるからとこゝの」

「だつて…」

「いろいろがもう遅かったのです。お母さんは、すでに呪文をとなえていたのでした。

あれほど明るかつた空が一瞬で薄暗くなり、夜の闇のよつに黒い雲が西の空から走ってくるではありますか。

「ススム、よく覚えておおき。呪文で呼ばれた雲は常に西の方角からやつてくるのだよ」

だけじゃんな言葉も、ススムの耳には届いていませんでした。突然光り始めた稻妻に驚き、ビー玉のような大粒の雨に追われて、同級生たちと一緒に屋根の下へと駆け込んでいたのです。

「おこススム、何をしている? セっかく私が教材を呼んでやつたのに…」

お母さんの言葉は途中で止まってしまいました。なにやら異常なことに気がついたからです。

呪文に呼ばれてやつてきたのは、カミナリ雲だけではありますでした。なんと雲の上には何かの妖怪が乗っているのです。

これはお母さんもまったく予想していない出来事でした。一瞬ぽかんと口を開けてしまつたほどです。

妖怪の恐ろしい姿に、先生や同級生たちはとっくに逃げ出しています。

カミナリ雲は荒れ狂い、相変わらず大粒の雨をまき散らし、口口とカミナリを鳴らしています。そのたびに雲の内部では、フラ

ツシユのように明るい稻妻が輝くのでした。

身をかがめながらススムがお母さんのところへ戻ってきたのは、このときでした。

「ススム、あの妖怪の姿が見えるか？」

「なんとこう妖怪なの？ 変な格好をしてるね」

本当にススムの言ひとおりだったのです。

体の大きさはバスほどもあり、手足は長くてシマ模様があり、ヘビのようにウロコのあるしつぽとサルのように赤い顔があるので。胴体は犬に似ていますが、もつとずんぐりした形です。

「ススム、あれはヌエとこうのだよ」

「ヌエ？」

「電気とカミナリの妖怪でな…。 そうか。 電気の妖怪だから、電線の中を自由に走ることができたのだな」

「あれが妖狐ハンターの正体なの？」

「そりゃりしー。 カミナリ雲の中に潜んでいたのを、知らずに私が呼び出してしまったという」とか。 さあススム、私の背にお乗り」

その言葉に驚き、ススムが振り返ったときには、お母さんはすでに妖怪ギツネの姿に戻っていたではありませんか。

ススムがすぐ言葉に従つたのは、こつまでもあつまセん。

「ヒロー、ヒロー」

奇妙な声が聞こえました。『じつやうスエが鳴いているよつです。見かけによらずか細く、かわいらしげ声を出すものでした。

お母さんが言いました。

「これさまずごめん、ススム」

「じつじつ？」

「メモのやつ、もつとたくさんカミナリ雲を呼ぶつもりだ。電気はやつのエネルギー源だからな。あまり強く、凶暴にならっても困る」

「じゅあじゅあゐの？」

「カミナリ雲が集まつてくる前に、なんとかせねばならんところへ」と。しつかりつかまれ。行くわ」

サツと走り出したかと思うと校舎の中へ飛び込み、お母さんは階段を一気に駆け下つていつたのです。

「背中」にこるススムに、お母さんが話しかけてきました。

「ススム、」の学校から見て、ゼロ禅師の寺はどの方角になる?」

「ええと東だよ。どうしたの?」

「さつさも言つたらう? あのカミナリ雲は、西から東を向いてしか移動することができないのさ。寺が東にあるのならよ。雲に乗つたまま、ヌエは私たちを追つてくるだう?」

お母さんの言つとは正しかったようです。

学校を飛び出し、一人は再び電柱の上を走り始めていたのですが、カミナリ雲はピタリと着いてくるではありませんか。大きな日玉をむいて、ヌエもこりみつけてくるのです。

「ススム、ゼロ禅師はこま寺にこると思つた?」

「たぶんこると思つよ」

「ああ、それなら都合がいい」

あつところ間に一人は、ゼロ禅師の寺の近くまでやつてく「」とができました。大きな川も道路の渋滞も、電柱の上を走るとそこには関係ないからです。

最後に1回大きなジャンプをして、お母さんは寺の中庭に着地し

ました。そして戸口を突き破り、部屋の中へ飛び込んでいったのです。

お母さんの言葉が響きました。

「ゼロ禅師、いるか？」

奥で何か仕事をしていたようですが、ゼロ禅師はすぐに姿を見せました。

「ああスム君とキッネさんか、どうかしたのかい？」

「ムササビ笠を貸せ。早くしろ。一分一秒を争うのだ」

ゼロ禅師はとても察しのよい人でした。お母さんの声にただならぬものを感じたのでしょう。すぐに行動を起こしたのです。

「ほれ、ここにある」

スヌムがムササビ笠を受け取ったことを確かめると、お母さんはあとも見ずに寺から駆け出すことになりました。文字通り、ゼロ禅師にねむつ田もくれませんでした。

ヌムとカミナリ雲に追いつかれる前に、スヌムとお母さんは電柱の上に戻ることができました。再び全力で走り始めたのです。

「お母さん、ムササビ笠をどう使つつもりなの？　まさかヤマンバのこゑあの穴の中へ、もう一度降りてやるもの？」

「ムササビ笠は穴の底へ飛び降りるだけでなく、高っこりから地上へ降りるときに使えるのではないかね？」

「えつ？」

自分たちが猫坂市の中心部へ向かっていることにススムが気がついたのは、このときのことでした。田の前に、立てた鉛筆のよう屹立の高いビルが見えてきたのです。

ススムはつぶやきました。

「猫坂ステートビルだ」

「そのとおりだよ。私たちはこれからあのビルに登り、屋上へ行くのさ」

「どうやつひ？　あのビルには人がたくさんいるから、お母さんの姿を見たら大騒ぎになるよ」

「非常階段を使うのだよ。ビルの裏側にあるから、人田につくことはないわ」

お母さんは田舎に満ちた様子ですが、ススムは少し不安でした。思わず後ろを振り返らないではいられなかつたのです。

スエは相変わらずピタリと着いてくるではありますか。しかもカミナリ雲は今も稻妻を光らせ、大粒の雨をシャワーのようにまき散らし、「ロロロロと雷をどどろかせているのです。

ついに猫坂ステートビルまでやつてきて、非常階段に取り付くことができました。

非常時にしか開かない入口にはもちろん鍵がかかっていましたが、お母さんが一度体をぶつけるだけで、簡単に開いてしました。

あとはただ屋上へ向かって、何百段もの階段が、折れ曲がりながら続いているのです。斯スムたちがさつそく登り始めたのは、いつまでもありません。

壁上に着くとすぐに立ち止まつ、お母さんはススムを背中から降りました。

「ススム、よくお聞か。 もうすぐノルヘヌがやつてくる」

「うそ」

「やつの弱点はしつぼの付け根にある。 ヘビかくろのしつぼをしていることには気がついたかい？」

「うそ、ウロコをおわれたしつぼだね」

「実は、あれがやつの本体なのさ。 カミナリに打たれて死んだヘビの魂が、サルやタヌキやその他の動物の魂と出会い、合体して生まれた妖怪だからね」

「へえ」

「エネルギーの中心はヘビの魂だから、しつぼを切り離せば、ヌはすぐに死ぬや。 さうでおまえに頼みがあるのでよ」

「何をすればいいの？」

毛皮の下から、お母さんは魔力の杖を取り出しました。

「これをおまえに渡すから、肌身離さず持つてこなさい。 この杖がおまえを守ってくれるだろ」

「ふうふ」

ススムは手に取り、2回か3回振り回してみました。お母さんが続けました。

「私は物陰に隠れ、気配を殺してこよつ。ヌエのやつが田の前に出てきた瞬間、うまく見計らつてしまふをかみちぎりしてやるさ」

「僕はどうするの?..」

「おまえは屋上の中間に立ち、ヌエの注意をひきつけるんだ。なあに、まずやつは電気で攻撃していくことだらうが、すべて魔力の杖が引き受けてくれるわ」

「電気以外の攻撃をしてたらどうするの?..」

「それは…、そのときに考えよつ。あまり気にすることはない。その杖はとにかく強力なのだから」

お母さんに血信を持つて言われてしまつと、ススムは首を縦に振るしかありませんでした。それにもう時間がなかつたのです。ヌエはすぐそこまで迫っていました。

カミナリの音がはつきりと聞こえます。雲を離れ、大きくジャンプしてヌエがビルへと飛び移ってきたのは、この直後のことでした。

ススムは魔力の杖を強く握りしめました。どこへ隠れたのか、お母さんの姿はもうありません。

この巨大な怪物の相手を、ススム一人でしなくてはならないのでした。

さすが電気の妖怪ということなのでしょうが、ヌエが口を開くと、キバとキバの間に火花が散るのを見ることができます。

静電気の作用かもしません。ススムは自分の髪の毛が逆立ち始めるのを感じました。

ヌエがそこにいるだけで、コンクリートの床までが電気を帯びるのでしょうか。シマ模様のある巨大な足が動くたびに、バチバチと氣味の悪い音が聞こえるではありませんか。

ヌエが最初の攻撃を仕かけてきたのは、次の瞬間のことでした。

まるでヤリのようにススムめがけて、まっすぐにカミナリが飛んだのです。幽靈のように青白い色でススムを照らし出したのでした。だけどカミナリはススムを感電させるどころか、ショックを与えることだってありませんでした。お母さんの言葉どおり、魔力の杖がススムを守ってくれたのです。

なんと魔力の杖は、カミナリをすべて吸い取つてしまつたではありませんか。

この杖には電池のような能力があるに違いありません。平気な顔をしてペロリと電気を飲み込み、平らげてしまつたのです。

これに驚いたのはヌエだけではありませんでした。ススムも同じように目を丸くしていました。

2度3度とヌエは攻撃を繰り返しましたが、結果は同じでした。底なしの畠袋のように、杖はカミナリをじんじん吸い込んでゆくのです。

ヌエはくやしそうな顔をしていますが、ヌスムはだんだんおもしろくなつてきました。

「おじヌエ、もう電氣は品切れかい？」

意外にもヌスムの言葉は正しかつたのかもしれません。口を開いても、もはやヌエのキバの間を火花が飛ぶことはありませんでした。逆立つていたヌスムの髪もいつの間にか元に戻り、ヌエが足を動かしても、氣味の悪い音はもう聞こえません。

使いつくし、ヌエの体からは電氣がほとんどなくなつていたのです。このときをお母さんが見逃すはずはありませんでした。

物影から姿を現し、お母さんはヌエの背中へサッと飛び移つたではありませんか。まるでサーダスのような身軽をだつたのです。

お母さんのねらいが、ヌエのしつぽの付け根なのは明らかでした。もちろんヌエも黙つてはいません、かつと振り返り、お母さんとくみつこうとしますが、うまくゆきません。

背中に手でもつこてこるかのよつて、お母さんせずばやく察し、身をかわしてしまつのです。

腹を立て、ヌエは最後の電気を振りしだしたようでした。あの短距離なのです。カミナリのすばやさの前にせ、お母さんもよけきれるはずがありません。

なんとかしなくちや。

ススムはあせつを感じ始めました。

「おこ魔力の杖、なんとかしる。おまえのじ主人がピンチなんだぞ
やじてこのとき、奇妙なことが起つたのです。

お母さんはヌエのしつぽにかみつき、アゴに力を込めて締め上げています。ぐびの形をしたしつぽは、いかにも苦しそう、たつてこるではありませんか。

しかし一方で、ヌエの表情はとても冷静だったのです。牙の間に再び火花が飛び始めているのを見ることができました。

額に寄せているしわから、ヌエが体のすみすみから電気の最後の力ケラをかき集めているのがうかがえます。一瞬後には、それがお母さんめがけて発射されるのでしよう。

魔力の杖はススムの手の中にありました。だけどこの杖がこのとき突然、まるで折りたたみ式の釣りざおのように、するすると長くなり始めたのです。

もちろんススムには始めて目にする光景です。思いがけなさに田を丸くしたものでした。

魔力の杖はあつという間に十分な長さを持ち、ヌエのすぐそばまで達したのです。そしてそれは、ヌエが最後の雷撃を放つと同時にだつたではありませんか。

なんとか間に合わせることができました。ヌエが送り出した最後の力ミナリも、魔力の杖はいとも簡単に吸い込んでしまったのです。

お母さんは無事だったわけですが、ススムは少し電気ショックを受けてしまいました。

短いままであるときと、長くなっているときとでは、杖の働きが少し違うのかもしれません。これまでになかった刺激をビリビリと手に受け、斯スムは思わず魔力の杖を放してしまったのです。

「あつ」

だけビビッショリもありません。杖は一度は屋上を囲むべりにぶつかりましたが、カチンとはね返り、そのまま地上へと落ちていきました。

あつとこつ間に杖は小さく、見えなくなってしまったのです。

その間も、お母さんとヌエの戦いは続いていました。しかしそうに結末のつゝときがきたようです。突然プツンと大きな音が聞こえ、ヌエのしつぽは切断されてしまいました。

一瞬で力を失い、しつぽは床に落ちてしまいました。もう何の動きも見せなかつたのですが、落ちてきたのがちょうど足元だったのです、ススムは悲鳴をあげそうになりました。

しつぽを失つても、もちろんヌエはまだ完全には死んでいません。最後の捨て身の攻撃ということなのか、大きくジャンプし、屋上の外へと飛び出していきました。

だけどなんといつことじょい。その途中の上には、まだお母さんが乗つたままだったのです。

ススムはあわてて屋上のへつて近寄りました。そして塀越しに田撃することができたのです。

なんとかで、お母さんはスムの背中を離れていたのです。おやらいくポンとジャンプしたのです。

ムササビの力を生かし、パラシューターのようにしてお母さんは降下しておへとになりました。ススムはまつと鳥をつけてことができました。

一方でスムは、元気でスパートを上げて落下を続けていました。

本体であったしつぽが切り取られたことで結びつきが弱まったのです。まるでプラモモデルが壊れていいくときのように、サルの頭、トラの足、タヌキの胴とまじめになっていました。

そのすべてが地面に激突したのは、こつまでもあつません。

それを見届け、ススムは歩き始めました。

お母さんは、非常階段を降りておへと途中で再会することができました。ススムを迎えてくれたのです。

「お母さん、魔力の杖はどうなったの?」

「ちゃんと拾つておいたよ。もつサ皮の中にあるよ。」

「ヌエはなぜひしたの？」

「それが不思議なの。地面に落ちて確かにぐだけちつたが、近くへ行つてみると、もう影も形もなかつたのだよ」

「ススムはうなずきました。

「ははあ、やうこえればヌエのしつぽにも回りしが起ひつたよ。ヌエが地上へ落ちていつた後、気がついたらしつぽはもうどにこもなかつた。確かに床に落ちたのを見たのに」

「ススムを背中に乗せ、お母さんは階段を降りてゆきました。

「つまりススム、ヌエは何者かにあやつられていたところだね」

「どうしてわかるの？」

「もちろん、死体があつといつ間に消えてしまつたからさ。あれは、あわててヌエの死体を隠したのだよ。悪事が人目については困るのだろう」

「誰がそんなことをしてゐるの？」

「ふん、ラセツに決まつてこるわ。ラセツもあの本をねりつているのだから」

「お母さんが探してこるるの」とへ。

「そのうかの2冊を、私はすでに手に入れたさ。ラセツはそれを私が奪おうとしているのだよ」

「どうして？」

「あの3冊を手に入れた者は強い力を得て、妖怪世界を支配する」とができるからだ。その野望に燃えているのは、私だけではない

「それで？」

「ただラセツは、まだ私の正体を知らないのだろう。知っているのは、私が妖怪ギツネの毛皮を着て、猫坂のどこかに住んでいたということだけなのだ」

「だからヌエを使って、猫坂の妖怪ギツネたちを狩らせたというの？」

「それが正解だろうね。片っ端から妖怪ギツネを狩れば、いつか私に行き当たるところを考えだつたのだろう。罪もなく狩られて死んだ妖怪ギツネたちにとっては、迷惑な話だ」

「しかし今回の事件は解決することができたのです。ラセツのことはともかく、ヌエは退治され、避難していた妖怪ギツネたちも、すぐに戻つてきました。

猫坂を埋めつくしていたネズミたちも、いざれ数を減らしてゆくことでしょう。

食人鬼の怪異 その1

猫坂の町に食人鬼の噂が広がったのはごく最近のことで、もちろんススムの耳にも入りました。

さびしい暗い道を一人で歩いている子供を捕まえでは、バリバリと食べてしまう妖怪だというのです。いつたん日が暮れてしまうと、道を歩く人の数は目に見えて少なくなりました。

ゼロ禅師も調査を始めましたが、古文書を調べても何も得られず、みずから歩き回つて食人鬼を誘い出そうにも、襲われるのは子供ばかりとあつては、さすがにどうすることもできなかつたのです。

ススムがゼロ禅師の寺を訪れたのは、そんなころでした。当然話題は、食人鬼のことになりました。

「ねえ禅師、食人鬼に食べられた子供つて、もう何人ぐらいになるの？」

「ああススム君、とても困つたことだねえ。新聞によると、すでに4人にのぼるそうだよ」

「みんな猫坂市内なの？」

「そうさ。古い町だから、猫坂には薄暗い通りも多い。夕暮れ時こそんな場所で襲われるようだ」

「僕の学校も、毎日授業が一時間短くなつたよ。家の遠い生徒が、

明るいうちに帰り着けるようになつて。僕も放課後は、駅でお姉ちゃんと待ち合わせてから、一緒に家に帰るんだ」

「ああ、そういうふうがいいね」

「食人鬼の正体は何だと思つ?..」

「それがねススム君…」

ゼロ禪師の口から出た説明は、斯スムをひどく驚かせることになりました。寺を出て、家へ向かつて歩き始めながらも、何度もなく思い返さないではいられなかつたのです。

「もしかしたら、食人鬼の正体は僕のお母さんかもしれない」

事件には、一人だけ目撃者がいたのです。子供の悲鳴を耳にし、駆けつけようとした人なのですが、犠牲者を口にくわえて立ち去る犯人の影を見ていました。

それがなんとオオカミかキツネに似た毛むくじらで、妖怪とか思えない巨大な怪物だつたというのです。

この日からススムは、今までとは違う目でお母さんを見ないではいられなくなりました。お母さんと話をしたり、近寄つたりするこどが怖くなり、できるだけ避けるようにしました。

夜だつて、恐ろしい夢をこくつも見るようになりました。

敏感なお母さんが、そのことに気がつかないはずがありません。ある日とうとう、話しかけてきました。

「ススム、話があるから」
「おいで」

「なんなお母さん」

「おまえはいつも最近様子がおかしい。何かあるのなら、話して『ごらん』

「ススムは『まかそう』としたのですが、うまくいきませんでした。
結局、白状させられてしまつたのです。

すみとお母さんは、おかしそうに笑い始めたではありませんか。

「おまえはそんなことで悩んでいたのかい？」
「の私が子供を食べる
る食人鬼だつて？」
「ははは、これはおかしい」

「だつてや…」

「考えて『ごらん』。キツネとは本来、ネズミなどの小さな動物を捕ま
えて、頭から丸のみにして食べるのだよ。

獲物を捕まえ、バリバリと引き裂いて食べるのであれば、おそらくオオカミの仕業だね。事件の目撃者は、オオカミかキツネのよ
うな影を見たと言つてゐるのだろう？」

「それはそうだけじゃ」

「おや私の言葉が信用できないのかい？ では私の腹をさいて、胃
袋から子供の骨が出てくるか調べてみるかい？」

「そんなこと、できるわけないじゃないか」

「では私を信用おし。しかし気になる事件ではあるな。近頃は『ナ
』あまり外へ出たがらない」

「誰だつてそりだよ」

「ススム、事件は何田おきに起つていてのだい？」

ポケットから、ススムは新聞の切抜きを取り出しました。

「禅師の話では、ほぼ1週間『』とに起つてゐるんだつて」

「事件が起つるのは、『』なのだい？」

「それが猫坂中に散らばつていて、パターンがないんだよ。発生現
場のリストがあるよ。ほら」

「これかい？　ふつむ、なかなかおもしろいな。よしススム、私は
決めたぞ」

「何を？」

「おまえからかけられた疑いを、自分の力で晴らすこととしたのさ。
真夜中前に出かけるから、そのつもりでおいで」

「真夜中つて、今夜なの？」

「さうとも。新聞を『』らん。最後の事件が起つてから、今日でち
ょうど一週間目じゃないか。食人鬼は今夜あたり再び活動するので

はないかね？」

「だけど」「を探すの？ 猫坂の町は広いよ」

「それは私に任せてもいいわ。少し考えがあるのを…」

その2

真夜中になりました。まだ眠たかったのに、斯スムは布団から引つ張り出され、お母さんの背中の上にいたのです。夜の風に吹かれ、やつと目が覚めてきたところでした。

「ねえお母さん、僕たちはどこへ向かってるの？」

いつものように妖怪ギツネの姿で、お母さんは電柱の上を走っていました。

「斯スム、おまえは『妖怪街道』を知っているかい？」

「ううん」

「妖怪街道とは、猫坂に人間がやつてくる前から存在する古い道ですね。妖怪の通り道なのです。律儀な妖怪なのだな。食人鬼は、その道にそつて犠牲者を選んでいる」

「禅師はそんなこと言つてなかつたよ」

「ゼロ禅師だつて知らないことがあるのさ。妖怪街道のことを知っている人間は一人もいない」

「ふうん」

「妖怪街道について知つてさえいれば、食人鬼が次にどこで子供を襲うか、だいたい見当がつくのだよ。今日は猫坂神社の裏手あたりだろうよ」

「でもお母さん、食人鬼が子供を襲うのはいつも夕方なんだよ。もう二二三な真夜中じゃないか」

「この警戒だからね。夕方出歩く子供など、一人もいないさ。獲物を見つけられず、食人鬼は腹をすかせているに違いない。空っぽの胃袋をかかえ、子供の姿を求めて、この時間でもまだつむつむついてると私は思うね」

「まさかその夜の町を、僕がおどりになつて歩くんじゃないだろうね」

「他にどんな方法がある？ だが安心おし。誰にも見られぬよつこ 気配を消して、私はおまえのあとをついて歩くわ」

「でもお母さん……」

「おまえには指一本触れさせぬわ。私を信用おし」

「今まで言われてしまつと、ススムも口を開じるしかありませんでした。

ススムがお母さんの背中から降るされたのは、月の光をシルエットに、猫坂神社の屋根を遠くに見ることができた通りでした。

こんな時間だし、食人鬼騒動もあって、本当に誰もいません。家々はドアにも窓にも固く鍵をかけ、コトリという物音一つ聞こえないのでした。

ススムは歩き始めました。自分の足音が、いやに大きくあたりに

響くのが気になります。

お母さんは本当に見ていてくれるのだろうか、と不安になつたのですが、ポツンポツンとある街灯以外は暗闇が広がるばかりで、何もわかりませんでした。

ビクビクしながらススムは歩き続けたのですが、突然の出来事が起つたのは、数分後のことでした。暗がりから、不意に敵が襲いかかってきたのです。

驚きのあまり、ススムは何の行動も起しえることができませんでした。逃げ出すどころか、その場に立ちすくんでしまつたのです。

でもそれも無理はないかもしません。とんでもなく巨大で毛むくじやらなものが、予告もなく屋根の上から飛び降りてきて、目の前に立つたのですから。

ススムには、相手の姿はよく見えませんでした。真っ暗な毛の色が、暗闇に溶け込んでいます。

でも相手の目玉だけは見ることができました。オレンジ色に輝きながら、ススムをにらんでいるのです。口の中に並ぶとがったキバが、月の光をわずかに反射しています。

恐ろしさのあまり、ススムはどうしていいのか、わからなくなつてしましました。

でもお母さんが姿を見せたのは、その瞬間のことでした。(気配も足音もなく忍び寄り、敵とススムの間に立つてくれたのです。

スヌムがどれほどほつとし、胸をなでおろしたことでしょう。

「おやおやおや

お母さんの笑う声が、ススムの耳に届きました。

敵とお母さんのにらみ合いは、少しの間続きました。でも不意に終わってしまったのには、ススムもあっけなく感じたほどです。

敵もお母さんも、相手に飛びかかるどころか、呪文をとなえる」とさえしませんでした。そんな暇はなかつたのです。なんと敵は突然トイとむこうを向き、背中を見せて歩き始めたではありませんか。

敵の姿は、そのまま暗闇の中へ消えてしましました。

ほつとしてススムが口をきくことができたのは、何秒もたつてからのことでした。

「お母さん、今の妖怪はなんだつたの？」

「なんだススム、おまえには見えなかつたのかい?」

「うん。暗くてよくわからなかつた」

「やれやれ、光がないと見ることのできない人間の目とは不便なものだね。あれはオオカミだよ」

「えつ、日本のオオカミって、もう100年前に全滅したんだよ」

「私が言つているのは人狼のことさ。動物のオオカミではないのだ

よ

「人狼つて?」

「私が着てているのは妖怪ギッネの毛皮だつゝ、ならば同じようこそオカミ妖怪が存在しても、不思議はないではないか」

「だけど…」

「さあススム、私の背中にお乗り」

「そうだね。なんだか疲れちゃつたよ。早く家に帰りたい」

「何を言つ? 夜はまだまだこれからだよ」

「どうして? 人狼はどこかへ行つてしまつたよ」

「まあ見ておいで。おいつクロウ、どこにいる?」

その声に答えてすぐにパタパタと羽音が聞こえてきたので、ススムは目を丸くすることになりました。そしてフクロウはお母さんの目の前に降り立ち、うやうやしくお辞儀をしたのです。

「御用でじょうか、お師匠様」

「ああ、そこにいたか。寺へ行き、おまえは今すぐゼロ禅師をたたき起こしておいで。私とススムが、食人鬼を連れてもうすぐ寺へ到着すると伝えるのだ」

「おお、すると今夜は、ちょっとおもしろいものが見られそうです

な

「 あなた。おまえはゼロ禅師の寺へ行き、その後のことはわかつておるな？ もあ早く行かぬか」

もちろんフクロウは大きく羽ばたき、すぐに姿を消しましたが、ススムは疑問を感じないではいられなかつたのです。

「 ねえお母さん、食人鬼を引き連れてつて、どうこいつとなの？」

静かな調子で、お母さんは歩きはじめました。

「 ススム、あの人狼がただ引き下がつたとおまえは思つていいのかい？ とんでもない。暗闇にまぎれて、ちゃんと私たちのあとをつけてきているよ」

「 どうして？」

「 私のすみかがどこか、探るためだ。すみかがわかれれば、あの2冊の本を盗みに入ることができるではないか」

「 えつ？ 人狼つてラセツの家来なの？」

「 間違いなくやつだ。もともとこの食人鬼騒動自体が、私をおびき出すトリックだつたのだよ」

「 じゃあどうするの？」

「 人狼を退治するまで、おまえも私も家へ帰ることができない」

「だから禅師の寺へ行くの？」

「ゼロ禅師の寺は、すでにラセツに知られているからね」

「禅師を事件に巻き込んじゃうの？」

「あのジジイは妖怪退治が大好きではないか。大好物を持っていてやるのだから、遠慮することはない」

やがて暗闇の中に、ゼロ禅師の寺が見えてきました。

フクロウはきちんと言いつけを守ったようです。門を開き、ゼロ禅師は中庭で待っていてくれました。

それがなんとも勇ましい格好ではありませんか。

僧服の長いそでが邪魔にならないように、ナワでくくつてあるのです。左手には呪文の本、右手には長い木の棒を持っています。あの棒で食人鬼をぶん殴ろうというのでしょうか。

ススムたちの姿を見て、ゼロ禅師はすぐに口を開きました。

「やあ一人とも、ケガはなかつたかな？」

お母さんが言いました。

「なあ禅師よ、食人鬼の正体は、なんと巨大な人狼だつたぞ。どうやって退治するつもりか知らんが、まあがんばつてくれ。ススムと一緒に、私は見物させてもらおうつ」

「その人狼だが、今はどこにいるのだね？」

「人間の目には見えなくても不思議はないが、100メートルばかり後ろだ。電柱の影に隠れて、こちらをうかがっている」

ススムも言いました。

「ねえ禅師、本当に大丈夫？ すごく大きな妖怪だったよ」

「ススム君、すまないが寺の物置へ行つて、銀のナイフを取つてきてくれるかい？」

「うん」

お母さんの背中から飛び降り、ススムは駆けてゆきました。そしてすぐに戻つてきました。

「ほら禅師、持つてきたよ」

「ああ、ありがと」

ヒモを使い、ゼロ禅師はさっそく長い棒の先にナイフを結び付け始めたではありませんか。ヤリのようにして使つつもりかもしれません。

お母さんが口を開きました。

「禅師、その結び方では弱すぎで、ナイフはすぐに抜けてしまつのではないか？」

「いやいやキッネさん、実はそれを期待しているのじゃよ。まあ見ていて」「うん」

その後も3人は待ち続けたのですが、人狼はなかなか姿を見せませんでした。お母さんは待ちくたびれたのかもしれません。

「えらく待たせるではないか。あるいは慎重なやつなのか

「こやキッネさん、やつが動き始めたよつじやよ。いま何かの光が、やつの瞳の中できりめくのが見えた」

「ほひ、人間のくせにおまえはいい目をしているな。ああ、いま門の中へ入ってきたぞ」

本当にお母さんの言葉どおりでした。今度こそ斯スムにもはつきりと姿を見ることができたのです。

人狼は、お母さんよりも一まわり大きな恐ろしい姿なのですが、その美しさはため息が出るほどなものでした。

毛皮は夜空のように深い黒色で、まわりの光を受け、毛先がときどき星々のようににきらめきます。だけどその表情は凶暴で、口はワ一のよに大きく開いていります。

そんな相手を田の前にして、お母さんはうれしそうに笑つているのでした。

「さて、スマ、ゼロ禅師のお手並み拝見といつじやないか

ゼロ禅師はといえば、すでにヤリを手に身構えています。

3人を田の前にも、人狼はひるむ様子がありません。グルルとうなり、牙をむくのです。

そしてついに、ゼロ禅師が体を動かすときがきました。

それは人狼が飛びかかってくるのと同時でした。

人狼めがけて、ゼロ禅師は木の棒を大きく振るつたのです。投げたのではなく、釣りざおのように振り回しただけでしたが、棒の先端は空中でカーブを描き、ゆるく留めてあつたに過ぎないナイフを矢のように打ち出したではありませんか。

あつという間に、ナイフは人狼の胸に深く突き刺さることになりました。

でももちろん、それで人狼が死ぬようなことはありません。そのまま空中を飛び越え、ゼロ禅師を押し倒して、のしかかったのです。ゼロ禅師は仰向けにひっくり返されてしまいました。その肩に前足を乗せ、人狼はもう一度うなるのでした。

ススムは思わず叫びました。

「キツネさん、禅師を助けてよ」

「いやススム、まあ見ておいで。禅師も簡単に負けはせぬさ」

お母さんの言つことは正しかったようです。手の中についた棒をうまく使い、ゼロ禅師は人狼のわき腹をとっさに強くたたいたではありませんか。

さすがの人狼もこれは痛かったのでしょう。サッと飛びのき、ゼロ禅師から離れたのです。

ナイフは、人狼の胸にまだ突き刺さつたままです。

ハアハアと息をつきながら立ち上がり、ゼロ禅師が口を開きました。

「キツネさんや、少しおかしくはないかね。人狼であれば、銀のナイフで倒すことができるはずなのじやが」

「それは普通の人狼の場合さ。この人狼には主人がいるのだろう。主人の強力な魔力で守られているようだな」

「主人じやと？　この事件には黒幕がいるというのかい？」

「ああ、ラセツといつてな。かなり手ごわい相手だぞ」

「なんとラセツとな。その名は古文書で見たことがある。3つの田玉を持つ鬼であろう？」

「よく知つているな。しかし禅師、そんな話をするよりも、まずあの人狼めを追い払わなくてはならんのではないかね？」

「追い払う？　するとあんたは、こいつを退治するのは無理だとうのかね？」

「ラセツの魔力で守られている家来だぞ。普通のやり方では、かり傷を負わせることだってできるかどうか。ほれ見る。やつの胸からは、もうナイフが抜け落ちたではないか」

「なんと」

その光景には、斯スムも驚くことになりました。あれほど深く突

き刺さっていたナイフなのに、まるで透明な手で引き抜かれるかのようにな、見る間にキズ口からスルリと押し出されてしまつたのです。

その跡には裂け目ばかりか、血の一滴も見えないことができなかつたのは、いつまでもあつません。

カチンと音を立て、ナイフは地面に落ちてしまつました。

ゼロ禅師はつめき声を上げました。

「これはまいつたな」

お母さんが突然ススムを振り返つたのは、このときのことでした。

「ススム、私のフクロウの姿は見えないか？」

ススムはキョロキョロと見回しました。

「フクロウ？ いないよ。あつ、あそこにいた。おーい、こっちだよ」

パタパタと羽音を響かせ、フクロウは空からまつすぐに降りてきました。そしてススムの肩にとまつたのです。

「お師匠様、遅くなりました」

「ああ、危ないことだつたぞ。やはりゼロ禅師では歯が立たなかつた」

「さよひで」

「それでフクロウ、連中は来てくれるのか？」

「はい、お師匠様。もうすぐ姿を現すでしょ。」

ゼロ禅師が言いました。

「キツネさんや、フクロウと話すのもいいが、人狼を追い払う手助けをしてもらえんかね？ 銀のナイフが役に立たぬとなると、もうわしには手立てがないのじゃよ。人狼のやつめ、相変わらずグルルとうなり、わしをにらんでおる」

「ああお師匠様、とうとう連中が来てくれたようですね」

フクロウの声に、3人はまわりを見回すことになりました。

それはまるで、暗闇の中にいくつものホタルが舞っているような眺めでした。

二十近い数だったのです。小さな丸い点が光をはね返しながら、寺をめざして集まつてくるのでした。

やがて堀を乗り越え、彼らは庭に姿を見せました。

そこではじめて、斯スムには意味がわかつたのです。光っているのは妖怪ギツネの目玉なのでした。何匹もがゼロ禅師の寺へ集まつてきていたのです。

あつという間に人狼は、妖怪ギツネたちによつて取り囮まれてしましました。一匹一匹がお母さんと同じ体の大きさがあるのです。さすがの人狼も居心地が悪そうではありますか。

この光景には、ゼロ禅師までが目を丸くしています。

「キツネさんや、これは一体どうしたことなんだい？」

「以前、ヌエを退治してやつた恩があるからな。私のためにみな集まつてくれたのさ。妖怪ギツネとは、それほど義理がたい連中なのだよ」

「ほう…」

ススムが口を開きました。

「あつ、人狼が動き始めたよ」

この瞬間、戦いが始まりました。妖怪ギツネたちが、いっせいに人狼へと飛びかかっていったのです。

だけど人狼の反応もすばやいものでした。後ろ足で立ち上がり、前足を強く振るつて、まず一匹をはじき飛ばしてしまいました。

その他の妖怪ギツネたちも、すぐに同じようにはじき飛ばされるか、かみつかれるかしてしまったのです。

ほんの一瞬の出来事でしかありませんでした。あれほど勢いのかつた妖怪ギツネたちも、今は地面で血を流し、うめき声を上げているのです。

庭の雰囲気はあつといつ間に変化してしまいました。楽観的で、薄ら笑いさえ浮かべていた妖怪ギツネたちも、凍りついてしまったかのようではありませんか。

お母さんが静かに口を開きました。

「禅師、ススムのことを頼むぞ」

「あんたも戦う気かね？」

ススムも心配がつな声を出しました。

「キツネさん」

「ススム、心配することはない。妖怪の世界では、冷酷さと慈悲のなさにかけては、ラセツに劣らず私の名も知られているのだよ。さて、では行くか…」

そういうて地面をけり、お母さんは人狼に挑みかかったのです。

不安と恐ろしさのあまり、お母さんの戦いぶりをススムは見ていたことができませんでした。思わずゼロ禅師の後ろに隠れてしまつたのです。

ゼロ禅師の声が耳に届きました。

「ススム君、二人は互角の戦いをしているよ。あつ、妖怪ギツネが人狼にかみついた。

だが深いキズではないな。人狼はすぐにキツネのキバから抜け出してしまつた。

続いて人狼は相手のしつぽをねらうが、毛の数本は引き抜かれてしまつたものの、キツネもなんとか逃れたよ」

そうやつて戦いは続いたのです。その時間の長さと、お母さんが傷つけられてしまうのではないかという心配に、ついにススムは我慢ができなくなつてきました。

ところがその瞬間、ゼロ禅師の声が再びあたりに響いたのです。

「やつたぞススム君、人狼がとうとう力を失つたようじゃ」

その声の明るさに、ススムは思わず顔を上げてしまいました。そして目に入ったのは、なんとお母さんが人狼の首の後ろにガブリとかみついている光景だつたではありませんか。

お母さんのキバは深く突き刺さり、人狼は苦しげに目を細めています。前足を宙に浮かせ、アゴを大きく開け閉めしますが、もちろん何の効果もありません。

執念深いヘビのように、お母さんは人狼の首をかみ続けました。人狼の手足の動きが弱くなつてゆくのがわかります。

ついにカチリと音が聞こえ、人狼の首は折れてしまったのです。

最後に一度だけピクリと動きましたが、人狼の手足はダラリとなつてしましました、お母さんが口を離すと、人狼の体はドスンと地面に落ちてしまつたのです。

ススムの口から思わず声が漏れました。

「キツネさん」

さすがに疲れたのか、お母さんは腹ばいになつてしましました。それでも大きなケガをしているようではありません。

お母さんの目は死んだ人狼を見下ろしていましたが、ススムがそばへ行くと振り返りました。

「ススム、おまえはケガはなかつたのかい？」

「うん、キツネさんは？」

「かすり傷ばかりさ。おいフクロウ、おまえはどうしている？」

パタパタと羽音が聞こえ、フクロウはすぐに姿を現しました。

「はい、お師匠様」

「おまえはすぐに死体を片付ける。人間の田に触れなことありますのだ」

「はい、お任せを」

「ススム、禪師をこゝへお呼び」

「うん」

かがみ込んで人狼を興味深そうに調べていましたが、ススムが手まねきをすると、ゼロ禪師はすぐにこちらへるそぶりを見せました。

ところがお母さんは、ゼロ禪師に話しかけることができなかつたのです。思いがけないドンといつ音が突然あたりに響き、なんどうと全員がキヨロキヨロと見回すことになりました。

「あそこだ。屋根の上を！」

敵の姿に最初に気づいたのはお母さんでした。ススムもついに田をむけたのですが、その姿に息をのむことになりました。

ラセツでした。寺の屋根の上に立ち、憎々しげにこちらを見下ろしているではありませんか。ドンといつのは、カワラの上に降り立つた足音だったのでしょう。

月光を受け、3つの田は宝石のように美しく輝いていますが、

それでもラセツが恐ろしい姿をしていることに変わりはありません。縮み上がり、妖怪ギツネたちは庭のすみに固まってしまったほどです。

お母さんが振り返りました。

「ススム」

「どうしたの?」

「今夜、私は家へは帰れそうもない。おまえは一人で先にお帰り。私のフクロウを護衛につけてやるわ」

「でもキツネさん…」

「いいや、お帰り。でないと私は、安心してラセツと戦うことができなさいではないか。」さらん。屋根の上からラセツはさかんに手まねきをしている。今夜これから、私と決着をつける気なのだわ

「だけど…」

「いい子になつて、私の言つことを聞きなさい。ああフクロウ、こゝへきたか。おまえの責任でススムを家まで無事に送り届けるのだ。できるな?」

フクロウは自信たつぱりにお辞儀をします。

「お任せください、お師匠様」

ススムは何か言おうとしたのですが、その暇はありませんでした。

全身の筋肉をバネのよつに使って、あつと氣がついたときは、お母さんはラセツと同じ屋根の上にいたではありませんか。

あれだけの高さを、お母さんは一気にジャンプしたのです。

屋根の上で何秒間からみ合っていましたが、戦いの舞台を変えた気になつたのでしょうか。ラセツとお母さんは、どちらからともなく駆け出し、夜の闇の中へと見えなくなつてしまつたのです。

お母さんは足音を立てません。ラセツの足音だけが重くドスドスと聞こえていましたが、やがてそれもまったく消えてしまつました。

ゼロ禅師が口を開きました。

「ススム君、キツネが言つていたよつて、君は早く家に帰つたほうがいい」

「わつではなこ。でもススム君は、明日も学校があるのでわづへ。」

「わづ」

「わあ、フクロウを肩にとまらせたおやつ。おや、キツネたちも同行してくれるようだね。ではススム君、明日また会おう」

「わづあるよ。じゃあね禅師」

「ああススム君、ゆづくつお休み」

寺の門を出て、ススムは歩き始めました。

人のいない真夜中の道ですが、もし田撃している人がいたら、ずいぶん奇妙な光景だと思ったことでしょう。少年が一人、妖怪ギッネたちに囮まれて歩きながら、肩の上にいるフクロウと話をしているのです。

ススムが言いました。

「ねえフクロウさん、お母ちゃんはどうしてカラセシと争ってるの？」

「あれあれススム、あの3冊の本のことを、おまえはお師匠様の口から聞いていないのかい？」

「聞いているよ。でも僕にはさっぱりわからないや。そんなに大切な本なのかなあ。ねえフクロウさん、あんたはお母さんの弟子になつて長いの？」

「長いの長くないのつて、オレはお師匠様の一番弟子だぜ。もう一〇〇年近くにならあ」

「くえ」

「それで3冊の本の話だったな。ススム、おまえは妖怪王国といつのを知つていいか？」

「ううん」

「地底にある強力な国でな、『妖怪王』様が治めている。よい王なのだが、一つだけ困ったことがあった」

「何なの？」

「跡継ぎの息子がいないのぞ。王には娘が一人いたが、妖怪王国では、女が王位を継ぐことは許されていない」

「ふうん」

「そしてこの娘たちには、それぞれ息子がいるのさ。王から見れば孫になるな。だから次の代の王は、この孫一人のどちらかということだ」

「そうだろうね」

「そこで王は、まず人間世界に3冊の本を隠した。どこに隠したかは誰にも教えず、もちろん簡単に見つかるような場所ではない。

3冊とも、妖怪王国の秘密や魔力の奥義をしるした貴重なものだ。二人の男の子のうち、この3冊を最初にすべて見つけ出し、手に入れた者が後継者になると王は決めたのだ。

だから母親一人が、3冊を血まなこになつて探しているのだよ」

「ねえ、それってまさか…」

「そもそも。ラセツには息子がいる。お師匠様にもいる。そしてどちらも、自分の息子を王位につけてやろうと必死なのだよ」

「ラセシとお母さんは姉妹なの？」

「当たり前じゃないか」

「じゃあ妖怪ギッネの毛皮の中にいるお母さんも、実はラセシと同じようにあんな恐ろしい姿をしてくるの？」

「え？ あー、なんだ。いやそのつまり、おおススム、家の前に着いたぞ。じゃあおやすみ」

翼を大きく動かし、フクロウはあわてて飛び去ってしまいました。

気がつくと、二つの間にかキッネたちも一匹残らず姿を消していくではありませんか。ため息をつき、斯スムは玄関のドアに手をかけたのです。

この夜、お母さんのことが心配で、斯スムはなかなか眠ることができませんでした。

やつとウトウトしたと思つたら、怖い夢を見つけて何回も目を覚ますことになりました。

それでも朝はやつてきます。やつとつこねつも眠つてひくじができたばかりなのですが、斯スムは起き出せなくてはなりませんでした。

お父さんはもうひるん、クラブ活動で朝の早い朝もやつとつへりびりました。着替えて斯スムは、トントンと階段を降りてゆきました。

でも階段の途中で、スヌムは立ち止まってしまったのです。

皿や食器がぶつかる耳慣れたカチャカチャという音が台所から聞こえてくるではありませんか。

思わずスヌムが駆け出したのは、いつまでもありません。そして台所では、いつものようにお母さんが迎えてくれたのです。

「おはよう、スヌム」

「お母さん、大丈夫だったの？」

「ラセツのことかい？ あまり大丈夫ではないな。ラセツには結局逃げられてしまった。多少のケガは負わせておいたけどね」

「お母さんはケガをしなかったの？」

「かすり傷だけさ。さあおかげ、スヌム。早く食べなさい。今日も学校があるのでうつ？」

「お母さんはラセツは姉妹なんだってね」

「なんとフクロウのやつが余計な」とを言つたのか。あのおしゃべり鳥め

「ねえ本当なの？」

「ああ本当だ。もともとあまり仲はよくなかったが、今回の件で争いが決定的になつた」

「ねえお母さん…」

「しゃべってばかりいないで早くお食べ。でなこと学校に遅刻してしまひよ」

時計をのぞき込むと、お母さんの顔つむりおつでした。話をやめ、ススムは大急いで学校へ行くしたくをしなくてはならなかつたのです。

いつもの朝と回じょりに、家を出てスヌムは学校へ向かっているところでした。

もうそろそろ校門が見えてくるあたりでしたが、驚きのあまり、スヌムはもう少しで腰を抜かしそうになつたのです。物影から突然妖怪が飛び出してきたのです。

だけど悲鳴を上げる必要はありませんでした。よくよく眺めなおすと、それはつゝさつき家で別れたばかりのお母さんだったではありませんか。ここまでもお母さんは、いつものよつに電柱の上を駆けてきたのでしょうか。

「お母さん、何してるの？」

「ああスヌム、しばらくの間、これを預かってくれるかい？　私は敵に追われているのだよ」

お母さんがやつたかと思つと、毛皮のおなかが割れ、白い手と共に本が差し出されたのです。もちろんあの大切な2冊です。

すぐに受け取り、スヌムは自分のカバンの中へ入れました。

「スヌム、いまでもないが、とても大切なものだから、大事に扱うのだよ」

「でもお母さん…」

「話してごる暇はないのだよ。ほら、もう敵が追いついてきた」

その言葉と共に、お母さんは電柱の上へとサッと駆け上がり、風のように消えてしましました。

ススムは、敵の姿を叩撃することができませんでした。

巨大なサイズの妖怪だったに違いありませんが、まわりの家々の屋根すれすれに低く飛んで、お母さんのあとを追つていったことがわかつただけでした。その大きさで太陽の光がさえぎられ、あたりは一瞬薄暗くなつたほどでした。

あの大きさでは、かなり強力な敵に違いありません。お母さんも今日は大変なのでしょう。

ため息をつき、大切な預かりものの入つたカバンをかかえて、ススムは校門をくぐることになりました。

「の日は一日中、授業中も休み時間も、ススムはカバンから目を離す気になりませんでした。それでも時間はすぎ、ついに放課後になりました。

仲のよい友達から「駄菓子屋にアイスクリームを食べにいかないか」と誘われたのですが、ススムは断り、家路につきました。

学校にいる間中、お母さんからの連絡は一度もありませんでした。何かあつたのではないかと、ススムは心配になり始めていたのです。

しかしその心配も、長くは続きませんでした。

駅で電車を降りて、人通りの少ない道を歩いていたとき、物影から突然お母さんが姿を現したからです。

「ススム、私の本は無事か？」

「うそ、ここにあるよ」

「うそ、ここにあるよ」

「それならここ。まあ私の車に乗り

「ススムがそうすると、お母さんがすぐに駆け出したのを、いつもでもあります。

「お母さん、どこへ行くの？」

「ゼロ禅師の寺さ。ひとまずそのカバンを預けよ」

「どうして？」

「ラセツのやつがとんでもない怪物を送り込んできたからさ。追いかねばおうと朝からいろいろやってみたが、どうしてもうまくゆかぬ。だからススム、おまえの助けが必要なのだよ」

「どんな怪物なの？」

「今にわかるや。まあゼロ禅師の寺が見えてきたぞ」

電柱の頂上から飛び降り、お母さんは寺の中庭へと入ってゆきました。庭のすみで草むしりをしていたゼロ禅師とは、すぐに顔を合

わせることができました。

「おやススム君、学校の帰りかい？ キツネさんは何か御用かな？」

お母さんが口を開きました。

「禅師、しばらくの間ススムのカバンを預かってくれ。私たちは怪物に追われているのだ」

「ススム君のカバン？ 何か大切なものでも入っているのかい？」

「ススムの宿題が入っているのさ。怪物に盗まれて、ススムが悪い点を取つたら困るだろ？？」

「それはそうだが…」

「ほれ禅師、受け取れ。じゃあな」

ススムは一言も口をきく暇がなかつたのですが、気がついたときにはお母さんは地面をけり、さつさと電柱の頂上へ戻つていたのです。

お母さんは全力で走り続けています。背後へと流れてゆく景色に田を細めながら、斯スムは口を開かないではいらっしゃませんでした。

「ねえお母さん、ラセツは妹なんでしょう? なんとか和解して、仲直りあることはどうなにの?」

「それはつまり斯スム、私がラセツのどちらかが、息子に王位を継がせることをあきらめるとこいつことか?」

「うん」

「そんなことができるものか。母親とはおろかなものでね。息子のためならどんなことでもするのだよ」

「僕のお母さんも、生きているときはそんな気持ちだったのかなあ」

「それは間違いないさ。私が保障してもいい」

「どうしてお母さんが保障するの?」

「えつ? いやに、つまりなんだ。息子に対する母親の気持ちとは、どこへこつても変わらぬものだということや。」

それよりも斯スム、あの怪物を追い払う方法について相談しようじゃないか」

「ずいぶん大きな妖怪みたいだね」

「ああ、あれほどの大物は珍しい。ラセツはかなりの無理をしてい
るよつだ」

「どうしてわかるの？」

「巨大な妖怪をあやつるには、それなりの技術が必要だからさ。正
直な話、あれほどの力が妹にあるとは、私も意外だったよ」

「へえ」

「ススム、私の首のまわりには鉄製のロープが巻きつけてあるだろ
う？」

「うん、何だうつとれつかから思つてた」

「それを手にお取り」

「あれ？ 鉄なのにずいぶんやわらかいね。それに細いし。僕の小
指ぐらいの直径しかないや」

「その鉄はやわらかいが、呪文がかけてあるから、見かけ以上に丈
夫なのだよ。何十トンという重さに耐えることができる」

「へえ」

「それを使って、おまえは私の手助けをするのだ」

「どうやるの？」

「よくお聞き。今回の敵はウロコ包まれた巨大な体をしている。」
「ウロコサソロイのやつに硬く、少々の攻撃にはびくともしない」

「まるで戦艦だね」

「やのとおつや。だがやつにも、一つだけ弱点があつてな」

「どんな?」

「やつの胸にはただ一枚だけ、他とは逆さまに生えたウロコがあるのや。一枚だけ上を向いた逆向きの奇妙なウロコなのだよ。このウロコに傷を受けると、さすがのやつもすぐに死んでしまう」

「まさか、このロープをその逆さまにひかれて、せざ取られとこりの?..」

「はざき取ることまでは無理だらうよ。そのウロコサソロイとこりのだが、せこぜここのゲキリンにひよつとロープをかすらせることぐらこしかできまこな」

「それじゃあ敵は死なないよ」

「死ななくてもいい。やつとさせ、おびえさせるだけでいい。やつが逃げ帰るよつて仕向けるの」

「そんなんつまへこくかなあ」

「つましいかなれば、また別の手を考えるよ。まあススム、私たちが作戦を実行する場所が見えてきたぞ。あそこにある大木が見え

るか？」

「うん、ずいぶん大きな木だね」

「猫坂神社の神木だからさ。もう2000年も前から、この地に立つていてるのだよ」

それは本当に、ススムが目を丸くするのも当然な眺めだったではありませんか。

2000歳の木といえば相当なものです。ただ一本の樹木に過ぎないのに、広く張りめぐらされた枝は葉が濃く、分厚く生え、まるで全体が一つの山のよう見えます。それほど大きなものでした。

「この木の頂上あたりに、ススムは降ろされることになりました。お母さんと協力して、そこにワナを仕掛けたのです。

2本の枝の間に、ロープを強くピンと張り渡したのでした。木の葉のカーテンの下に隠され、ちょっと見ただけではわからないうに注意したのは、いづまでもありません。

準備がすむと、お母さんはサッと姿を消してしまいました。高い木の上にススムは独りぼっちになってしまったわけですが、お母さんはこう言い残したのです。

「斯スム、私はやつをおびき寄せるから、おまえはおとなしく待っているのだよ。絶対にここを動くのではないよ

「いづまで待てばいいの?」

「やうはかかるまことよ」

やう言つてお母さんは出かけてしまったのです。枝に腰を下ろし、

スヌムは待つことにしました。

木といつても本当に巨大なものです。スヌムは枝の分かれ目にいたのですが、足元は平らで、小さな小屋なら建てることができる広さがあるではありませんか。

田をじらすと、葉と葉の間からは猫坂の町の風景が、見渡すかぎり遠くまで続いています。

じばらぐの間はおとなしくしていたのですが、やがてスヌムはキヨロキヨロとあたりを見回すようになりました。

お母さんが戻つてくるには、もう少し時間がかかるようになります。なんだか退屈になってしましました。

スヌムの背後には、巨大な幹がそびえています。大型のロケットにも負けない直径があります。

スヌムは突然疑問に思いました。

「あの幹の裏側は、一体どうなつているんだろう?」

お母さんはまだまだ帰つてくる気配がありません。ちょっと立ち上がり、スヌムは幹の裏側を見にいく気になりました。

のぞき込むと、裏側にも同じような枝があることがわかりました。でもその枝に何かがかけてあることに気がついたとき、スヌムは思わず目を丸くしたのです。

それはキツネの毛皮でした。

もちろん見覚えのあるものです。大きさといい、色といい、お母さんのものに違ひありません。

つまりお母さんは、斯スムと別れたあと、じいじで毛皮を脱いでいつたのでしょうか。

妖怪ギツネの毛皮とは、魔力に満ちたすばらしいものです。お母さんは、魔力の杖も持つています。

でもいくら強力な魔力の杖でも、妖怪ギツネの毛皮を着たまでは使用できることは、斯スムもすでに知っていました。毛皮の魔力と杖の魔力が、互いに反発しあつてしまふのです。

杖の力を発揮したければ、お母さんは毛皮の外に出る必要があります。

だからお母さんはここで毛皮を脱ぎ、杖の魔力で何かの姿に変身してから、出かけていったに違いありません。

それはおそらく空を飛びふとのできるものでしょうが、それが何なのか、斯スムには見当もつきませんでした。

しばらくの間、ほんやりと毛皮を眺めていましたが、やがてススムは奇妙なことに気がつきました。

毛皮のおなかには合わせ目とボタンがあるのですが、合わせ目の隙間から、こぼれ出たのかもしれません。その下に何かが落ちているではありませんか。

かがんで、ススムは何気なく拾い上げました。

一枚の写真でした。新しいものではありませんが、二人の人物がはつきりと映っています。

若い母親が赤ちゃんを胸に抱いている姿でした。

映っている人の正体に気づいて、ススムがあつと声を上げるのに、時間はかかりませんでした。

母親の顔に、ススムは見覚えがありました。なんとススムのお母さんその人だつたではありませんか。

すると抱かれている赤ちゃんはススム自身なのでしょう。

写真の中のお母さんはまだ若く、幸せそうに微笑んでいます。十数年後に病氣で死に、自分そつくりに変身した妖怪ギツネがこの子育てを引き継ぐなどとは、夢にも知らないに違いありません。

写真を眺めているうちに、ススムはなんだか悲しい気持ちになってしましました。もう少しで涙まで出そうになつたほどです。

だけどその気分も長く続くことはありませんでした。巨大な怪物の恐ろしい鳴き声が、風に乗つて遠くから聞こえてきたからです。

敵を引き連れて、お母さんが戻ってきたに違いありません。

写真を毛皮の中に押し込み、ススムはもといた場所へと駆け戻ることになりました。

お母さんと敵の姿が見えてくるのと、時間はかかりませんでした。敵の姿をついていたとして、田を丸くするどいらか、ススムは恐ろしかれど感じることになりました。

町の中で普通に見かけるものに比べて何倍もあるけれど、お母さんはカラスの姿に変身していました。もしかしたらススムを背中に乗せて飛ぶことができるかもしれない大きさです。

だけどそのお母さんと比べても、敵のサイズは圧倒的でした。

これほど巨大な妖怪を、ススムはこれまで一度も田にしたことがなかったのです。頭からしっぽの先まで入れば、100メートルはあるに違いない竜だったではありませんか。

ラセツも、まったくとんでもない怪物を送り込んできたものでした。

体のサイズだけでなく、飛ぶ速さもお母さんとはかなりの差がありました。翼の大きさが違うのだから当然かもしれません、お母さんは必死になつて羽ばたいているのに、竜のほうは涼しい顔でついてくるのです。

竜の体は美しい緑色に輝いていました、ウロコの一枚一枚が太陽の光を反射しています。

それに比べるとお母さんは黒いばかりで、地味なものでした。

竜とお母さんは、神木へヒヅンドン近づいてきます。もう一度駆け出し、ススムは大きな枝の影に身を隠さなくてはなりませんでした。

竜がやうに近づくと、今風のように強い風が吹き始めました。

そしてついに、お母さんが神木の葉の中へ飛び込んできました。あのロープめがけて竜を誘導しているのは、いつまでもありません。

お母さんから言っていたとおりに、ススムは身を伏せました。

その直後、竜も葉の中へと頭を突っ込みました。枝どころか幹までが大きく揺れ、葉が何千枚もまき散らされることになりました。

竜に触れてロープがピンと伸びるのを、ススムは木の振動から感じ取ることができました。

まるで釣り糸のよつこ、ロープは一瞬でまっすぐになつたのです。たまたまですが、ずいぶんうまい場所に張り渡したものでした。ロープは竜の胸の表面を滑つていつたのです。そして…

その結果を、ススムはすぐ田の前で田撃することができました。

竜のウロコは、一枚で畠と同じほどのサイズがあります。例のゲキリンにも、ススムはすぐに気がつくことができました。お母さんの言葉どおり、一枚だけ上を向き、逆さまに生えているのです。

だけどなんとこいつとでしょう。ススムの田の前でロープはその

ゲキリンにひょいりぱつかり、まるでギロチンのようだ、あつとこ
う間に胸からむしりとつてしまつたではありませんか。

お母さんにとっても斯スムにとっても、これは意外な展開でした。むしりとられたゲキリンは竜の体を離れ、木の葉のように舞いながら、下へと落ちていったのです。耳をおおいたくなるほど大きな竜の悲鳴が、あたりに響くことになりました。この声は猫坂中に聞こえたに違いありません。

ゲキリンは竜のエネルギーの中心であるというお母さんの説明は、間違つていなかつたのでしょう。まるでスイッチでも切れたかのように、竜は一瞬で力を失つてしまつたではありませんか。

頭は力なくたれさがり、翼は羽ばたくのをやめ、おかげで進路がずれて、神木の幹へと真正面からぶつかつていつたのです。

あれほど大きな怪物なのですから、とんでもなく強い衝撃だったに違いありません。さすがの神木もあつさり一につに折れてしまつたのです。

幹の中を太いヒビが走り、神木は崩壊を始めました。

斯スムはとつさに枝につかまろうとしたのですが、うまくいきませんでした。彼の指は、やわらかな葉の表面を滑つてゆきました。

ついに足先までが木を離れてしまい、斯スムは転落しそうになりました。でもそこへお母さんがやつてきてくれたのです。

大ガラスの姿のまま、お母さんは斯スムの体の下へサッと飛びこ

みました。

それは本当にギリギリのタイミングで、スヌムはからうじて落下せず、すんだのです。お母さんの背中の上に、ストンと座ることになりました。

「スヌム、私の首につかまれ」

お母さんの声は緊張していました。

でもそれも無理はないかもしません。神木の崩壊は、まだまだ二人の周囲で続いていたのです。

細い枝はムチのようく空気を切り、太い枝は、牙をむいたオオ力ミのようく襲いかかってきます。幹はバラバラのカケラになり、雷に打たれた山のように崩れ落ちてゆくでした。

お母さんは、それらの間を力強く羽ばたき続けたのです。

一人は、なんとか崩壊に巻き込まれないですむことができました。

羽ばたき続けて高度をかせぎ、ついに安全なところへと達することもできました。そこから一人は見下ろしたのです。

ウロコは相変わらず美しく輝いていますが、竜はもはやピクリともしませんでした。神木と共に、森の中央に長々と横たわっているのです。

まるで眠っているような姿ですが、胸から流れ出す血は見落としようがありません。

「お母さん、竜は死んだのかな？」

「ゲキリンがあざれ飛んでしまつとは、まさか私も思わなかつたよ。ああ、確實に死んだわ」

「何からどうするの？」

「ラセツがどう出来るかが見ものだが…、おや 스스로、あれをごらん。なんてことだ」

その言葉に、 스스로も思わず息をのむことになりました。死んだ竜の体にある変化のきせしが見えていたのです。

「お母さん、あの竜はラセツが変身したものだつたんだ」

스스로の言つとおりでした。一人の目の前で、竜の死体はゆづくりと縮んでいたではありませんか。同時に形も変え、ついにはラセツの姿になつてしまつたのです。

胸から血を流して、ラセツは横たわつてゐるのでした。死んでいるのは間違ひありません。まぶたを閉じてゐるので、宝石のよう輝く瞳を見る」とはできませんでした。

お母さんが口を開きました。

「ラセツのやつめ、かなり無理をしていたのだな」

「どうして？」

「みずから竜に変身するなど、なかなかできる」とではないからだ。命と引き換える覚悟が必要な大変な術だよ」

「自分の息子のために、ラセツは大きな賭けをしたんだね。恐ろしい姿だけど、いひしてみるとラセツもかわいそうだね」

「まあな」

「」でススムは氣づき、目を丸くすることになりました。

「あれお母さん、いつの間にキツネの毛皮を着たの？」

「枝にかけておいたのだが、神木が崩れたときに落ちてきたのだろう。すぐそこに落ちているのを、いま偶然見つけたのや。」

しかしこれで、妖怪王国の王位は私の息子が得ることに決まったわけだ。めでたいといえば、めでたいではないか」

「めでたいって、ラセツが死んだのに？ 妹なんでしょう？」

「ラセツの実力では、たとえ呪文の助けを借りて竜に変身しても、元の姿に戻るのはかなわなかつたであつ。竜の姿のまま死ぬつもりでいたのだろうな」

「竜になるつて、そんなに難しいことなの？」

「私ほど呪文が使えるものであつても、とうてい自信が持てぬほどだ。それはそうとススム、私たちはここに長くとどまらぬほうがよいで」

「どうして？」

「仮にも妖怪王の娘が死んだのだ。やがて家来たちが集まり、死体を王国へ連れ戻ることだろう。葬儀には私も出席せねばなるまいな」

「お母さんが殺したのに？」

「ハセツと私の間で行われたのは、妖怪の名誉をかけた戦いだつたのさ。勝つても負けても、何も恥じることはない」

「ああ斯スム、私の背にお乗り。騒がしくなる前にこの場所を離れる」と口に呟いた。

ミチコやお父さんは家へ帰つてきたのです。もちろん忘れずにゼロ禅師の寺に寄り、カバンを受け取りました。

ミチコやお母さんがいる前ではもうあらん無理でしたが、お母さんと再び二人きりになつたとき、斯スムは口を開かないではいられませんでした。

「ねえお母さん、お母さんの息子が次の代の王になると決まつたら、もう本を探す必要はないんでしょう？ お母さんは地底へ帰っちゃうの？」

お母さんは、ゆつくつと首を横に振りました。

「いや斯スム、私はまだ帰りはしないわ。おまえとミチコが大人になる日まで母親の代わりをすると、私はおまえの母に約束したのだ。約束は守らねばならぬ」

「お母さんの息子は死んだるの？ 一人で死じがらない？」

「ふふふ、あの子はわざしがつたりはせぬぞ。それにススム、父はまだまだ元気なのだ。私の息子が妖怪王国の王になるのは、ずっとずっと先の話だ」

「ふうん。あのね…」

「もう夜遅いよ。おまえはお休み。明日も学校があるのでね…」

「だけど…、うん、お休みお母さん」

「お休みススム」

ススムは自分の部屋へと帰つてゆきました。

お母さんは「わかったことは、まだたくさんあったのですが、また次の機会を待つことにしたのです。

地底にいるお母さんの息子とはどんな妖怪なのか、もちろんススムはまったく知りませんでした。会つてみたいような気がしないでもなかつたのです。

だけど今日のといひは、お母さんがこの先もまだ何年間か、この家に一緒にいてくれるとこ「う」とがわかつただけで、満足することにしたのでした。

ラセツの葬儀は数日後に行われました。

ススムだけにそつと耳打ちをし、真夜中の数時間だけ家を抜け出し、お母さんは地底へ帰つっていたのです。

でも朝になつて、お母さんの表情が暗いことにススムは『気がつき』ました。

「お母さん、びびつたの？ 何かあつたの？」

「ああススム、実は昨夜の葬儀で奇妙なことがあつたのだよ。ラセツの息子のことだ」

「うん」

「息子の名はナコタといつただが、その姿がなぜか葬儀会場になかつたのだよ。家来たちはもちろん探したが、妖怪城の中にも外にも見つけることができなかつた」

「どうして？」

「それがわからないから困つてゐるのだよ。部屋には置手紙すらなかつたが、どうやらナコタは、どこかへ行つてしまつたよつだ」

「ラセツが死んだから、ショックだつたのかなあ」

「そんなしおりじこやつであるものか。昨夜、王が言つたのだが、

ラセツが死んだからといって、まだ私の息子が跡継ぎと決まったわけではないそうだ。やはりあの3冊をすべて集めた者が勝者になる

「じゃあナコタが3冊とも集めてしまつ可能性がまだあるわけだね。ナコタは、そのために姿を消したんだ」

「おそれくそうだね。ナコタは、私が持つ3冊を盗み出そつと必ずやつてくるに違ひない」

「やれやれ、お母さんも大変だね」

「なんだ斯スム、他人事のよつて言つのではないぞ」

「どうしてさ？ 僕から見れば、悪いけど全部、他人事だよ

「ん？ ああそつか。そつだつたな。忘れていたよ」

「何言つてゐの？ 変なお母さん……」

その日もいつものように、スヌムはゼロ禅師の寺の門をくぐったところでした。

「やあスヌム君、きたね」

「うん禅師」

「そうだスヌム君、あのニュースを聞いたかい？」

「猫坂城のことでしょう？ 電車の中でもみんな噂してたし、学校でもその話ばかりだつた。でもそうだよね。お城の中を夜な夜な妖怪が歩きまわっているなんてね」

「それがスヌム君、噂で聞いたのだが、なぜだか花の匂いのする妖怪らしいのじゃよ」

「花つて？」

「文字通りの花だよ。菊とか桜といったあの花だ」

「そんなにいい匂いがする妖怪なの？ そんな妖怪が猫坂城で何をしているのかなあ」

「それが、屋根のカワラを一枚一枚はがしているらしこのさ。多少は腕力のある妖怪らしいが、猫坂城はあの大きさだからね。すべてのカワラをひとつ返すのに時間がかかるといふのさ」

「カワラを全部裏返して、何の意味があるの?」

「うん、どうやらカワラの下に隠されている物を探してこるのでないかとこりゃ気がするね」

「カワラの下に宝物でもあるの?」

「ははは、それはわしにもわからなこと。でもススム君、その妖怪が昨夜まで、2晩続けて猫坂城に姿を見せているのは事実なのだよ」
家へ帰つてから、もちろんススムは、この話をお母さんへ伝えたのです。

「ふうん」とほじめは氣のないふうでしたが、話の途中で、お母さんの表情は大きく変化することになりました。

「なんだってススム? 花の匂いのする妖怪だつて?」

「ゼロ禅師がそうじつてたよ。妖怪が現れると、あたりことでもいい匂いがただようんだつて」

「その妖怪が、猫坂城のカワラを毎夜毎夜、一枚ずつていねいにねがしてこるとこりのかい?」

「やうだよ」

「なんとススム、これは大変なことだぞ」

「どうして?」

「花のような体臭とは、ナユタの特徴だからさ。その妖怪はナユタかもしれぬ。妖怪の姿を目撃した者はいないのか？」

「真夜中だから一人もいないんだって。でも屋根の上に黒い影が乗
り、バリンバリンとカワラを一枚ずつ調べているのは確かなんだつ
て」

「ええいススム、ナユタに先を越されるわけにはいかぬ」

「あの最後の1冊が、猫坂城のカワラの下に隠されているというの
？」

「そうとしか考えられないではないか。よしススム、今夜、私たち
も出かけよつ」

「猫坂城へ行くの？」

「決まっているさ。最後の1冊を、どうしてもナユタよりも先に見
つける必要がある」

真夜中になりました。

いつものようにそつと家を抜け出し、お母さんは妖怪ギツネの姿になり、ススムを背中に乗せて、電柱の上を駆けていました。

ススムが口を開きました。

「ねえお母さん、今夜も猫坂城にナユタがやつてくると思つ?」

「もちろんや。ゼロ禅師も言つたとおり、猫坂城はとても広い。カラは何万枚もあるに違いない。本の隠されている場所など、そう簡単に見つかるものではないさ」

「だけど、ナユタと戦いになつたりどうするの?」

「ふふふ、私が負けるのではないかと心配しているのかい?」

「ナユタって強いの?」

「それがな斯スム、ナユタはろくな腕力もなく、呪文すらあまり使えないのだよ。赤子の手をひねるようとは言わぬが、正面から対決することになつても、私はあまり心配しておらぬ」

「へえ」

猫坂城までは少し距離がありました。その後は一人とも黙つたまま、走り続けたのです。

やがて家々の屋根のむこう、猫坂城の姿が見えてきました。星の光る空に、真っ黒なシルエットがギザギザに浮かび上がっているのです。

猫坂城は町で最大の建物で、闇の中で見ても息をのむほどの大きさがありました。内部は博物館もかねていて、小学生のときに入スムも遠足できたことがあります。

「お母さん、どうやナコタを待つの？」

「ああ、あそこがいい」

お母さんが見上げる先を田で追って、斯スムは口をポカンと開けることになりました。なんとお母さんが視線を向けていたのは、城内で最も背の高い建物、天守閣だからです。

「本当にあの上に登るの？」

「高い場所のほうが、見張るのには都合がよいではないか

「それはそうだけど……」

斯スムはあまり気が進まなかつたのですが、あつと思つたときには、お母さんはもう屋根づたいに登りはじめていたではありませんか。

まるでリストのように、ひそしからひそし、屋根から屋根へ飛び移つてゆくのです。背中の毛にギュッとつかり、斯スムは思わず目を閉じないではござりませんでした。

でもお母さんの足はバネのよつに力があり、足の裏はやわらかい
「ぐ」のよつで、スリップする気配すらありませんでした。

『気がつくとススムは、天守閣の頂上にいたのです。

「ああススム、田をお開け」

お母さんの言葉におもむろに従つたのですが、田の前に広がる
景色に、ススムは思わず声を上げてしましました。

「じ」からなら、文字どおり町全体を一田で見渡すことができる
です。きらめいている街灯やネオンサインは、まるで黒い布の上に
ガラスのカケラをまき散らしたかのような眺めではありませんか。

「うわあ、お母さん見てよ。とてもきれいだよ」

「そうかい？ それならおまえを連れてきたかいがあつたというも
のだね。しかし油断をするのではないよ。いつナコタが現れるか、
わからないのだからね」

「うん」と返事をしましたが、ススムはよくわかつていなかつたの
かもしません。お母さんの背中にまたがつたまま、景色に見とれ
ていたのです。

やつこつ一人の姿を、よく訓練された田が見逃すはずはありませんでした。

ススムの耳に聞こえたのは、ヒュッという小さな音でしかありませんでした。空気を切つて、突然何かが飛んできたのです。

次の瞬間には前足を折り、お母さんの体が苦しそうに大きく傾いたではありませんか。

「お母さん、どうしたの？」

「誰かが矢を放ってきたのだ。ススム、私の体の右側にお隠れ」

意味に気がつき、ススムはぞっとするような恐ろしさを感じることになりました。鉛筆ほどの長さしかない小さなものです、お母さんの左肩には本当に矢が突き刺さっていたのです。

「お母さん、どうしよう？」

「いいから早く私の影に隠れるのだ。おまえまで矢を受けてしまつぞ」

「でもこれ引き抜かないと」

「触るな。呪文の書かれた妖怪封じの矢だ。おまえまで魔力を受け、体がしびれてしまうぞ」

そういうで、お母さんは強引にススムの左側に割り込んだのです。そうすればお母さんの体が盾になり、ススムは安全でいることができます。

首を後ろに曲げ、お母さんは矢の先を口にへわえました。そして一気に引き抜いてしまったのです。

「誰がお母さんを攻撃したのか、僕見てくる」

お母さんが振り返る前に、ススムはもう駆け出していました。お母さんには止める暇もなかつたのです。

矢を放つた敵がどこに隠れているのか、大体の見当はついていました。暗がりをたどつて身を隠しながら、ススムは近づいていったのです。

天守閣の屋根は広く、体育館にも負けない面積がありました。急斜面なので、足を滑らせないように注意しなくてはなりません。

それでもススムは進んでゆくことができました。たまたま黒い服を着ていたことも役に立つたかもしれません。

屋根の一部には切り立つた高い崖のような部分があり、敵はそこに身を隠していたのです。

矢を受けてお母さんが動けなくなつた後、第一の矢を放つたものかどうか、様子を探つていたのでしょうか。そこへ突然ススムが現れたものだから、敵はひどく驚いたに違いありません。

「ススム君、こんなところで何をしているのだい？」

びっくりしたのは、もちろんススムも同じでした。

「禪師」へ、「こんなところで何をしているの?」

「市長に頼まれて、カワラを壊す妖怪を退治しここにきてるのだよ。体のじびれる呪文を書いた矢を、たった今、放ったところさ」

「その矢が、僕の家に住んでいる妖怪、キツネの肩に命中したんだよ」

「なんだって?」

すぐにススムが事情を説明したのは、いまでもあります。

「なんだってススム君? 物好きにも君はあのキツネの背に乗つて、猫坂城を荒らす妖怪を見物に来ていたというのかい?」

「そうだよ」

「そこへわしの矢が当たつてしまつたところのだね」

「矢を射るなんてひどいよ。呪文のせいで、キツネは動けなくなってしまったんだ」

「これは困ったことだぞ。市長から頼まれ、わしはここで待ち伏せていたんじゃ。妖怪に軽いケガを負わせて、一度との城を荒らす氣を起こさせないようにするためだ」

「禪師一人だけなの? 仲間はないの?」

「市の職員たちとは意見が合わなくて、わしは単独行動をとつたのだよ」

「どうして？」

「職員たちは『そんな迷惑な妖怪は殺してしまつべきだ』と主張した。わしは反対で、殺さずとも追い払うだけでいいと言つた。

互いにゆずらず、その結果わしは「こ」に一人でいるわけだが、職員たちは城内に隠れて散らばり、妖怪が姿を見せるとただちに集まり、いっせいに攻撃を始める手はずになつてゐるのだよ」

「職員たちは、僕とキツネがこの屋根の上にいることに気づいていふと思つ？」

「もちろん気づいてゐる。見張りが何人もいて、双眼鏡で監視を続けてゐるからね。ほらスヌム君、あの下を『こらん。広場に人が集まつてゐるのが見えるじゃないか』

「あそこ？」 30人ぐらいいるね。みんな手に棒を持つてゐ

「ただの棒であればよいがね。あれは猟銃ではないかな。しかもその猟銃には、銀の弾丸が込めてあることだらうよ」

「銀の弾丸つて？」

「妖怪退治の道具さ。普通の弾丸で妖怪を倒すのは難しいが、銀の弾丸ならばまつたく効果が違う」

「僕のキツネは殺されちゃうの？」

「それもありえない話ではない。だがスヌム君、わしに少し考えがある。とにかくまづ、ケガをしたキツネのところへ行こうじゃない

か

お母さんはとても機嫌を悪くしていました。

「おい禅師、おまえが私に矢を放つただと？ 体さえしびれていなければ、おまえを頭からガリガリかじつてやりたい気分だぞ」

「わしなんぞを食つてもうまくはないよ、キツネさん。それよりもススム君のことが心配じやな」

「どうこいつことだ？」

ゼロ禅師は、手短に事情を説明したのです。お母さんが顔色を変えるのに時間はかかりませんでした。

「禅師、その市職員たちとやらば、いつの壁根に上がつてくる？」「あと15分とこいつところかな。この城は古くて、エレベーターなどないからな」

「そもそも禅師、おまえはなぜ矢に呪文など書いておいた？ おどかして追い払うだけなら、矢を当てるだけでよい。呪文など必要ないであろう？」

「敵がどんな妖怪かわからなかつたからや。思わぬ巨大な怪物かもしれないではないか。だがキツネさん、強い呪文ではないから、そのしひれももう消えてきたのではないか」

「ああ、その通りだ。だがススムを背に乗せるほどにはまだ回復し

ていない。私一人なら、なんとかこの場から逃げ出せるだらうが

「うーん、それは本当に困ったな」

3人の間で相談が始まったのですが、ゆっくりしている時間はありませんでした。市職員たちが、もういつ姿を現しても不思議はないのです。

ススムはキヨロキヨロとまわりを見回しました。

「禅師は、どこからこの屋根の上に上がってきたの？」

「あそこじゃ。小さなドアが見えるだらう？ ハシゴがあつて、一つ下の階につながっているのだよ」

お母さんが口を開きました。

「そんなことよりも禅師、ススムをここから安全に逃がす方法を考えよう。どうやら私とススムは、ナコタのワナにはまってしまったようだ」

「どうここ？ となのかな？」

「3冊の本をめぐつて、ナコタと私が争つてゐることは知つているな？」

「やうやうしね。ススム君から聞いたよ」

「そのナコタがこの城でさかんにカワラを壊し、わざと私をおびき寄せたのだと思つ。おまえや市職員たちに私を殺させようという計

「画なのだらうよ」

「やれやれ、わしは何も知らずに矢を放つてしまつたわけか。申しわけのないことをした」

「その責任は、後でじつくり取つてもらひう。とにかく今は、スマの安全を第一に考えよつ」

「何か作戦があるのかい？」

「そんなものあるものか。市職員たちをひきつけ、私が大暴れするから、そのすきにスマを連れ、禪師はここから逃げてくれ」

「いや、それには賛成できないな。いくらあんたでも、銀の弾丸にはかなうまい」

「そんなことを言つて、他にやり方があるか？」

「あるともキッネさん、わしのすることをまあ見ておいで」

そう言つてゼロ禪師はカバンの中に手を入れ、しばらくゴソゴソと探していたかと思うと、何かを取り出したではありませんか。

手の中にすっぽりと納まるほどで、あまり大きなものではありません。スマは目をこらしました。

「禪師、それは何なの？」

「妖怪花火さ」

お母さんが鼻を鳴らしました。

「そんなおもちゃが何かの役に立つのか？」

ゼロ禅師はにっこりと笑いました。

「まあ、じりんあれ」

妖怪花火には小さな導火線があり、ゼロ禅師はそれに火をつけました。次に、広場に集まっている職員たちめがけて、ポンと放り投げたのです。

風を切り、カーブを描きながら妖怪花火は落ちてゆきました。うまい具合に広場の中央に着地したのです。

大きな音や煙と共に花火が破裂したのは、その瞬間のことでした。

職員たちは、腰を抜かしそうなほど驚いたに違いありません。

妖怪花火とは昔からある道具で、火をつけると煙を出し、その煙の中に妖怪の姿が映し出され、牙をむき、恐ろしい声でうなるというものにすぎません。

でもそんなおもちゃでも、役に立つときがあるのです。妖怪退治のために神経を張り詰めていた職員たちは、簡単に引っかかってしました。

すぐに獵銃の音がパンパンと、天守閣の頂上まで聞こえてきたではありませんか。

最初は顔を見合わせていましたが、ススムたちはすぐにクスクスと笑い始めました。

ススムが言いました。

「ねえ見てよ。みんな煙の中の幻の妖怪をねらって撃つてるよ」

お母さんはあきれた声を出しました。

「しかしまた不細工な妖怪だな。禪師、もつと恐ろしげな姿にできなかつたのか？」

「いやあキッネさん、恐ろしい姿の妖怪というのは、薬品の調合が難しくてね。失敗して、あんな姿になつてしまつたのじゃよ。だが役に立つたのだから、よいじゃないか」

それにはススムも同意することができました。

「そうだよキッネさん、役に立つたんだもん。あれでいいよ。笑つちやう姿の妖怪だけじや」

すぐにススムたちは、天守閣の屋根から降り始めました。ゼロ禪師が道案内をし、長く続くハシゴや階段をたどつていったのです。

広場から聞こえていた銃声や物音は、やがて静かになつてしまいました。

ただ花火の火が消えてしまつただけなのですが、妖怪を追い払うことにつ成功したと思い込んでいるのでしょうか。職員たちの機嫌のよい話し声や笑い声が聞こえてくるではありませんか。

窓からのぞくと、市職員たちはすっかり安心して、帰りじたくを始めているようつです。もつこれで心配はないでしょつ。

ススムたちも、このまま暗闇にまぎれて家へ帰ればよいと思えました。ところが實際には、天守閣の外へ出ることさえできなかつたのです。

最初に声を上げたのはススムでした。

「あれ？ あそこに誰かいるよ」

すぐにゼロ禅師とお母さんも田をこらすことになりました。そしてススムの言つとおりだとわかつたのです。

広間のよう大きな部屋の中央なのですが、誰かが立ち、ススムたちを待ちかまえているではありませんか。

姿は普通の少年のように見えました。年齢も、スヌムとあまり変わらないかもしません。

下の階へと続く階段には、この広間を横切らないと行くことができません。ゼロ禪師が口を開きました。

「スヌム君、あれは君の友達かな？」

「ううん、知らない人だよ」

このときになつてやつと、少年は一人ではなく、連れがいるらしいことに気がつくことができました。

連れは一人いて、暗がりにまぎれてわかりにくかったのですが、一人は古めかしい服を着た小柄な老人、もう一人はなんと、お母さんにも負けないとんでもない大きさの猫だったのです。

この猫はネコマタという妖怪なのですが、動物園にいるトラよりも大きな体をしているではありませんか。

お母さんの声があたりに響きました。

「やあナユタ、元気についていたのだな」

田を丸くし、スヌムとゼロ禪師が思わず顔を見合わせたのは、いうまでもありません。この少年がナユタだったのです。

ナコタの隣にいる老人が口を開きました。

「 ああ坊ちゃん、今こそ母上のカタキを取るチャンスですぞ」

お母さんが言いました。

「 カタキだと？ 確かにラセツは死んだが、あれは事故のよつなものだぞ」

「 坊ちゃん、あの者の言葉に耳を貸してはなりません」

困ったような顔でゼロ禅師が振り返ったのは、このときのことでした。

「 わしにはよく意味がわからないのだが、誰か説明してくれんかな」

ついにナコタが口を開きました。

「 説明も何もあるものか、ゼロ禅師。僕はそのキツネと戦い、母の力タキを取る。禅師の相手はこの老人がする。斯スムの相手をするのはネコマタだ。3人とも覚悟はよいか？」

「 何だつて？」と斯スムは口を開きかけたのですが、最後まで言葉を続けることはできませんでした。その前にお母さんが言つたからです。

「 ススム、これは逃げるわけにはいかないようだよ。ナコタがあまり自信たつぱりなのは、この天守閣がすでに呪文で封印され、誰ひとり外へ出ることができないよつとしてあるからに違いない」

ナコタはゆっくりと「うなずきました。

「その通りさ。天守閣の外へ出たければ、おまえたちは僕を殺すしかない」

ゼロ禅師が言いました。

「やれやれ、聞いたとおりだよススム君。ここは一つ、覚悟を決めて戦う以外になさそうだ」

お母さんがもう一度口を開きました。

「ススム、私が貸してやった魔力の杖は、今もポケットの中に入っているね？ ネコマタとの戦いは、すべて杖にまかせるのだよ。おまえは、ただ杖の言うとおりに動けばいい。いいね？」

もちろんススムはうなずきました。それ以外にできることは何もなかったのです。

ついに戦いが始まりました。

最初ススムは、ネコマタとは一対一で対決するものと思つて緊張していました。いくら魔力の杖の助けがあつても、もちろん自信がなかつたのです。

しかしそれはお母さんも同じだつたかもしません。

ススムを一人にするのが不安だつたのでしょうか。ナユタたちが何か行動を起こす前に、そこでくわえてクイッと引かれ、気がついたときには、ススムはお母さんの背中の上にいたではありませんか。そしてお母さんは駆け出したのです。

「お母さん、体はもう大丈夫なの？」

「もうとつべに直つてゐるぞ。そんなことよりもススム、ナユタのやつはばづいた？」

「ネコマタの背中にまだがつて、もちろん追いかけてきてるよ。あの変なじいさんと禪師は、向かい合つてなにやら呪文をとなえ始めてる」

「あのジジイの名はガゴジといつた。ナユタの家庭教師だが、ゼロ禪師のことは気にしなくてよからう。呪文をかなり使えるからな」

「僕たちはまだいるの？ ほら、もうすぐナユタとネコマタが追いつこてくるよ」

「それは気にするな。ナコタの呪文の力など知れているし、ネコマタはまだ大きな猫でしかない。まあススムつかまれ。窓を破つて飛び出すぞ」

お母さんの言葉にススムが身構えることができたのは、本当にギリギリのタイミングでしかありませんでした。

体当たりをして窓を突き破り、雨傘を「ナコナ」に壊して、ススムとお母さんは建物の外へ身をおどらせるようになりました。

だけど強力な呪文がかけてあるのです。屋根に出る「」はできても、ススムもお母さんも、天守閣の敷地を離れる「」は一歩もできないのでした。

ネコマタに乗つたナコタに追われ、結局お母さんは屋根の頂上で立ち止まるしかありませんでした。

お母さんがわざわざきました。

「さて斯スム、ここからが問題だ。ポケットから魔力の杖をお出し

「うん、出したよ。ナコタも魔力の杖を持つているの？」

「もちろんだ。ナコタの腰を『』。帯に突き刺してあるのが見えるだろ？」「..」

「あの杖とお母さんの杖と、どちらが強いの？」

「ほぼ互角である「」だ。どちらも、父が私たち姉妹に『』えたものだ」

「ああそうか。ナコタはお母さんの『おい』なんだね。それでも戦つのか？」

「戦いたくなどないが、ナコタが仕掛けてくる以上、選択の余地はない。さあ斯スム、ナコタが自分の杖を手に取つたぞ」

正直に言つて、斯スムは杖を持つ手が小刻みに震えて仕方がありました。張りのあるナコタの声があたりに響いたのは、このときのことだったのです。

「伯母上、おとなしく僕の手にかかるのだ。そうすれば斯スムの命だけは助けてやる」

これに対するお母さんの返事はあまり上品ではなく、こんなとぎなのに、斯スムは田を丸くすることになりました。

「ふん、おととい来やがれ」

ナコタは表情を変えましたが、何も言ひませんでした。そのままお母さんとにらみ合ひを続けたのです。

「のあと何が起つるのじよ、つか。

胸をドキドキさせながら斯スムは待つたのですが、どうもおかしいのです。にらみ合ひばかりで、ナコタもお母さんも何の行動も起こさないではありませんか。

ネコマタも同じようで、飛びかかつてくる気配はありません。

そのまま30秒近くたつたところで、どうどう斯スムは奇妙に感

じ始めました。

「どうなってるの？　お母さんもナコタもどうして動かないのかなあ」

それでも何も起こりません。キヨロキヨロして、ついにススムはお母さんの目の中をのぞき込んだりしましたが、お母さんは目玉を動かすどころか、まばたきだってしないではありませんか。

ナコタも同じ状態らしいと、ススムは気がつきました。ススム一人を残して、みんな凍りついたかのように動かないのです。

「一体どうなっちゃったのかなあ」

ススムはつぶやいたのですが、答えは意外なところからやつきました。

聞き覚えのある甲高い声が、突然頭の上から聞こえてきたのです。

「おいススム、それはオレのしたことだよ」

見上げると、あのフクロウがパタパタと舞い降りてくると同時にでした。

「やあフクロウさんか」

「ススム、オレをおまえの肩にとまらせてくれよ。お師匠様の体にとまるよ、呪文の魔力がオレにもかかるてしまうんだ」

「呪文つて？」

「オレが呪文をかけたから、お師匠様もナコタも凍りついたようこの動かなくなつたのや。ちよつとおまえに相談したいことがあるつてな」

「僕に？」

「やつや。お師匠様とナコタのそれぞれの杖だが、この2本は本当に互角で、戦つてどちらが勝つかは誰にも予想がつかん。お師匠様が勝てばよこが、負けることだって十分考えられる」

「へえ」

「だからオレとこでは、この戦にはなんとかやめさせたい」

「じつやつへ..」

「ヤ」で相談なのや。この戦いをやめさせ、仲裁することができるのや、じつやえても妖怪王様をおいて他にない」

「お母さんとリヤシのお父さんだね」

「やうや。怖い怖いカミナリ親父だ。妖怪王様を呼んで、この戦いをやめさせたことオレは思ひ。そのためにオレは地底へ行つてくるが、勝手なことをしたと後でお師匠様に怒られるのはかなわん」

「そんなにお母さんが怖いの？」

「ああ怖いね。あのリヤシの姉だぞ。恐ろしくないわけがなかるつ？」

「ははあ」

「ヤ」でだススム、後になつて、もしもお師匠様が怒つたら、そのときはオレをかばつて、おまえが味方になつてくれるかい？味方になると約束してくれるのなら、オレは今すぐ妖怪王様を呼びにいつてくるよ」

もちろんススムは首を縦に振りました。お母さんが傷つくなもしれない戦いなど、うれしくもなんともなかつたからです。

大きくなずいてフクロウは飛び立ち、パタパタと首を立てましたが、こげ茶色をした姿は、夜の闇の中にすぐに見えなくなつてしましました。

フクロウがいなくなつてからも、お母さんとナコタはピクリともしませんでした。

どちらもまばたきをすることも、息をすることもなく、再び動き始める気配を見せません。

お母さんの背中から降り、ナコタに近寄つて、ススムは二つの魔力の杖を見比べてみたりもしました。二つの杖は、双子といつていほどそつくりでした。

ススムはもうすっかり退屈していたのですが、妖怪王がついにやつてきたときには、心臓が裏返つてしまいそうな怖い気持ちがしたものでした。

地底に住み、何千もの妖怪たちを支配している王なのです。恐ろしく感じないはずがありません。

でもススムは、妖怪王の姿を見ることができたわけではないのです。親切心からでしょうが、真っ黒な煙の中にはすっぽりと姿を隠して、妖怪王はススムの前へやつてきたのです。

それはまるで、煙でできた生きた柱のような眺めでした。

妖怪王の声が、あたりに響きました。

「ススム君といつたかな?」

声がしわがれでいるので、やはり妖怪王は老人のようです。でも張りがあり、力を失つていてる様子はまだまだありません。

おそるおそるススムは返事をしました。

「うん」

「じかに会つのは」これが初めてだね。わしは姿を隠していく申し訳ないが」

「うん」

「君には、わしの娘が世話になつていてるね」

「あんまつしつけのいい娘をんじやないね。さつかも『おととい來やがれ』なんて言つてたよ」

「ははは、きっとわしに似たのだよ。それはさうとフクロウの鳴つとおり、この争いをなんとかやめさせたいものだね」

「わうだよ。なんとかしてよ」

「ああ、このケンカはわしが責任を持つてやめさせよう。約束するよ。呪文がとけて、わしの娘が再び動けるようになつたら、君からこれを手渡してくれるかい?」

黒い煙の中から、白い紙に書かれた手紙が差し出されたのは、このときのことでした。手袋をした手がつかんでこるところだけは、ススムも見るこじができました。

「うそわかった。お母さんに手渡すよ。でもナコタばいひかるのへ。『ネコマタと一緒に、今すぐわしが地底へ連れ帰るよ。』そりススム君、『』」

その言葉と共に黒い煙が大きく伸び、ベビのよう長くなつて、あつとこひ間にナコタとネコマタを包んでしまつたのです。

「」のまま妖怪王は地底へと歸つてしまひゆうです。

「じゃあな、ススム君」

「あつ、ひよと待つてよ。」つだけ質問してもいい。」

「どうなことかな？ わしだつて、」の世のすべての質問に答えることができないわけではないのだよ」

「お母さんのことなんだ。あの革皮のトートにいるお母さんの本当の姿を、僕は一度も見たことがない。でもお母さんはリヤツの姉なんでしょうへ。お母さんも、リセツと同じあんな恐ひしこ姿をしているの。」

「ふふふ、ススム君はそれが気になるのかい？」

「うそ、少し」

「しかし困ったな。娘がどうこの姿をしてくるかといひことは、父親のわしどすら軽々しく口にできないのだよ。それが妖怪世界の礼儀といつものや」

「どうして？」

「妖怪とはそういうものなのだよ。だからスヌム君、わしの娘の姿のことは、本人にききたまえ。ああ、本人の口から聞くのが一番いいわ」

「なら、」の質問には答えることができぬでしょ？「お母さんば、妹であるワセシとよく似た姿をしていの？」

妖怪王がクスリと笑うのが、スヌムの耳に聞きました。

「今度はやう來たか。その質問ならわしも答える」のができぬよ。答えはノーカ。わしの娘は、ワセシとしまつたく違ひ姿をしていの。

スヌム君、これで気がすんだかい？」

「うんわかった。ありがと」

「どういたしまして」

その言葉を最後に、妖怪王は姿を消しました。黒い煙はあつとう間に薄くなり、風に吹き散らされてしまったのです。同時に、ナコタやネコマタの姿も見えなくなつたのは、いつまでもありません。

お母さんはすぐ」動き始めました。そしてナコタの姿がないこと

に驚いたのです。

「ススム、ナユタはどうへ行つた？」

ススムの口から事情を説明され、お母さんはもつと驚く。「元気でいたのに、なぜ突然戻りました。

「なんだつて？ 父が？」

「妖怪王は、お母さんにこの手紙を渡してくれと書いたよ。ほら、

「おまえは父と平氣で口をきいたといつのか？ 父は妖怪王だぞ。おまえは、なんとまあとんでもない子供ではないか」

「やつれ。」

「やつれ。父の前へ出ぬと、私ですりぬりじで身がすべくむ」とが
あるところだ。まあいい。まず手紙を読むつ

カワリの上にサッと広げ、お母さんは手を通し始めました。

「ねえお母さん、なんて書いてあるの？」

「ふふふ、私とラセツの間の戦争には、さすがの父も困つていたよ
うだな。王国の妖怪たちですが、ラセツ派と私派に分かれて、いが
み合ひをはじめてこじる」と

「それはよくないね」

「だから父はルールを変える気になつたらじご。あの本を3冊全部

ではなく、最後に残った1冊を先に手に入れた者が王の跡取りになると決めたそうだ

「それじゃあ、お母さんは不利になるね。せっかく2冊まで集めたのに」

「仕方がないさ。ラセツが死ぬという大事件があつたのだ。ルール変更もやむをえないだろうよ」

「今までの2冊は骨折り損になつたね」

「そうでもない。最後の1冊を父がどこに隠したのか、2冊の中に手がかりが書かれているかもしれないではないか。この競争は、依然として私が少し有利なのさ」

ススムは「ふうん」と言いかけたのですが、背後から突然ガタンと音が聞こえ、驚いて振り返ることになりました。

「あつ禅師」

その言葉どおり、下の階へ続くハシゴの扉を押し開け、ゼロ禅師が顔をのぞかせていましたではありませんか。

「やあススム君、戦いはどうなつたのかな?」

「ガゴジはどうなつたの?」

「わしと呪文合戦を続けていたのだがね。なぜか突然姿が見えなくなってしまったのさ。そんな呪文をかけた覚えはわしにはなく、不思議に思つてゐるのだよ」

「呪文合戦かあ。おもしろいだろ？　見たかつたなあ」

「いやいやススム君、そんなに期待してもらえるものではなかつたのだよ。ガゴジが呪文で大グマを作り出したものだから、わしもさつそく対抗しようとしたのだが、呪文を間違えてね。

出てきたのはなんと、小さなイタチだつたじゃないか」

「へえ」

「だから負けを覚悟したのだが、意外にもこのイタチが健闘してくれてね。大グマの背にのぼり、ひつかくは、かみつくは、なかなかの勝負だつたのだよ」

お母さんが口を開きました。

「ススムの話では、つこさつき」こへ妖怪王がやつてきてな。家来ともどもナコタを地底へ連れ帰つたそつだ」

「すると、あんたとナコタの間の争いは決着がついたといふことかな？」

「とんでもない。最後の1冊をめぐつて、これからも続くのさ。まあしかし、今夜はこれですんだ。さあススム、私の背にお乗り。家に帰ろう」

「禅師はどうするの？」

ゼロ禅師はにっこりと微笑みました。

「わしは歩いて帰るよ。市職員たちに会つて、妖怪退治の血魔話でも聞かせてもいいひとこしよ。スヌム君たちは気にせずお帰り」

スヌムたちは、その言葉に甘えることじめました。本当の話、疲れきつてスヌムは、もつ少しでもぶたがくつてしまいそうだったのです。

猫坂城から家まで、お母さんは普段よりもずっと静かに、体を揺らさないよう走ったに違ありません。お母さんの背中の上で、スヌムは二つの間にか眠り込んでいたではありませんか。

寝息を立てながら、スヌムは夢を見ていたかもしません。

それがどんな夢であったのか知るすべはありませんが、お母さんの背中でゆりかごのよつこゆられ、小さな声で囁かずまわる子守唄に包まっていたのです。

とても楽しい夢だったのは、間違いありません。

本を見つけた

学校で授業を受けてくるスヌムのところへ、ある日など、お母さんから電話がかかってきたのです。

担任の先生に呼ばれ、どうしたのだろうと首をかしげながら、スヌムは職員室へと走つてきました。

「もしもし、お母さん？」

受話器を耳に当つると、間違いなくお母さんの声で返事がありました。

「スヌム、ちよつとあへのだが、まさかおまえのところへ私の毛皮が来てはこまいね？」

「毛皮つて、妖怪ギッネの毛皮のことへ、また部屋の中に干していいて、行方不明になつたの？」

「そう人を責めるものではないよ。小さなほつれができたので、修理しようと道具を探してこいたのさ。田を離したのは、ほんの何分間かにすぎないのだよ。」

「またお姉ちゃんが着ちゃつたのかなあ」

「しかしミチルせ、今朝もいつものように学校へ出かけたろう？
原因は何か他のことに違いない。まあいい。おまえのところへ行つていないので、他を探してみよ。邪魔をしたね」

「うん」

電話は「」で切れてしまいました。

教室へと戻りながら、お母さんの毛皮のなぞを解こうと頭を悩ませたのですが、斯スムはいやな予感がして仕方がありませんでした。電話がかかって来たり、訪問者があつたり、学校にいても、この日は斯スムにはとても忙しい一日でした。

訪問者があつたのは授業中のことで、開いたままだつた窓からパタパタと飛び込んできたのです。

もちろんあのフクロウでした。先生や同級生たちに見つかれないように、斯スムは大急ぎで机の中へ隠さなくてはなりませんでした。狭苦しい場所に押し込まれ、不満そうでしたが、フクロウは文句を言いませんでした。斯スムだけに聞こえる声で、そつとせせやいたのです。

「おい斯スム、大事件だぞ」

「どうして？ お母さんの毛皮の」と？

「 もういいんだよ」

「お母さんから大体のことは聞いたよ

「ミチコがちゃんと学校にいることは、オレ自身が行って、いま見てきたところだ。今度はミチコは関係ない」

「うん」

いつの間にかススムは、フクロウとの会話に夢中になっていたに違いありません。知らず知らず声が大きくなっていることに気がつかなかつたのです。

それが先生の耳に入らないわけがありません。

ジロリと目を上げ、先生はススムをにらみつけたのです。そして声を上げました。

「セーの君、何をコソコソしゃべつているのだね」

ススムは胸がドキンとしたのですが、もつ手遅れです。ひどく怒られるに違いありません。

といふがこゝで意外なことが起こりました。

「うぬせこよ。話の邪魔をしないでおくれ」

そういう声があたりに響いたのですが、声の主はもぢるんフクロウでした。ススムの机の中からピヨンと飛び出し、教室中を見回しました。

「だめだよ、フクロウさん」

ススムは止めようとしたのですが、遅すぎました。小さなクチバシを動かし、フクロウはあつとこゝに呪文をとなえてしまつたではありませんか。

何が起るのでしょうか。

いろいろと悪いことを想像して息をのみましたが、何秒もたつてから、スヌムはおそるおそるまわりを見回すことができました。

そして気がついたのです。先生をはじめ、同級生の誰一人として、身じろぎもしません。息をすることも言葉を発することもなく、凍りついたように動かないのです。

まるで人形ばかりが並んでいる部屋のような眺めではありますか。

スヌムはまだキヨロキヨロしていますが、フクロウは平氣な様子です。

「ではスヌム、話の続きをしよう」

「「」の魔力はあんたがやったことなの？」

「先生や同級生たちを黙らせたことかい？ もちろんオレの仕業さ。人間を黙らせるのは得意中の得意なんだ」

「それならいいけど…。それで、なくなつた毛皮をお母さんは探してるので？」

「そりとも。かなりの大騒ぎになつつある」

パタパタと羽ばたき、石像のように動かない先生の鼻にフクロウがとまつたので、スヌムはクスリと笑ってしまいました。

「フクロウさん、その鼻はとまつ心地がいいかい？ 大騒ぎって何なの？」

「お師匠様は、例の本を2冊ともあの毛皮の内部に隠しておられた」

「うん」

「ナコタなら、こう考えるのではないかね？ 毛皮じとあの2冊をどこかへやってしまえば、3冊目を探すにあたり、お師匠様はかなりの労苦を強いられるであつた。なにしろ、有力な手がかりを失うのであるから」

「あの2冊の内容が、3冊目を探すのに役立つのか？」

「お師匠様はそう考えておられる。ナコタもそう考えておらつ

「じゃあ何かの呪文を使って、ナコタはお母さんの毛皮を遠くからあやつったんだね」

「その可能性が高い。毛皮の行方を探すため、お師匠様は地底から家来たちを呼ぶことにした。だから斯スム、おまえもお手伝いをするのだ」

「僕が？ 学校があるのに？」

「何を言つ？ 今日の授業はもつあと一分で終わりだ。時計を見な

よ」

あわてて斯スムが視線を走らせるが、なんとフクロウの言つとお

りだったではありますか。

クラス全体にかかるいた呪文をフクロウがじくと同時に、授業の終わりを知らせるベルが鳴り始めたのです。

校舎の外へ出ると、すぐにフクロウが口を開きました。

「ようしススム、これを着るんだ」

クチバシの先で引っかけ、フクロウが翼の下からさつと取り出したのは、以前も見たことのある銀ギッネの毛皮でした。

「あつそれ…」

「前にも一度着たことがあるだろ？　まず忘れずにこの指輪をはめるんだ。そうしないと取り付かれて、おまえ自身が妖怪ギッネになってしまつからな。よし、それでいい」

毛皮の中へ体をもぐらこませると、とたんにおなかのボタンがパチンパチンととまつてゆくのを感じながら、ススムは言いました。

「僕はどこのを探せばいいの？」

「どこでもいいわ。妖怪ギッネの毛皮には、仲間を呼び寄せる力がある。それが勝手に働くから、適当に歩いているだけで、しだいしだいに目標へと近づいてゆくのさ」

「お母さんの家来たのも、みんなこの毛皮を着て、町の中を歩き回る予定なの？」

「だから今夜は、猫坂の町には妖怪ギツネがわんさか集まる」と
なる。見かけたら、あいさつぐらいしろよ」

「うん、わかった」

ついしてススムの冒険が始まったのです。

体中の筋肉をバネのように使い、学校の塀を軽々と乗り越え、ス
スムは町の中へ飛び出してゆきました。

妖怪ギツネの目を通して見る町の風景は、普段とはまったく違つ
ていました。

妖怪ギツネの視力は、どんなに小さな物も見逃さず、耳はどれほ
ど小さな音でも聞き逃すことなく、鼻はありとあらゆる匂いをか
ぎわける力がありました。

たとえば、通りのずっと向こうの家で調理されている料理の種類
でさえ、ススムは知ることができたのです。

しかし遊んではいられません。お母さんの毛皮の行方を追わなく
てはならないのです。食べ物の匂いの誘惑を押しのけ、ススムは走
り続けました。

といつても、道路を行つたのではありません。お母さんがいつも
やるよつて、ススムも電柱の頂上をジャンプして駆けていったので
す。

だけど太陽が傾くころになつても、妖怪ギツネの姿どころか、手
がかりさえつかむことはできませんでした。

体は疲れていましたが、スヌムはそれ以上にあせりを感じ始めていました。もしもあの2冊を取り戻すことができなければ、お母さんはどれほどがっかりすることでしょう。

スヌムの目があるものを見つけたのは、太陽がすっかり沈み、あたりが暗くなることでした。何百メートルも遠くですが、スヌムと同じように、電柱の上を走っている者がいることに気がついたのです。

足に力を込め、スヌムはスピードを上げました。相手はあまり速くはなく、だんだんと近づいてゆくことができました。

あちらも妖怪ギツネの姿をしています。

しかも大きさといい、毛の色や模様といい、お母さんのあの毛皮であることは明らかでした。こつも目にしているスヌムが見間違えるはずはありません。

足をゆるめ、少し距離をとつて、スヌムはあとをついてゆくことにしたのです。

あの毛皮の足取りや走り方が、どうも奇妙に思えたからです。きちんとしているとは、とても言えず、まるで酔っ払っているかのような走り方ではありませんか。

遠くから魔力であやつられている毛皮とは、ああいう走り方をするものかもしれません。

何分かの間、スヌムは駆けつけたのですが、やがてもう一つお

かしたこと気につきました。あの毛皮を追跡しているのは彼一人ではなかつたのです。

もう一人の追跡者も、同じように妖怪ギツネの姿をしていました。スヌムがいるのよりも一本西の道路ですが、やはり電柱の上を走つてゐるではありませんか。その視線は、スヌムと同じように、あの毛皮を見すえているのです。

相手も同時にスヌムの存在に気がついたようでした。今度はチラチラとこちらに視線を向け始めたのです。

「あれはお母さんの家来の一人なんだろうか」とスヌムは思いました。

でも油断はできません。とにかく今は、まず毛皮の行き先を突き止めるべきです。

もう一人の追跡者が突然進路を変え、こちらへ近づいてくる氣配を見せたとき、スヌムは少し驚きました。あつという間にこちらの道路へやつてきて、スヌムの隣に並んだではありませんか。

そしてスヌムに話しかけてきたのです。

「やあ、君はとても上等な毛皮を着ているじゃないか」

スヌムにはよく意味がわかりませんでした。

「やうなの? でもあなたの毛皮だって、僕のと同じ銀色の毛だよ

「ちひるさん。妖怪王国では、銀ギッネの毛皮は王子しか身につけることが許されていないからね」

「王子って？」

「王子といえば王子さ。僕は妖怪王国の王子ナコタだ。ラセツの息子さ。君は…、ススムだね」

驚いてススムは電柱の上から落ちてしまいそうになりましたが、なんとかバランスを取り戻すことができました。

「僕がススムだと、どうしてわかったの？」

「それぐらい簡単だ。その毛皮はヤマメから貸してもらつたのかい？」

「ヤマメってだれ？」

「あれ知らなかつたのかい？ 妖怪ギッネの毛皮を着て、君の家の柱の中に住んでいる女妖怪のことだ」

「ああ、お母さんのことへ、お母さんのお前へ、ヤマメとこのつのか」

「魔力を使って、ヤマメは君の母親の姿に化けているんだったね」

「うん、ちよつと事情があるんだ…」

「ちうかい？ とにかくススム、君がいま着てている毛皮は、本当はヤマメの息子の所有物なんだよ。それを貸してもらえるなんて、君

はヤマメから相当気に入られているらしきね

「へえ、 そうなの」

「それはそうと斯スム、 実は君に少し相談したいことがあるんだ」

「何ぞ?」

「もちろん例の本のことだ。あの3冊目だよ。あの本をめぐって、僕とヤマメは激しく争っているわけだ」

「うん」

「でもその争いを少しの間、休戦したいんだよ。足の引っ張り合いはやめて、本を入れることに専念したいんだ」

「どうして?」

「噂で聞いたのだが、3冊目の本を、妖怪王はとんでもなく困難な場所に隠したのだそうだ。一筋縄どころか、持てる魔力をすべてそ

そいでも、おいそれとは近づけない所らしい」

「へえ」

「しかも本は、非常に強力な護衛によつて守られてもいるらしき

「護衛つてなんだろうね。呪文? それとも怪物かなあ

「それはわからない。その両方かもしれない。だから斯スム、本を入れるまでは、君と僕の一人で協力しないか? 二人で力をあ

わせて、本を手に入れるんだ

「そのあとはどうするの？ 君かヤマメの息子か、どちらが次の王になるのさ？」

「それはまたそのときに考えればいいじゃないか。本が手に入ったあとで、ジャンケンをして決めたつていい

「そんなことでいいの？」

「ははは、かまやしないさ。母と違つて、僕はあまり王位にこだわりはないんだよ。たとえ王になれなくたって、王の弟というだけで十分幸せな人生を送ることができるじゃないか。そうは思わないかい？」

「うーん、僕によくわからないや。僕は妖怪じゃないもん」

「そうだったね。それでススム、休戦の申し入れを受け入れてくれるかい？」

「だけどお母さんがどうつかなあ

額にしわを寄せてススムは考え始めたのですが、次の出来事が起つたのは、その瞬間のことでした。ナコタが声を上げたのです。

「おやススム、見て」「うらうよ。毛皮の動きが変わったぞ。それにほら、あれは一体なんだ？」

視線を向けて、ススムも目を丸くすることになりました。

あたりはすっかり暗くなつていましたが、空はまだ明るく光っています。

その光を受けて姿を現し、ある物が輝き始めていたのです。毛皮は、それに向かつて一直線に進んでいるのでした。

それは巨大な城だったのですが、それまで何もなかつたところに突然現れたばかりでなく、そのあまりの光景に、斯スムもナコタも思わず立ち止まつてしまつたのです。

この城はまるで幻のように高い空に浮かんでいたのですが、それが普通の向きではないのです。鏡に映つた像のようによく上下逆になり、屋根を下へ向けて逆立ちをしているのでした。

あれではまるで、空に貼り付けられているかのような眺めではありますか。そういう上に逆さまの奇妙な城が、二人の前に不意に姿を現したのです。

ふだんは魔力で姿を隠している城が、あの2冊を受け入れるために門を開いたのでしょう。

城の姿を目撃して、斯スムの声は少し震えていたかもしません。

「ナコタ、あれは何なの？」

「なんと、真の猫坂城とはあれのことだつたか」

「猫坂城つて？」

「3冊目の本は猫坂城に隠されている。それは僕も知つていた。だ

から先日、僕は猫坂城へ行き、カワラを一枚一枚はがして探しめたのさ。そこへ君とヤマメがやってきて、最後は妖怪王まで姿を現す大謎になってしまったじゃないか

「うう

「だが僕は間違っていたよ。いま気がついたよ。3冊の本が隠されているのは、地上にある猫坂城ではなく、空から逆さまに生えているあの城のことだったんだ」

「あつ、あの毛皮がジャンプしたよ。あの城の中へ入ってゆくみたいだ」

「あの毛皮に呪文をかけたのは僕さ。今朝、ヤマメがほんの少し目を離したときに、仮の魂を『えてやつた。内部に隠されている2冊が毛皮をあやつって、3冊が隠されている場所へ案内してくれる』ことを期待してね」

「やうだつたのか

「それが図にあたつたわけだ。僕はただ、毛皮のあとをついていけばいいと思っていた。しかし毛皮が、あの城の中へ入つていいこうとするとはね」

「あつ、毛皮がジャンプしたら、空中城の門が開いたよ」

「城は2冊を受け入れるつもりだな。しかしススム、急がないとあの門はすぐに閉まってしまうぞ。城内へ入るのなら今しかない。いいか？ 全力でジャンプするんだ」

ススムには考へてゐる余裕などありませんでした。気がついたときには全身の筋肉をいっぱいに使い、ナコタのあとをついて、空中へ身をおどりさせていたのです。

驚いたのは、空中城の内部には入つ子ひとりおらず、シーンと静まり返つていたことでした。

ススムはあそぶあそぶ口を開きましたが、声はまわりの壁に吸い込まれるばかりだったのです。

「ねえナユタ、 じにには誰もいないのかな」

「やうらしげね。それよりもおもしろいことがある。ススム、上を見ていじらん」

言われたとおりにして、ススムは小さく悲鳴を上げてしましました。

じには、空の上に逆さまに浮かんだ城の庭なのです。見上げたススムの頭上に猫坂の町の風景がそつくりそのまま広がっていたのは、言つてみれば当たり前かもしません。

町の様子はいつもと変わらず、道を行く人々や自動車、走る電車の姿だつて見ることができました。

ススムは言いました。

「上下逆さまに見上げる町の風景つて、奇妙なものだねえ」

「ああススム、早くあの毛皮を探そう。広い城だから、一人で手分

けをしたほうがいいな」

それは斯スムにはあまり気の進まないことにでした。勢いでここまで来てしまったけれど、本当は薄気味悪く感じて仕方がなかったのです。

「だけれど…」と斯スムは言いかけたのですが、なんとこうことじょう。気がつくとナコタはもう駆け出し、曲がり角を通りてサツと姿を消すところだったではありませんか。

あわてて追いかけましたが、斯スムはうまく追いつくことができず、姿を見失ってしまいました。

立ち止まり、斯スムは途方にくれました。どんな敵がいるかも、何が隠れているかもわからない城に独りぼっちになってしまったのです。

だけれどじつとしていても、じつになりました。広い部屋、狭い部屋、にですが、とにかく歩き始めたことにしたのです。

城の内部にはいろいろな部屋がありました。広い部屋、狭い部屋、今は全く空っぽだけれど、倉庫と思われるところ。

台所や食堂だって見つけることができました。でもやはり入っ子ひとりいないのです。

だけれどそれも、いつまでも続くわけではありませんでした。

ある広間を通り抜けようとしたときでしたが、「しきつ」という声と共に突然しつぽを引っ張られ、斯スムは驚いて振り返ることに

なりました。

誰かの手がススムのしつぽをつかんでいるのです。ススムは、太い柱の影へとそのまま引き入れられることになりました。

そこには、ナコタだったではありませんか。いつの間にか毛皮を脱ぎ、少年の姿に戻っていますが、その手がススムのしつぽをつかんでいたのです。

ナコタが言いました。

「ススム、これ以上は先へ行くんじゃない」

「どうして？」

「あれをいらんよ」

柱の影から首を伸ばして、ススムはおそるおそるおぞき込むことになりました。

そしてなんと、まづ田に入つたのが1冊の本だつたのです。

お母さんが持つて居る2冊とよく似た形をしていますが、表紙の色はわずかに違うようです。3冊田であるのは間違いません。

だけどそれが、すぐに手の届く場所にあるわけではないのです。

せつしきのあの毛皮がそこにいるのですが、なんと本は、その口の中にしつかりとくわえられているではありませんか。巨大な妖怪ギンネの口の中とこなわけです。

妖怪ギツネは腹ばいになり、油断なくまわりを見回しています。

ススムはささやきました。

「ねえナユタ、あの毛皮はさつきよりも一回り大きくなつたような気がしない?」

「君も気がついたかい? 3冊の本が一ヶ所に集まつたことで発生した魔力を吸いこみ、やつはより強い妖怪へと変化をとげてしまつたようだ。普通の妖怪ギツネを相手にするようには、もはやいかないぞ」

「じゃあどうするの?」

「それは僕たち一人で考へるしかないのさ。助けてくれる人はどこにもいない」

柱の影に隠れたまま一人は悩みましたが、いい知恵はなかなか浮かびませんでした。面倒くさくなつて、ススムはとうとう自分の毛皮を脱いでしまいました。

そのとき、ススムのポケットに入っていたある物がナユタの目にとまつたのです。

「そつかススム、君も魔力の杖を持つていいのだったね

「お母さんが貸してくれたんだよ。近ごろは妖怪が多くて物騒だからつて」

すぐにナコタも自分の杖を取り出しました。

「ススム、この2本の杖を用いれば、あの本を手に入れることができるかもしないぞ」

「どうやつて？」

「それがわからないから、杖に相談しようとしたのさ。君の杖を貸してくれるかい？ ほら、こつやつて2本を並べて床に置いてみよう」

「やつしたらどうなるの？」

「まあ見ていてじらん。ほら、2本の杖が話し合いを始めた。本当に会話しているかのように、2本が交互にプルプル小さく震えているじゃないか」

本当にナコタの言つとおりだったのです。2本の杖はしばらぐの間ふるえ、話し合いを続けました。

やがて結論が出たのでしよう。ピタリと動かなくなりました。

ススムが言いました。

「話し合はすんだらしいね」

「どうこう結論が出たのや。まあススム、自分の杖を手に取るんだ。ここからは杖の言つ通りに行動することになる。何が起こつても、あわてるのではないよ」

「うん」と斯スムはうなずいたのですが、本当は胸がドキドキし始めたいました。

魔力の杖が2本とも、ほんやりと輝き始めたのは、そのときのことがでした。

「これから何が起ころるのだらう」と、斯スムとナコタは息をのんで見つめたのです。

杖はどうやら、一人を何かに変身させるつもりのようでした。光はやがて一人の体を包み始めたではありませんか。

光がついに消えたとき、目を丸くして、二人は互いの体を見つめ合うことになりました。続いて自分の姿にも気がつき、もう一度目を丸くしたのです。

なんと一人とも若い僧侶に姿を変えていたのです。どちらも頭は丸坊主で、黒い僧服を着ていました。

「ねえナコタ、この格好で何をすればいいのかな?」

「君も僕も肩からカバンをさげているね。中身を調べてみよう。何かわかるかもしねーよ」

二人はカバンの中を調べました。そして少し相談をし、ついに立ち上がり、歩き始めたのです。

むかう先が、本をくわえている巨大な妖怪ギツネの目の前だったのは、いまでもありません。

妖怪ギツネはすぐに一人に気がつきました。首を持ち上げてジロリと視線を走らせましたが、もちろん本は離しません。

一人は歩き続けました。妖怪ギツネまでの距離はどんどん近くなつてきます。

ススムは思わず冷や汗が出ましたが、体が震えるようなことはなく、恐ろしさを表情からなんとかうまく隠すことができました。

驚いたのは、ナコタがまるで、妖怪ギツネなどそこにはいないかの「ことく行動することでした。ススムを連れ、相手のすぐ目の前に、当たり前のように座つたではありませんか。

向かい合つて、一人はあぐらをかいたのです。最初に口を開いたのはナコタでした。

「ああススム、腹が減つたな。僕はリンクを持つてるんだ。食うかい？」

カバンの中に手を入れ、新鮮で真つ赤なリンクをナコタは取り出しました。

「うん」

手を伸ばし、ススムは受け取ろうとしました。ところがナコタは手渡してはくれなかつたのです。

「やめた。やめたよ。リンク丸」と一つやるのはもつたいないな。ただもうつだけじゃなくて、何かと交換してくれよ」

「交換？ 何がいいかなあ」

自分のカバンの中をのぞき込み、ススムは「ゴソゴソと探し始めました。そして指先でつまんで取り出したのが、なんと1匹のカエルだつたのです。

「そのリンクゴ、このカエルとなら交換してもいいよ」

「カエルかい？ きれいな緑色をしているな。ペットにしようだ。だけど、そんないいカエルをただでもらっては申し訳ない氣もするな。僕は君にこれをやるよ」

そういうてナユタは、カバンの中から鉛筆を取り出したのです。

ススムが言いました。

「へえ、きれいな色の鉛筆だねえ。それに新品だ。とてもうれしいよ。じゃあお返しに、僕はこれをあげるよ」

その言葉と共にススムがカバンから取り出したのは、ほかほかと湯気の立つ作りたてのハンバーガーなのでした。

会話のはじめから、妖怪ギツネはじつと聞き耳を立てていました。最初はあまり興味もなかつたのでじょづ。

だけどリンクゴが現れ、それがカエルに変わったところで意外さに興味を引かれ、次に鉛筆が来て、最後にハンバーガーが現れたときには、見事に不意をつかれてしまつたのです。

ハンバーガーのおいしそうな匂いは、妖怪ギツネの鼻を強烈に刺

激したに違いありません。もうどうにもあるがうことができず、大きく口を開け、妖怪ギツネは、斯スムの手から思わず奪い取つてしまつたのです。

するともちろん、本はパタンと床に落ちてしまつことになります。

「この瞬間をナコタが見逃すはずはありませんでした。とつせに本をつかみ、大きな声で呪文をとなえたのです。

「本よ、僕と斯スムを安全な場所へ今すぐ連れていってくれ

意味に気がつき、妖怪ギツネは田をむきましたが、もう遅かったです。

ナコタが呪文をとなえ終わつたかと思うと、空中城の風景も妖怪ギツネの姿も一瞬で消え、思いがけないまつたく別の場所に自分がいることに斯スムは気がつきました。

この場所に見覚えがないのか、ナコタはキヨロキヨロしていますが、斯スムは違いました。おなじみの場所だったのです。

ゼロ禅師の声が突然聞こえました。

「ススム君、これはこれは、いつの間にやつてきたのだい？」

ススムは振り返りました。ここはゼロ禅師の寺の中だったのです。

「ああ禅師」

「こいつの間にやつてきたのか、わしはまつたく気がつかなかつたよ。

おや、隣にいるのはナコタ君かな？」

ナコタはにっこりと笑いました。

「やあゼロ禅師、今夜はネコマタもガーボジも一緒にではないから、気にする」とはなじよ」

「ああ、ガーボジとは、君の呪文の先生のことだつたね。しかし君たち一人は、こんな時間にここで何をしてるのかな？」

説明しようつと唇を開きかけたのですが、言葉がススムの口から出る「ことはありませんでした。空中城から追つてきたに違いありません。窓を突き破り、あの妖怪ギツネが突然部屋の中におどりこんできたのです。

大きな音と共に窓ガラスが飛び散りましたが、すぐに立ち止まり、妖怪ギツネはススムたちをにらみつけることになりました。怒りと憎しみで、その目は螢光灯のように輝いているではありませんか。

さすがのゼロ禅師も驚きを隠せない様子です。

「ススム君、これは君の家に住んでいる妖怪ギツネではないのかな？」

「それがちょっと事情があつて、今は別の妖怪に変化しちゃつてるんだよ」

「そりが。その妖怪がその本を追つてここへ来たわけだね」

ナコタが言いました。

「禅師、気をつけたほうがいい。ここは並みの妖怪ギッネとは魔力の強さが違う」

「それはわしも感じていたよ。そばにいるだけで、まるで静電気でも受けているかのように肌がチリチリする。ススム君、君は魔よけの指輪をしているのが見えるが、あの銀ギッネの毛皮はどこにあるのだい？」

「えっ？ しまった。空中城に忘れてきた

ナコタが口を開きました。

「心配するとはなこり、ススム。僕がすぐに呼び戻してやるよ」

そういう終わると同時に、ナコタは呪文をとなえたに違ひありません。何秒も立たないうちに、まるで空飛ぶジュウタンのようにフワリと飛んで、銀ギッネの毛皮が窓から飛び込んできたではありませんか。

大急ぎでススムがそれを身につけたのは、いつまでもありません。

妖怪ギッネはキバを見せてうなづいていますが、今はゼロ禅師とにらみ合っているだけです。ゼロ禅師の呪文の力に警戒しているのもしれません。

そのとき、「ススムとナコタは大急ぎで畠葉をかわしたのです。

「ススム、この本を持って、君はすぐこヤマメのところへ行くんだ。そうすればヤマメの息子が王になることができる」

「でもそんなことをして、君はどうなるのさ？」

「コタはゆっくりと首を横に振りました。

「ヤマメの息子か僕のどちらが王になるとか、そんなことを言つて、いる余裕はもうないんだよ。見て、こらん。本の魔力を受けて、あいつはこんなに強力な妖怪に成長してしまった。

僕とゼロ禅師が力をあわせても、もはや退治できるかどうかもわからぬ」

「そんなにすごい妖怪なの？」

「だがその本を無駄にすることはできな」。ヤマメのところへ持つていき、息子を王位につけてやつてくれ

「でも……」

「行くんだ 스스로。ヤマメなら、本を安全に隠すことができる場所を知つてこらだらう。そのあと気が向いたら、僕とゼロ禅師の手伝いに来るよう頼んでみてくれ

何か答えようと思つたのですが、もう斯スムはどんな言葉も思いつくことができませんでした。黙つてつなづき、本を口へわえ、駆け出すほかなかったのです。

裏口から飛び出し、斯スムはいつものように電柱の上へと駆け上がりました。足に力を込めてスピードを上げると、ゼロ禅師の寺はあつという間に小さく遠くなってしまった。

ススムはもううん全速力を出しました。ゼロ禅師の寺から家まで、そう遠い距離ではありません。

だけどなんということでしょう。ちょうど電線の工事が行われていて、ススムは何百メートルか遠回りをしなくてはならなかつたのです。

一度ススムは、チラリと寺のあたりを振り返りました。ゼロ禅師とナコタがどんな戦いをしているか気になつたからです。

でもススムの期待は、大きく裏切られることになりました。妖怪ギツネは、なんと彼のすぐ背後にいたではありませんか。

ススムには、口をポカンと開ける暇さえありませんでした。気がつかなかつただけで、寺からずつとあとをつけられていたに違いありません。

妖怪ギツネは、さつきよりもさらにひとまわり巨大化したように見えます。牙をむき、ものすごい顔で追いかけてくるではありませんか。もう妖怪ギツネというよりも、怪物ギツネと呼ぶほうがふさわしいかもしません。

それだけではありません。次の瞬間、ついにススムに攻撃を仕かけてきました。

ススムの体に引っ掛け、ケガをさせようというのでしょうか。怪物ギツネは、ツメの生えた長い前足を伸ばしてきます。

全力で走りながら、ススムは必死でよけるしかありませんでした。

それでも怪物ギツネは攻撃をくりかえします。スヌムはなんとか攻撃をかわし続け、自分の家の屋根がやつと視界に入つてきました。

このころには、スヌムの毛皮はもうかなりボロボロにされていました。長いツメでいくつも傷をつけられ、引き裂かれていたのです。それでも、かろうじてまだ走り続けることができました。だけど次の瞬間、スヌムは最後の致命的な攻撃を受けることになったのです。

スヌムの毛皮は、とうとう完全に引き裂かれてしまいました。体が空中へポンと放り出され、それでもなんとか転落はまぬがれて、スヌムはギリギリで電線からぶら下がることができました。

いまや、細い電線だけがスヌムの体を支えているのです。ぶら下がることで両手はふさがり、魔力の杖はポケットの中にあり、本はズボンのベルトに押し込んであるのです。

これでは反撃も何もできたものではありません。

怪物ギツネはいつたんスヌムの頭の上を通り過ぎましたが、すぐにまた戻つてきました。あの大きな体なのに、電柱の頂上に器用に立ち止まり、うれしそうにニヤリと笑つて見下ろすのでした。

もうこれまでかと、スヌムも覚悟を決めるしかありませんでした。でもそこに味方が現れたのです。

その味方も妖怪ギツネの姿をしていました。スヌムの家のある方向から地面の上を全速力で駆けてきましたが、前足を伸ばして本を

はたき落とそつとする憎い敵の鼻先をかすめて、ススムをサッと連れ去つたではありますか。

気がついたときには、ススムはその妖怪ギツネの背中の上にいました。聞き覚えのある声が、すぐにススムの耳に届くことになりました。

「ススム、私の背中にあつかまつ。落ちなこよつに、しつかいつつかまるのだよ」

お母さんの声だったのです。

「お母さんなの？ あれ？ 」の毛皮はどうじたの？」

「フクロウに命じて、新品を一つ取り寄せたのを。それがようやく間に合つたといつわけだ」

「怪物ギツネが追いかけてくるよ」

「あれが元は私の毛皮だったのかい？ よくも巨大化したものだな」

「本の魔力を吸い込んだからだよ。ほら、3畳間がここにあるよ」
電柱の上を駆けながらチラリと皿を上げ、お母さんは満足そうに微笑みました。

「これで私の息子が王になつたも同然といつわけか。もつとも、その前にあの怪物ギツネをなんとか退治しなくてはならんが」

「退治するのはとても難しいとナコタが言つてたよ。魔力を吸い込

んで、まつたく新しい妖怪に生まれ変わっているからだつて

「ああ、私の田にもせつ見えぬよ。とにかくまず、その本を父のところへ届けよ!」

「お父やさて、妖怪王のこと?」

「やうやうさ。父の田の前にこの本を見せ、私の息子の即位を認めねむや。怪物ギツネ退治せ、そのあとで考えよ!」

「でもお母さん、この本は僕とナコタが協力して手に入れたんだよ。お母さんの息子とナコタのどちらが王になるかは、手に入れたあとで決めることにしていたんだ」

「それは私の知つたことではないね。いま私はその本を手に入れたのだ。おまえがなんと言おうと、私は父のところへ持つていく。邪魔するのならおまえでも容赦せぬし、もしもナコタが異議をとなえたら、頭からバリバリ食い殺してやるまでのこと」

「お母さん…」

「ススム、息子のこととなれば、母親とはこれほど必死で、おひかで恐ろしきものなのだよ。おまえも覚えておぐがいい」

「僕の本当のお母さんはもう死んじつたよ」

「ふん、そう思つてゐるがいい。ヒヒヒでススム、怪物ギツネはまだ追いかけているのだな?」

「やうやうさうだよ。お母さんに出し抜かれて、頭から湯気を出しき

てる

「いいぞいいぞ。もつと怒ればいい。怒れば怒るほど冷静さを失うのだから」

「これからどうするの?」

「今も言つた通り、私たちは妖怪王国へ向かうのだよ

ところがお母さんのもぐろみ通りにはいかなかつたのです。恐れをなして王国の門番は、斯スムたちの鼻先で入口を固く閉ざしてしまつたのです。

怒り狂つた怪物ギツネが斯スムたちのあとを追つてこるという知らせは、すでにここまで届いていたのでしょ?。門番は言いました。「こくいらヤマメ様であつても、今はお通しするわけにはきません。あの怪物ギツネを王国へ一歩たりとも入れるわけにはいかないのです」

「私が妖怪王の娘であつてもか?」

「ヤマメ様を入れるなとは、その妖怪王様の命令なのです。こうしている間にも、いつ怪物ギツネが姿を見せるかもしません。その本を持つて早くお逃げにならないと、つかまつてしましますぞ」

「今まで言われてしまつと、さすがのお母さんも返す言葉がありませんでした。身をひるがえし、猫坂へと続く道を取つて返すほかなかつたのです。

お母さんほとも機嫌を悪くしていました。

「なんとこう」とだススム、私たちは妖怪王国への立ち入りを拒否されたのだぞ、「

「あの怪物、ギッネが入ってきたら困るからでしょ？、仕方がないよ」

「仕方がないですむものか。私はおまえのように物分つよへはなれぬ」

「いかがひつするの？」

「まず第一に、怪物、ギッネに追いつかれる前に猫坂へ戻ることだ

「だけどお母さん、この道を走っていて怪物、ギッネに出会ひ「」といかなこの？、やつは僕たちを追いかけてくるんでしょう？、「

「妖怪王国と猫坂の間に、2本の街道がある。私たちは行きは東街道を通り、今は西街道を走っているところだ。だからやつと鉢合わせする心配はない」

「でも、こずれ追いついてくるよ」

「だからその前に、退治する方法を考え出さなくてはならぬこのと

「どうやつて？」

「まあ見ておいで。私にアイディアがある」

ヒロがお母さんのアイディアも「まくはりませんでした。

ススムを背中に乗せて走り続け、猫坂製鉄という会社の溶鉱炉の入口へ怪物ギッネをおびき寄せたまではよかつたのです。

溶鉱炉といつのは、高い温度でドロドロに溶けた鉄の入っている巨大な容器ですが、怪物ギッネをそこへ突き落としてしまおうとした作戦でした。

しかし怪物ギッネは予想以上に頭がよく、お母さんの期待通りに足を滑らせてはくれなかつたのです。

結局、煙を吸い込んだススムがゲホゲホとせきをしただけに終わつてしまい、一人はまったく成果なく製鉄所を離れるしかありませんでした。

ススムが言いました。

「お母さん、このあとどうするの？ 怪物ギッネはまだ追いかけてくるよ。僕はもう煙を吸い込むのはいやだからね」

「文句を言つのはおやめ。私も精一杯やつてはいるのだよ」

「あつ、足の先に引っ掛け、怪物ギッネがビルを一つぶつ壊したよ。うわあ、今度は街路樹を根こそぎにした」

「こちいち実況中継しなくてよろしい。打つ手がなく、私はイライラしているのだ」

「本当じどうするの、お母さん」

「ええい仕方がない。こいつなつたら最後の手を使つことにする」

突然カーブして進む方向を変え、お母さんが違う進路を取り始めたのは、このときのことでした。

スヌムは黙つて目をこらしましたが、自分たちがゼロ禅師の寺へと向かっていることに気づくのに、時間はかかりませんでした。

数分後には、寺の屋根が視界に入ってきたのです。

それまでにスヌムは、お母さんとの間で相談を終えていました。怪物ギツネを迎撃つためにこれから何をするか、作戦を教えられたのです。

そのとつぴな内容に、スヌムは思わず目を丸くすることになりました。

「お母さん、本当にその作戦でいいの？ そんなことをしたら本が

…」

「せつかく手に入れたのが無駄になつてしまつと言いたいのだろう？ だが仕方がないではないか。怪物ギツネを退治しない限り、私たちは平穀に暮らせないし、妖怪王国へ帰ることもできないのだよ」

「でもお母さんの息子は？」

「あの子はわかつてくれるだらう。なあに、これであの子の即位がなくなるわけではない。ナコタとまた対等の立場に戻つてしまつというだけさ。」

よいなススム？ 作戦は頭に入れたな？」

「うんわかった。じゃ あ僕を寺の庭に降りしてよ」

それは本当にギリギリで、一瞬の余裕しかありませんでした。本を手にしたススムを庭に降りし、お母さんは再び怪物ギツネの鼻先に戻つて走り続けたのです。

「うまくやつたので、お母さんがもはや本を持つていなうこと」怪物ギツネは気づかず、そのままあとを追い続けました。

その間に、ススムは寺の建物の中へ飛び込んでいったのです。

「禅師いる？ 大変なんだ。大急ぎで必要な道具があるんだよ」

ススムの口から話を聞いて、ゼロ禅師はひどく驚いた顔をしました。

「何だつてススム君？ そんなものをどうするのだい？」

「もちろん使うんだよ。この本の中に隠して、怪物ギツネの腹の中へ押し込んでやるんだ」

「ヤマメがそれを承知したのかい？ 彼女の息子の即位はどうなるのだい？」

「怪物ギツネを退治するためには仕方ないとヤマメも黙つてゐるよ。退治しないと、猫坂の町が壊されやがつもん」

「それは確かにそうだね」

「一人は耳をすませました。まだどこかで建物の破壊される音が聞こえてきたのです。時間をかせぐために、ヤマメは必死になつて町中を逃げ回つているに違ひありません。

さすがのヤマメも、無限に体力が続くわけではありません。今に疲れ切つてしまふでしょう。ススムとゼロ禅師は準備を急がなくてはなりませんでした。

「さあススム君、ついておいで。君が求めている物はこの寺の物置にあるに違ひないが、探すのに時間がかかりそうだ。手伝ってくれるかい？」

懐中電灯を手に、一人は地下へ続く階段を降りてゆきました。

物置は広く、ドアを開けてのぞき込んで、ススムは目を丸くしたのです。

「禅師、これは何なの？ 物がいっぱいあるね」

「代々の住職たちが何百年も用いてきたガラクタさ。さあ探し物を始めよう。手や体がホコリだらけになるが、我慢するほかないね」

そうやって一人は体を動かし始めたのですが、思いがけない声に背後から突然話しかけられ、驚いて振り返ることになるには、1分もかかりませんでした。

「声はこういったのです。」

「おー、やーのやまえたち一人」

相手の姿を見て、斯スムは思わずゼロ禅師と顔を見合わせました。ゼロ禅師も同じように目を丸くしているではありませんか。

「これは」これは小鬼さんじゃないか

ゼロ禅師のあこせつに、小鬼は不満そうに鼻を鳴らしました。

「ふん」

斯スムには始めて目にするものでしたが、小鬼は身長40センチもない姿をしています。体が小さいだけで、頭に生えたツノや牛に似た顔、手足の長いツメは大きな鬼たちと変わりません。

だけどそこに、ずるそつな表情が加わっているふん、一筋縄ではいかない相手かもしだせません。

ゼロ禅師が意味ありげに目くばせをするので、斯スムはしばらく口を閉じていることにしました。

ゼロ禅師は言葉を続けました。

「とこりで小鬼さん、体は小さくとも、あんたはさぞかし名のある妖怪のよひにお見受けするが」

もちろん小鬼は胸を張りました。

「おまえはなかなか目が高いじゃないか。オレの名はツヅラといつて、鬼の世界じゃあちょっとした大物なんだぜ。そのツヅラ様がこ

の物置をすまいにしてるんだ。せつせつと出でゆくが、探し物をした
きやあ、つまみ食い物でもよこしな

「食い物だつて？ どんなものが欲しいのかな

「やつせなあ。新鮮な一ワトロコ羽で手を打とひじやないか

「一ワトロコだつて？ こんな貧乏者にはインスタントラーメンしか
なこよ」

「それでは話にならねえ。探し物をするのはあきらめな。オレは一
寝入りしたいんだ。わざわざと出でけ」

ゼロ禪師とススムはあきれた表情で、もつ一度顔を見合わせるこ
とになりました。

ヒロヒロススムが口を開きました。

「ねえシジラ、僕の友達にナコタといつのがいてね。このナコタが
…」

ところがシジラは、突然鼻でせせら笑つたのです。

「そんな名前を出したつて、怖くなんかないぜ。ナコタの後ろ盾だ
つたラセツはもう死んだじやないか。ラセツのいないナコタなんて、
ただのガキに過ぎないね

「じゃああなたは、怖い物なんてないの？」

「ナコタじゃなくて、ヤマメの息子と知り合いなのだとおまえが言

え、オレも少しほ怖がるかもな

「どうして？」

「ヤマメっていやあ、恐ろしく腕のいい魔力使いとして有名じやねえか。あのラセツを倒した女でもあるしな」

「あなたはヤマメに会つたことがあるの？」

「あるわけねえよ。いつも隠して居るから、ヤマメの顔を見たことのあるやつは一人もいない。妖怪王でさえ、自分の娘の素顔を見たことがないんじやないかという噂だぜ」

「へえ」

「それだけじゃねえぞ。ヤマメの息子つてのが、これまた薄氣味悪いときたもんだ」

「息子の顔も、誰も見たことがないの？」

「誰も知らないのは顔だけじゃなこさ。ヤマメの息子については、どこに住んでいるのかも、それどこか名前だつて不明なんだぜ」

「なぜ？」

「そもそもは王位争いで、ラセツに見つかって暗殺されないようになります。そのためだつたらしい。だから顔も名前も、居場所も内緒にしてあつたんだな。それが噂に噂を呼んで、今では妖怪王国全体が疑心暗鬼になつてゐる」

「疑心暗鬼つて？」

「ヤマメの息子の正体がわからなくて、みんな不安でたまらなくなつてゐる、ということさ。ナユタが次の王になればいいが、もしナユタが負けたら、どこのどんな怪物が王になるかもわからないわけだからな」

「へえ」

「……で思つてがけず、ゼロ禅師が口をはさんだのです。

「ススム君、その小鬼に、君の魔力の杖を見せてやつたらどうかな？」

よく意味はわかりませんでしたが、ポケットから取り出し、ススムはゼロ禅師の言つ通りにしたのです。

小鬼の反応は、びっくりするようなものでした。

カメレオンのよつてに両手を飛び出させ、ススムの杖に見入つたのです。特に注目したのが杖の根元にある王の紋章だったのは、いうまでもあります。

「げげつ、それはヤマメの杖じゃないか

「うん、ヤマメが僕に貸してくれたんだよ

「なんでおまえ……。なんか、おまえとヤマメの間には何かかわりがあるんだな」

「ねえ小鬼さん、お願ひだから僕と禅師の探し物を邪魔しないでね」

「邪魔だと? とんでもない。あとでヤマメにはようじへ言つとこ
てくれ。オレが邪魔をしただなんて、冗談でも言つたじゃねえぜ」

「うふふ、わかつたよ。それで探し物なんだけど…」

「ああ何でも言つてくれ。オレも手伝うよ。この物置に100年住
んでるんだ。どこに何が置いてあるか、すみずみまで知つていろよ」

「いやつやつて、斯スムとゼロ禅師は目的の物を手に入れることがで
きました。

あまり大きな道具ではありません。手のひらに乗るほどのガラス
びんだったのです。

ビンの口はかたく閉じられ、封がされています。中身は黒い粉が
ぎつじつと詰まっていますが、正体はわかりません。

「禅師、この黒い粉は一体なんなの?」

「うんススム君、それはね…」

お母さんが寺に姿を現したのは、ちょうど10のときのことでした。
「お母さん」勢いで窓から飛び込んできたのです。

斯スムは田を丸くして迎えました。

「ヤマメさん、怪物ギッネはどうなったの?」

「ときどき呪先で引っ掛けで建物を壊しながら、今も町の中を走り続いているよ。ついさっきナユタがやってきて、追われる役を私と代わってくれた。ナユタに本を渡すふりをしたら、怪物ギツネはすぐ信じてだまされてくれた」

「それはいいけど、これはどうい使いの？ 田当ての道具は見つけたよ。ほら」

「おお、あつたのか。では斯スム、私の背にお乗り。ポケットにそつと入れ、そのビンは壊さないよう気をつけのうだよ。中身は大変に危険なものだからね」

「うん、わかった」

ゼロ禪師に見送られ、斯スムとお母さんは寺を離れたのでした。

お母さんの背中の上で、斯スムが声を上げました。

「うわあ、怪物ギツネが電車をひっくり返したよ」

「じいだ斯スム？」

「あそこ」の駅のところ。今ナユタは線路ぞいを走っているんだね

「あの線路はこの先、左へカーブしているのだったな。うまく近道ができるそうだぞ」

「ねえお母さん、このガラスびんの使い方を説明してよ」

「おまえのポケットの中にはヒモがあるか？」

「うんうん。こいつが持つておられるのがいいんだが、とにかくねえ。」

「それせいかいじどがあるからだ。そのヒモで、ガラスびんと本をしつかつしつぜつ畳ねせるのだよ」

「本はもつたいないね」

「仕方がないさ、妖怪王国の王にならうという者が、猫坂の町を見殺しこしたなどと言つては評判が下がるからな。」

「アルカナ?」

「妖怪王国と猫坂は、大昔から兄弟のように付き合つてきたからさ。猫坂の町に今でもたくさんの妖怪が住んでいるのは、それが理由なのだよ」

「へえ」

「さあススム、用意はできたかい？ しつかりとじばつて、ああそ
れでいい」

「この黒い粉の正体は何なの？」

「カビの胞子を」

「胞子つて？」

「カビの種のようなものだよ。そのカビは紙が大好物なんだ。特に

何百年もたつて、古くて乾ききった紙がね

「じゃあカビは」の本を食べるんだね

「その本だけじゃなこ。怪物ギツネの体内にあとで弔入つていてることをお忘れでないよ」

「ああそりが。でも本がカビに食べられて、後はどうなるの？」

「怪物ギツネは、本の魔力のおかげで生きていることができるのだがよ。それがなくなるのだから、ただではすまないよ。

まあ斯スム、線路に着いた。怪物ギツネがこわいくやつてくるが。ああ、その目の前をナユタが必死で走っている姿も見える。いけ好かないガキだが、今回だけは協力するしかないな」

「お母さんつて、本当にラセツやナユタが嫌いなんだね。実の妹や『おい』なのに」

「それは余計なお世話や、斯スム。まあ私におつかまつ。ついに怪物ギツネと一騎打ちだ」

「武者ぶるこどもか、斯スムは怖くて怖くて仕方がありませんでした。でもお母さんと一緒にだから、なんとかやることができたのかもしれません。」

物影から突然現れた斯スムたちの姿に怪物ギツネは驚いたようでしたが、すぐに表情を変え、進路を変えて迫ってきたのです。斯スムの手の中に本を見ることができたからでしょう。

田を緑色に輝かせ、怪物ギツネは足に力を込めたのです。お母さんの声がススムの耳に届きました。

「ススム、油断をするのではないよ。あと数秒で私たちはやつとすれ違う。私たちはやつの体の下をくぐり抜けるから、うまくタイミングを計って、おまえはその本をやつの鼻先にポンと放り投げるんだ」

「それで大丈夫なの？」

「やつの田には本しか見えていないんだ。あのでかい口でパクンとのみこむことだわ！」

「やのあとはいいわるの？」

「ふふふ、あとは畠田のお楽しみといつゝことや」

お母さんの言ひとは正しかったようです。猛烈なスピードで迫つてくる怪物ギツネに向かって、お母さんは言葉どおりの走り方をし、ススムもうまく作戦を実行することができました。

放り投げられた本とビンを、作戦通り怪物ギツネがパクリとのみ込んでしまったときには胸がすっとしましたし、ススムはうれしさのあまり、お母さんの背中の上でじねじりしたほどです。

作戦が効果を發揮するには、お母さんの言ひとおり一晩かかってしました。

3冊の本をすべて手に入れて満足した怪物ギツネはおとなしくなり、町の一角に立ち止まつたのです。

一日中走り回つて、さすがに疲れていたのでしょう。腹ばいになつて田を閉じ、いつの間にか眠つてしましました。

しかしそのまま、怪物ギツネは一度と田を覚ますことはなかつたのです。

翌日、朝日が差し始めるころ、猫坂の人々が驚いたのは、昨夜の同じ場所に、なぜか怪物ギツネの姿がもはやないことでした。そこには怪物ではなく、岩山が一つあるだけだったではありませんか。

学校帰りにわざわざ遠回りをして、友達と一緒に岩山見物をしながら家へ帰ってきたススムは、もちろんお母さんに質問しました。

お母さんはすぐによく答えてくれました。

「ああ、あれかい？ 体の内部からカビに食われて、怪物ギツネは化石になつた。つまり石に変わつてしまつたのだよ。あの岩山は、どこかギツネに似た形をしていただろう？」

「うふ、みんな不思議がつてた」

「元がギツネなのだから当然のことや」

「あの岩山の内部では何が起つてているの？」

「本を食べたカビは、猛烈な勢いで繁殖したに違いない。すぐに怪物ギツネの体全体をおおいつくしたさ」

「でも、どうしてそれが化石になつたの？」

「そこが魔力というものの不思議なところさ。理由は誰も知らないが、魔力はときどきああい化石現象を引き起こすのだよ。しかしおかげで怪物ギツネを退治できたのだから、よかつたではないか。

今朝の新聞にも出ていたが、あの岩山を開発して遊園地を作ろううという計画が、猫坂の町ではさつそく持ち上がりつていてるそうだ。私にはカビの繁殖力よりも、人間の金銭欲や図太さのほうがよっぽど怖いと感じられることがあるよ……」

本を見つけた（後書き）

次回の投稿は10月12日（水）を予定しています

塩塚の怪異

ある山奥に『塩塚』と呼ばれるものがありました。

何十トンもの塩がまるで山のように積み上げてあるのですが、「これには絶対に手を触れてはいけない」と昔から言ひ伝えられて、近寄る者もなかつたのです。

しかしそれも、この口までのことしかありませんでした。

ある不心得者がこの塩塚に興味を持ち、なんとスコップを持ち出したではありませんか。

「この塩を売れば、金になるに違いない」

この男は、そんなことを考えたのかもしれません。

ガシツ、ガシツ。

スコップの先は塩塚へと食い込んでゆきました。表面は少し汚れていましたが、内側からは雪のよつて白い塩が顔を出したのです。

男が売り歩く塩は、かなりの評判になりました。それなりに味がよかつたのです。

しかもスコップで掘り出しているのだから元手はゼロ。男はたちまち大もづけをすることができたに違ありません。

ゼロ禅師の仕事の中には、大昔から妖怪を封じ込めてある場所に

異常はないかと、見てまわることも余まれていました。

寺を離れ、年に一度、猫坂市のまわりをひとまわりするのです。

だけど今日はスヌムも一緒にでした。ちょうど学校が休みだったのでも、おもしろがってついてきましたのです。

塩を盗まれ、大きく穴を開いた塩塚の前で、ゼロ禅師は立ちつくしてしまいました。

「禅師、どうしたの？ 大きな穴だねえ」

「スヌム君、誰かがここに塩を盗み、そのせいで、中に閉じ込められていた妖怪が逃げ出してしまったようじや。じらん。塩の表面にスコップの跡がある」

「本当だ。でも穴の奥のほつこは跡がないよ」

「あれは、塩がなくなつて重しのなくなつた妖怪が抜け出していつた跡だからぞ。大変なことになつたぞ」

「どうして？ ここにはどんな妖怪が封じ込めてあつたの？」

「ああスヌム君、それはね……」

ところが一人の会話は、激しい羽音と、けたたましい声でかき消されてしまったのです。

「おーい禅師禅師、妖怪禅師」

見上げると、空から一羽のフクロウが舞い降りてくるといひでした。

ススムが声を上げました。

「あつフクロウだ。禪師、あれは僕の家に住んでいる妖怪ギツネの家来なんだよ」

木の枝にとまり、フクロウは不満そうな顔をしました。

「オレは家来じゃないぜ、ススム。弟子と言つてくれ。しかしそんなことより、猫坂の町でいま大事件が起つてるんだぞ」

ゼロ禪師は顔色を変えました。

「どんな事件なのかな?」

「市民たちが何の前触れもなく、突然ハトに変身するといつ異変が相次いでいるんだ」

「ハト? ハトだつて?」

「被害者はもう何十人も出てる。早くなんとかしないと、今に猫坂中の人間がハトになつちまうかもしれないぞ」

ゼロ禪師とススムが大急ぎで町へ帰ったのは、いつまでもありません。

そして町ではまさしく、フクロウの言つ通りのことが起つていて、たのです。

被害者の数はすでに100人を超えていました。そしてなんと、その中にはスヌムの姉のミチコも含まれていたのです。

ゼロ禅師は調査を始めましたが、手がかりはありません。夕方になって、疲れた表情でスヌムの家を訪ねたのです。

「こんばんは、スヌム君はいるかな?」

「ああ禅師、お姉ちゃんやその他の人たちの行方はわかったの?」

「いや、それがまだ何もつかめないのだよ。みんなあつという間にハトに変わり、パタパタと羽ばたき、どこかへ飛んでいってしまうた。行方はまったくわからない」

「ふうん」

「ミチコさんは何をしていてハトになつたのか、詳しく教えてくれるかい?」

「こつちへおいでよ。お姉ちゃんの部屋で説明するよ。そのまうがわかりやすいでしょ?」

「そうだねスヌム君…。ああ、これがミチコさんの部屋だね」

「こ」の机の前に座つて、お姉ちゃんはマンガの本を読んでいたんだ。暑いから、こ」の窓は開けてあつた

「ほひ、ちゅうど机のまん前にあるね。何の本を読んでいたのかな?」

「月刊のマンガ雑誌だよ。でも日本中で何万部も売れている本だから、手がかりにはならないと思つ。ハト変身事件が起きていたのは、猫坂の町だけなんでしょう?」

「そのとおりだよ、ススム君。おや? 机の上に皿が置いてあるね。マンガを読みながら、ミチコさんは何か食べていたのかい?」

「たぶんホットケーキだと思つ。お姉ちゃんの好物なんだ。いつも自分で作って食べてるよ」

「ホットケーキといつも、ハチミツをかけて食べるあれだね」

「でもお姉ちゃんは変わってるよ。ハチミツじやなくて、いつも塩をかけて食べるんだ。そのほうがおいしいんだって。珍しいよね」

「塩だつて? ははあ、机の上のこのボウルに入っている白い粉だね」

「うん、たぶんそうだと思つ。ちよつとなめてみようか?」

「いやいやススム君、やめたほうがいい。それがミチコさんのハト化の原因かもしだよ」

「どうして? いの塩が?」

「いの家の柱には妖怪ギンネが住み着いていたね。すまないが呼んできてくれるかい?」

ススムが言われた通りにしたのは、いつまでもありません。スス

ムのあとをついて、妖怪ギッネは機嫌よべりトの部屋までやってくれました。

「なんだ禅師、私に用とは珍しいな」

「ああギッネさん、少し手を貸してもらいたくてね」

「手だと… 私には足が4本あるだけだぞ」

「これからわしは、この塙を少しなめてみようと思う。するとある変事が起ころうが、そうなったとき、スヌム君と共にわしのあとをついてくれるかい？」

「わづと翼が生えて、わしは空を飛んでゆく」とだらうと囁つが

「ふうむ、なんだか知らんがおもしろそうな話だな。わづと逃げしていったところだ。何でもやってみせるがいいわ」

そしてゼロ禅師は言葉どおりにしたのでした。

口の中に塙を入れ、ビンを机の上に戻した瞬間、ゼロ禅師の小柄な体が一面の羽毛におおわれ、両腕が翼に変化してしまったのも、驚くことではないのかもしれません。

ポツポと一声鳴いたかと思つとゼロ禅師は羽ばたき、窓から飛び出していくたではありますか。

あまりのことにスヌムは呆然としていましたが、妖怪ギッネはほんやりなどしてはいませんでした。

「さあススム、早く私の背中にお乗り。今からあのハートを追いかけてゆくのだから」

ススムの体重を背中に感じると妖怪キツネは全身の力を使ってジャンプし、窓から外へ飛び出したのです。

キツネの鋭い眼は、ハートの姿を見失うことなどありませんでした。距離をとしながらも、きちんと着いてゆくことができたのです。

ススムが口を開きました。

「ねえお母さん、ゼロ禅師はどうまで飛んでゆくのだ？」

「それは私にもわからないよ。しかし、そこにはモロや他の人々もいるのは確かだらうね」

「お母さんの弟子のフクロウはどうへ行つたの？ 僕と禅師との事件のことを知らせるために、山の中まで来てくれたんだよ」

「あれは私が行かせたのさ。それにフクロウは今、ほりおまえの肩の上にいるじゃないか」

「そう言われてやつと、ススムは気がついたのです。

「あれ本当だ。フクロウさん、いつの間に来たんだい？」

大きな田玉をギョロコと動かし、フクロウはススムを見つめました。

「すこし前からおまえの肩にいたさ。それはそつとお師匠様、これ

「か、ひつひつするおつもつで？」

「それは敵の出方しだいだな。そもそも敵の正体すらまだわからぬところに」

ススムが声を上げました。

「あつ、何か見えてきたよ。禪師はあそこへ向かっているみたいだ」

お母さんとフクロウが顔を上げると、ススムの言つとおりでした。
「こ」はもう猫坂をかなりはずれた場所なのですが、月の光に照ら
されて、見たこともない建物が目の前にそびえているではあります
んか。

「ねえお母さん、あれは何なの？ おかしな形の建物だねえ」

フクロウがクチバシを開きました。

「あれはなススム、アメリカの1870年代にはやつた様式をそつ
くりそのままマネた建物だ。時代は南北戦争の直後で……」

お母さんが口を開きました。

「黙れフクロウ。おまえの物知りぶりはもうわかつた。問題はあの
建物の建築様式ではなく、内部に何者がひそんでいるのかというこ
とだ」

「あつお母さん、あの建物の一番上の階は、大きな鳥小屋になつて
いるみたいだよ。窓にはぜんぶ金網が張つてある」

フクロウがあきれた声を出しました。

「そして金網のむし「うはハトがいっぱいときたもんだ。ねえお師匠様、ご存知ですか？ ハトとフクロウは大昔からたいそう仲が悪いんですね。オレはもうハトを見ただけで寒気がして、背中がぞくぞくしてきました」

「背中がぞくぞくするのなら、あとでカゼ薬を飲んでおけ。残念ながら、私は弟子に甘い顔をする趣味はないのにな。いやなら今すぐ妖怪王国へ帰れ。私は新しい弟子をとるわ」

「いやだなあ、お師匠様。ただの冗談ですよ」

「なら下らん」と言つてないで、あの屋敷の様子を探つてこい。呼び集められたハトは最上階に閉じ込めてあるのだろう？ 他の階を見てこい。屋敷の主人が誰なのか、それが知りたいのだ

お母さんに命令されて、いかにも気のすすまないふうに、フクロウはパタパタと姿を消しました。

でもフクロウはなかなか帰つてこなかつたのです。5分たつても10分たつても、戻つてくる様子はありませんでした。とうとうスマムもお母さんも待ちくたびれてしまつたのです。

「ねえお母さん、フクロウは一体何をしてるんだろうね。まさか敵に捕まつたのかな」

「そこそこの呪文が使えるから、そんなことはないと思うがね。しかしそれにしても遅すぎる。私たちが見にいくしかないね」

「ねえ、禅師が敵に食べられたりしてないだろ？」「ほつススム、なかなか楽しみなことを言つてくれるではないか。

それが事実なら、どれだけうれしいか」

「お母さん…」

「そんな非難がましい顔をするものではないよ。お忘れかい？ 私はあいつのせいで、ワサビを口こっぱに食べさせられたのだよ」

「あれはもともとお母さんが悪いんじゃないかな」

「ふん、そんな話は聞きたくないね。とにかく一緒においでのおまえは、ゼロ禅師が気になるのだろうが、あんな頼りにならぬ弟子でも、私はフクロウの面倒を見てやらねばならん。

おまえも大人になつたら氣をおつけ。弟子を持つとは面倒なものだよ」

「そう？ 僕の母には、息子を持つことのほうがよっぽど面倒が多いように見えるけどなあ」

「子供のくせに、生意氣なことを言つのはおやめ。まあ屋敷が近づいてきた。そこドアがある。斯スム、私の背中から降りて、ノックをして『じりん』

もちらんススムは、言われた通りにしたのです。

少し待つと返事があり、執事がドアを開けてくれました。

頭のはげた老人で、きちんとネクタイをして正装しています。スムは古い映画のシーンを思い出していました。

「を開こうと思ったのですが、スムはうまいセリフを思いつくことができませんでした。助けを求めて振り返ったのですが、なんということでしょう。もつスムの背後にお母さんの姿はなかったではありませんか。

「あれれお母や…」

スムのポケットの中から小さな声が聞こえてきたのは、このときのことでした。

「私はここにいるよ、スム。魔力を使って、うんと小さく変身しているのさ。私のことは気にせず行動おし。いやとこいつとせには、必ず飛び出して助けよう」

それを聞いて安心し、もう一度執事のほうを向いて、スムは微笑むことができたのです。

「ええと、このお屋敷の主人はいらっしゃいます？」

「はい。先ほどからあなたをお待ちしております。お話があつてみえたのでしょ？」

屋敷の主人といつのは、若い少年でした。スムとほとんど同じ年頃だったのです。

書斎なのでしょうか。大きな机があり、壁のまわりを囲んでいる

本棚には本が何十冊も並んでいる部屋にススムを迎えてくれたのです。

部屋の中で香をたいているので、その匂いが強くただよっているのが鼻につきはしますが、それ以外におかしなところはありませんでした。

さつそくススムは口を開きました。

「君がこのお屋敷の主人なの？」

「そうさ。そして君は、あのお坊さんを追いかけてやつてきたのだね」

「お坊さんって、ゼロ禅師のこと？ もう一人フクロウが来なかつた？」

「いや、それは知らないな。ここには来ていないよつだよ」

「本当に？ どうへ行つちやつたのかなあ

「あのお坊さんはゼロ禅師といつのかい？ 今はこの屋敷の3階に、他の人々と一緒にいるはずだよ。実はある作戦を考えて実行したんだが、うまくいかなくてね」

「作戦？」

「もちろん塩塚から塩を盗み、妖怪を野放しにしてしまつた憎い犯人を見つけ出す作戦だ」

「ははあ。でも「まくいかななかつたつて、ざつこつ」となの?」

「あの塩塚は、僕の一族が代々所有してきた山の中にある。実は、先祖がカシャといつ妖怪をの中に封じ込めてね」

「それはどんな妖怪なの? あまり名前を聞いたことがないけど」「形は僕も知らないよ。でも人の死体を盗んでゆく悪いやつだそうだ」

「人の死体つて?」

「文字通りの意味さ。盗んでどうするのかは知らないが、葬式がすんで墓地へ運ぼうとすると現れ、力ずくで奪つてゆくのだよ」

「へえ」

「それをやめさせるために、僕の先祖がなんとか捕まえ、あの塩塚の下に封じ込めたんだ」

「それが塩泥棒のせいで外へ出でてしまったんだね」

「だから協力してくれるかい? なんとかカシャをおびき寄せて、捕まえなくちゃならないんだ」

「もう一度塩塚に閉じ込めるんだね。でも僕のお姉さんやゼロ禅師は、どうしてハトになっちゃったの?」

「塩を盗んだ犯人を捕まえるためだつたのさ。盗んだ塩を、犯人も自分で食べるだろうと思つたからね。塩塚の塩には、食べるとハト

に変身する呪文をあらかじめかけておいた。

でも無駄だつた。ハトになり、帰巣本能でこの屋敷へやつてきた人々の中に犯人はいなかつたよ。

だから全員、いざれ釈放するつもりだが、とにかく今はカシャを捕まえるのが先だ。スヌム、君も手伝ってくれるだろ？

スヌムはもちろん首を縦に振りました。さつそく準備が始ましたのです。

死体を盗む妖怪をおびき寄せるのだから、まず死人が必要です。その役は執事にやつてもらつことにしました。

いかにも年寄りで、写真を撮つてひつぎの上に飾るのに似つかわしかつたのです。

他の召使いたちの手も借りて、屋敷のおもても葬式にふさわしく飾り付けることができました。

屋敷の中で一番広い部屋に集まり、お葬式をするマネをしました。あとはひつぎを荷車に乗せて、丘の上の墓地まで運ぶだけです。かつたのです。

葬列が墓地に着いたのは、もう真夜中近い時間でした。

都会と違つて、田舎の空は真つ暗で、一面に星が輝いています。

その中央に丸い月が光っているのですが、興奮しているせいか、ススムは疲れなどまったく感じませんでした。

この地方には、お葬式のときと変わった習慣がありました。死者を墓地に埋めた後、親族の若者が翌朝まで墓地で寝るの番をするのです。

だからススムたちが墓地にとどまつていっても、おかしな眺めではないのでした。屋敷の主人だという少年は、すでにススムに自己紹介をすませていました。

「僕の名はタマオといつのだよ。そう呼んでくれ」

「じゃあタマオ、カシャはいつの死体を取りにやつてくると思つ？」

「それはわからない。だが僕は、カシャには背後からあやつっている黒幕がいるのではないか、という気がして仕方がないんだ」

「黒幕つて？」

そうやってタマオと話しながらも、実はススムは、ポケットの中から小声でさわやかお母さんの指示にもちやんと耳を傾けていたのです。

「いいかいススム、私の言つことをよくお聞き。このタマオという少年はどうも怪しい。人間をハトに変える呪文など、ただの子供に使えるはずがない……」

なかば上の空のススムの様子に、タマオが気づかないわけがあり

ません。

「どうしたんだいススム？ 急にかがんで足元の小枝を拾つて、ポケットの中に入れたりして。何か理由があるのかい？」

「ううん、なんでもないんだよ。気にしないでいいよ」

「そりゃかい？ 今も言つたけど黒幕とはつまり…、しつ、何か音が聞こえたぞ」

「どうから？」

「あの茂みの影さ。ついにカシャが現れたのかもしれないぞ」

タマオの言つとおりでした。茂みの枝や葉が大きく揺れ、何かが姿を見せようとしているのです。

思わず息をのんだのですが、現れた敵の姿は、ススムをひどく驚かせることになりました。

カシャとはなんど、猫と鬼の中間のような形をしていました。まるで巨大なトラネコを一本足で歩かせ、頭に鬼の角を乗せたような姿だったではありませんか。

これにはススムも意表を突かれてしまいました。

「タマオ、あれはなんだい？」

「あれがカシャだよ。ススム、僕たちは少し下がったほうがいいね。カシャはひつきをねらつているよ」

ススムとタマオは、さつそく数メートル後ずさりすることになりました。ススムたちの存在など気にする様子もなく、ドスドスとやつてきて、すぐにカシャが墓をあばき始めたのは、いつまでもありません。

それは恐ろしい力だったのです。墓石はあつといつ間に倒され、ひつぎがあらわになつてしましました。

カシャがそのフタを引きちぎるのを、二人は息をのんで見つめることになりました。

ひつぎには仕掛けがしてありました。

内部には死体など入つていません。その代わりに、勢いよく飛び出す火薬仕掛けの大きなアミがセットしてありました。これはワナだつたのです。

突然、バンという大きな音があたりに響きました。それと同時に、目にもとまらない速さで広がつたアミが、カシャへと飛びかかっていつたのです。

普通のアミではありません。特別製のとても頑丈なものです。

といふがなんといふことでしょう。

その強いアミも、妖怪の腕力の前にはまったく無力だったのです。あつという間に引き裂かれ、カシャは自由の身になつてしましました。

タマオが叫び声を上げました。

「これはまずい。ススム、すぐに逃げるんだ」

もちろんススムはその言葉に従つたのですが、つまくゆきませんでした。

カシャの体は、人間よりもふたまわりは大きいのです。そのぶん速く走ることができるに違ひなく、ススムとタマオはすぐに追いつかれてしまいました。

おまけに一人は、気がつくと巨大な岩壁の前にいたではありますか。通せんぼをされてしまい、しかも岩壁は垂直で高く、手をかけて登ることができないよつな「ボボ」はまったくありませんでした。

「タマオどうしよう」

「ポケットの中に何か持つていないかい？ 小さなナイフでも何でもいいんだ。武器にできそうなものなら」

「うーん、こんなものならあるけど……」

そういってススムが見せたのが、魔力の杖だったのです。

「なんだススム、そんなものを持っているのなら、最初からお見せよ。どれ、僕が使ってカシャを退治してやる」

気がついたときには、ススムは魔力の杖を取り上げられていました。手の中に握り、タマオはうれしそうに振り回すのです。

ススムは声を上げないではござれませんでした。

「タマオ、遊んでいる暇なんかないよ。早くカシヤをやつつけないと」

「ああススム、忘れていたよ。カシヤというのは、そういうことかい？」

次に起こった出来事は、ススムを驚かせるどころか、呆然とさせることに十分でした。

とがつた牙の見える口を動かし、ゴー＝ゴー＝ゴーと呪文をとなえたかと思うと、カシヤの形は突然変化し、まったく別のものになってしまったではありませんか。

田の前に見えていたものを信じることができず、ススムは口をボカンと開けるしかなかつたのです。

なんとカシヤは、ガゴジの姿へと変わつていたのでした。

「ガゴジ？ あんたはナコタの家庭教師だよね。どうして？」

それに答えたのはタマオでした。

「カシヤの姿に変身するようことで、僕が命じておいたからさ」

そして呪文をとなえ、今度はタマオ自身も姿を変え、本来の姿を見せたのです。それがナコタだったのは、いつまでもありません。

もうススムは本当に何を言つていいか、見当もつきませんでした。

「ナユタ…」

「そうさ 스스로、これで僕は、君の『魔力の杖』を手に入れたわけだ。杖のない君など、もう怖くはないね」

「杖がなくたって、僕にはお母さんとゼロ禅師がついているよ」

「お母さん… ヤマメのことかい？ 姿が見えないが、どこにいるのだね？ ゼロ禅師は屋敷の中に閉じ込めてあるがね。ハトの姿では、何の呪文もとなえることができまじよ」

「すべて計画してあつたことなんだね」

「その通り。塩塚から塩を盗んだのは僕を」

「カシヤはビッグなつたの？」

「閉じ込められていた年月が長すぎたのだろう。さすがの妖怪もう死んでいたから、別の場所にほうむつてやつたさ。それはそうとこの杖だ。

「この杖はほら、こうしてやるのや」

次にナユタは、とても信じられないような行動を取つたではありませんか。力を込めたかと思うと、手の中の杖をボキンと折つてしまつたのです。

ススムこは「あつ」と歯を上げることしかできませんでした。

あれはお母さんから借りた大切な物です。折られると魔力が完全になくなってしまうことも、斯スムは知っていました。

「あはははは」

ところがこのとき、大きな笑い声があたりに響いたのでした。

女の声でした。次の瞬間、斯スムのポケットから飛び出し、お母さんが姿を現したのです。

でもナユタは、顔色ひとつ変えるわけではありませんでした。それどころか、うれしそうに笑い始めたではありませんか。

「やあ親愛なる伯母上。いずれ顔を見せると思っていたよ。だが一足遅かつた。あんたの大切な杖は、このとおり真つ二つになってしまったよ」

だけどお母さんもニヤリと笑うのです。

「ナユタ、自分の手の中にある物をよべ」らん。それが私の杖だといつのかい？」

今度こそナユタは顔色を変えることになりました。ヤマメの杖だと思っていたものは、なんとただの木の枝でしかなかつたのです。

「くそっ、いつの間にすり替えたのだ」

「かがんで、斯スムに小枝を拾わせたときも。斯スム、ポケットの中にもう一度手を入れてござらん」

ヤマメの言葉に従い、ススムはパツと顔を輝かせました。彼の指は、キズ一つない完全な杖をつかみ出すことができたのです。

ナコタの声があたりに響きました。

「ええい、失敗だったか

ガゴジも声を上げました。

「坊ちゃん、どうなれこます?」

「どうせいつも、いうなればヤマメと戦うしかなことを

「わしもお手伝いいたします

「ああ、すまんな

そう答えながら、服の下からナコタが自分の杖を取り出したのは、このときのことでした。

ナコタとヤマメは向かい合い、今にも呪文をとなえあうかと思われました。ところがここで、また思いがけないことが起こったのです。

2本の杖が、突然強い光を発し始めたではありませんか。そして2本とも、あつという間にナコタやススムの手を離れ、まるで意思を持つているかのように空中へ飛び上がったのです。

それを見上げ、思いがけなさに全員が呆然としてしまったのは事実です。でもとにかく自分を取り戻したのは、ヤマメが最初でした。

意外な出来事に驚いて、まるで隙だらけのナコタとガゴジを見て、ヤマメはほくそえむことになりました。すかさず一人に飛びかかったではありませんか。

いくら魔力を使うことができても、不意を突かれはどうすることもできません。ヤマメの長い足にガツンガツンと見る間になぐり倒され、ナコタもガゴジも氣を失つてしまつたのでした。

棒切れのように地面に伸びてしまつた一人を満足そうに見下ろしていましたが、ヤマメはやがてススムを振り返りました。

「ススム、2本の杖はどうなつた？」

「空のかなたへ飛んで、両方とも見えなくなつてしまつたよ」

「2本並んで、仲良く飛んでいったのだな。方向はどうちだつた？ 北か？ するとその方角に、杖をあやつって飛ばせた者がいると いうわけだ」

「杖は盗まれちゃつたの？」

「そうや。どちらも強い力を持つたすばらしい杖だからね。この世の妖怪といつ妖怪がみな欲しがつてゐる。私たちは、まんまと隙を突かれたといつわけだ」

「これからどうあるの？」

「こ」の伸びてこむ一人を、まずなんとかしなくてはな。うん？ あれはなんだ？」

「どうしたの？」

「スマーヴィン。ガーディの服のポケットがいま動いたのだよ。中に何か入っているのではないか？」

身構えるスマーヴィンたちの田の前で、ついにポケットの中身が姿を現しました。

でも敵ではなかつたのです。なんとフクロウだつたではありますませんか。

パタパタと羽ばたいてスマーヴィンの肩にとまり、フクロウはクチバシを動かしました。

「ああひどい田にあつた。お師匠様、こんな田にあつのは、もう一度ど」「めんですよ」

「おまえは今までどうにじたのだ？ 私たちは大変だつたのだぞ」

「オレもそれなりに大変だつたんですよ。屋敷を偵察に出て、窓からドアか、壊れた壁の穴か、とにかく入口を探してました」

といふがそんなものは見つからず、ウロウロしていたら突然誰かに後ろからガツンと殴られて、氣絶してしまいました。気がついたらこのポケットの中にいて、今やつと、はい出してきたというわけでした

「おまえが頭を殴られたカタキは、私が取つてやつたぞ。それでフクロウ、おまえに頼みたいことがある」

「はい、お師匠様。なんでもお申し付けください」

「まあナコタヒガハジだ。体をしづら、ビニカに閉じ込めておけ。呪文を口にすることができないよつて、猿べつわをする」とも語れるな」

「はい」

「屋敷に閉じ込められているハトたちは呪文をといて、全員解放してやれ。ゼロ禅師には、ここで起にったことを説明してやってよい。あの男は今後も多少の役に立つ。わかったか?」

「はい、お師匠様。お任せください」

「では私とススムは出かけんぞ」

「ビニへ行かれるので?」

「飛び去った2本の杖を追いかけるのさ。なんとしても取り戻さなくてはならん。まあススム、出かけよ。私の背中にお乗つ」

「うん、お母さん」

フクロウに見送られながら、ススムとヤマメの旅が始まったのです。

塩塚の怪異（後書き）

次回の投稿は11月3日（木）を予定しています。

「妖怪禅師」は次回の投稿で完結する予定です。

新王の誕生

「この旅は長く続くよ」と思いました。だからススムは口を開いたのです。

「ねえお母さん、もう夜が明けよつとしているよ。長い旅になるのなら、家へ連絡しないと、お父さんやお姉ちゃんが心配するよ」

「それは大丈夫さ、ススム」

「どうして?」

「私たちははつこなつき川を渡つただろ?」

「うん、大きな川だつたね。呪文をとなえて、お母さんはいつものように水面を歩いて渡つた」

「あの川をすぎて、私たちは『死者の国』へと入つたといふわ」

「えつ?」

「そんな驚いた声を出すものではないよ。あの川は、人間世界と死者の国をへだてているものでね」

ススムは思わず振り返りましたが、川はすでに遠く、もう水面がわずかに光つていていただけでした。

「あれは『せんずの川』だつたの?」

「やつとも言つね

「じゃあ僕たちは死んじやつたの？」

「ふふふ、そうではないさ。生きたまま死者の国へ足を踏み入れることができる呪文を、私は自分自身とおまえにかけておいたのだよ」

「まさか本当に？」

「本当や。私にしか用いることのできない高度な呪文でね。斯スム、私は妖怪王国でも1、2を争う呪文家なのだよ。そのことを、おまえはもつと勝手に思つてよー」

「むづ思つてゐるよ

「おやおや、それは光榮なことだな。ナコタやガゴジですか、こんな呪文は用いることができぬ」

「それはいいけど、僕たちは元の世界へ帰ることができるの？」

「もちろんや。だが前を『』うん。2本の杖は光を発しながら、はるかかなたを飛んでいく。あとを追つては、あの川を越えるしかなかつたのや」

「だけど荒れ果てた風景だねえ。まるで砂漠みたいで、とがつた背の高い山がいくつもある」

「油断をするのではないよ。『』は私ですらまだ来たことのない世界だからね」

「いやつて一人は、死者の国を駆け続けたのです。

やがて前方に小さな店が見えてきたとき、意外さのあまり、ススムは目を丸くすることになりました。

「お母さん、こんなところにも店があるよ」

「ああ、あそこ少し休もう。私もこさわが疲れた」

「杖はどうするの？ もうとっくに見えなくなつたよ」

「心配はないさ。杖たちは、きつかり北を囁きして飛んでいた。明日の朝、また北を囁きして出発しよう」

「ねえ、本当にお父さんやお姉ちゃんに連絡しなくていいの？」

「人間の世界と死者の世界では時間の流れ方が違うのだよ。たとえ私たちがこちらで一週間過ごしたとしても、人間の世界では5分とたつてはおらぬさ」

「へえ」

「だからミチたちのことは心配ない。わあ店に入らへ。何か食べる物があればよいが」

外から見るほど店の中は狭苦しくはなく、ランプの光で照らされていて、見回しながらススムはほつとあることができました。

ただ店の中は空っぽで、主人らしい女が一人いるだけだったのです。

「あの、おばあさん…」

ススムは話しかけようとした。

ところがススムの言葉は途中で止まってしまったのです。女がヤマメの姿に気づいたからでした。

「これは、ヤマメお嬢様ではありますか」

ヤマメも表情を変えました。

「おやオウナ、おまえはオウナなのか？」

「お嬢様、おなつかしいります」

「ふふふ、元気だったかという質問は変だな。ここは死者の国であるから

「まあかヤマメ様も亡くなられたので？」

「やうでなー」

ヤマメは事情を説明し始めたのですが、2本の杖のことで話がおどぶとオウナが田を丸くしたのは、いつまでもありません。

「そのようなことがあったのですか。それはまあレーラセツの仕業に違いますまい」

「」でススムは口を開いてしまいました。

「ねえオウナさん、ビーブレーセンがここにいるの？」

ところがオウナは、不思議そうな顔をするばかりなのです。

「ヤマメ様、いま口をきいたのは誰です？ ヤマメ様は誰かをお連れなのですか？ 私の町には誰も見えませぬが」

「ああオウナ、私にはまさしく連れがいるのだよ。ススムといふ名で、生きた人間の子供だ」

「人間の子供ですと？ なぜそのような者をお連れなのです？」

「事情はいろいろとな。ススム、おまえはもう気がついておらう？ 死者の国の住人たちは、生者であるおまえの姿を見ることができないのさ」

「僕の姿は、透明人間みたいに透明になつていてるの？ ビーブレーセン？」

「それが死者と生者の関係だからさ。人間の世界へやつてきた死者は幽靈と呼ばれ、よほど暗い月の夜でないと姿を見ることができないだろ？」

「ふうん。生者である僕は、この国では幽靈みたいな存在なんだね」

「しかもこの国には月がない。だからおまえが姿を見られる」とは、まずないと思つていい

「へえ」

オウナが口を開きました。

「声から察するに、ススムとまだ本当に子供のようですが。おお、それで思い出しました。ヤマメ様、息子様はお元気にしておられますか？」

息子様の名前も存じ上げず、私はお顔を見た」ともないが

「ああ、私の息子は元気にしてるよ」

「息子様は、妖怪王国にお戻りになりましたか？」

「いや、まだだ」

「すると、今むづいかに姿を隠したままで…。ああ、おいたわしゃ

ススムが言いました。

「ねえオウナさん、ヤマメの息子つて、なぜ妖怪王国から逃げ出さなくてはならなかつたの？」

「ああ、それはススム、ヤマメ様の息子様かナコタのどちらが次の王になるかで王国全体の意見が割れて、とうとう戦争になつてしまつたからだ」

「戦争？」

「それはそれは激しい戦いだつたのだよ。国土は荒れ果て、ラセツ軍の攻撃により、王宮まで破壊される始末。ついにヤマメ様は、息子を國の外へ逃がすしかなくなつた」

「どういひせう？」

「王宮にはメイドが一人いてな。これを信用できるものと見込んで、まだ赤ん坊だった息子をヤマメ様はお預けになつた。息子様を連れて妖怪王国を出、いすれかの国に落ち着き、メイドは自分の子として育て始めたそな。

「ヤマメ様、このメイドは今でも達者にしておりますのか？」

「いや、先日死んだ

「おお、なんとヤマメ様

「だが心配はないのだ、オウナ。すかさず、別の者が息子の面倒を見る役目を引き継いだのでな」

「ほほひ、そよひじりますか。ヤマメ様もいろいろ苦労がありで」

「こいつは時代だからな。仕方がなこさ

「こやこや、仕方がないではすみませぬ。ああヤマメ様、すぐにお食事を用意いたしましょ。また明日は早朝から、杖を追つて旅をされるのでじょひ。」

翌朝、ヤマメの背に乗つて再び荒地を駆けてゆきながら、オウナの言つた言葉をススムは思い返していました。

「こいつのまままつすぐ北へ向かいなされ。やがて、ひとときわ田大な若

山に行き当たりましょ。その頂上には城があり、これがラセツ一味が根城にしている場所なのです。

元は『死者国王』の城でしたが、やがてきたラセツにあつとう間に占領されてしましました。今では死者国は、ラセツによつて支配されているのですぞ

ただ残念なことに、オウナも城内の様子までは知らなかつたのです。

オウナの言葉どおり、岩山と城が見えてきたのは、もう夕方近くのことでした。

城壁の上に立つ見張りに見つからぬように注意して、丘の影や大きな岩の後ろをたどつて、二人は近寄つてゆきました。

やがて安全な場所で立ち止まり、ヤマメはススムを背中から降ろしたのです。

「ススム、あの城をじらん。何か様子がおかしいとは思わないか?」

「うん、兵士がたくさん出て、たいまつを手に歩き回つてゐるね。誰かを探しているのかな? 僕たちがここへ来てることを知つていると思ひや。」

「それはどうかな。しかし連中が殺氣立つてゐるのは事実のようだ。おやおや、じらんススム、ラセツのやつが塔の上にいるのが見える

「ナ

「本当だ。あつ、兵の一人を殴り倒したよ

「生前から妹は気が短かつたが、まるで変わっておらぬな。死んでも直らん性格というやつか

「あの兵士は、何かラセツの機嫌を悪くすることを報告したんだろうね。あつ、もう一回殴られた」

「さあススム、見物はそのくらいにして、私のせりを『じらん』

「え、やったのね母さん」

ススムを手近な岩の上に座り、ヤマメはその瞳をまつすぐ見て
つめたのです。

「これからおまえに、少し面倒なことを頼まなければならぬ」

「この国では、誰もおまえの姿を見ぬいじができたな。おまえは空氣のように透明なのさ」

「うん、わかつてゐるよ」

「今からあの城へ忍び込んで、中の様子を探つておいで。ラセツや兵たちが何を話しているのか、何が連中をいらだたせて、これほどの警戒をさせているのか、その理由が知りたい」

「僕が行くの？」

「今のおまえは完全に透明なのだよ。足音に気をつけさえすれば、

誰にも見つかることはないわ。 ああ行っておこで、

気はまったく進まなかつたのですが、ヤマメにひとをね、ついに
ススムは腰を上げるしかなくなつてしまひました。

立ち上がり、何度も何度も振り返りながら、敵の城を団ざして歩
き始めたのです。ススムが振り返るたびに、しつぽを振つてヤマメ
は答えてくれましたが、岩の陰になつて、やがてそれも見えなくな
つてしまひました。

ススムはつぶやきました。

「お母さんのバカ」

「こんなに危険な役目をいいつけられたこと、ススムはひどく腹
を立てていました。でもそれを面と向かつて口にする勇気がなかつ
たのです。

とうとうススムは、高い城壁のふもとまでやつてきてしまいました。いくら姿が見えないといつても、ここから先へ進むには、かな
りの危険をともなうに違いありません。

城には城門があります。それがつまに具合にちよつと開いたのは、
このときのことでした。

ガラガラと音を立てて、荷馬車が入つてゆこうとしたのです。サ
ッと駆け出し、あとをついて、ススムが城内へ入つていったのは、
いつまでもありません。

岩陰に潜んで、ヤマメはススムの帰りを待ち続けました。よほど

気になるのか、城の方角へ何度も目を向けてますが、そのたびにため息をついているではありませんか。

ススムの姿がやつとヤマメの視界に入ったのは、なんと2時間もたつてからのことでした。息をはずませながら、ススムは駆け戻つてきました。

「ああお母さん、やつとわかつたよ」

「どうだつた?」

「ラセツたちは、魔力の杖を探しているんだ。城の中に井戸があるて、そのそばで水を飲みながら兵たちが立ち話をしているのを聞いた。杖が光りながら飛んできたことは、国境の見張りから知らせを受けて、ラセツも知つているらしい」

「杖はどうして飛んでいった?」

「それがあ母さん、もつとずじごことがあるんだよ。見張りの兵が偶然目撃したらし」。

2本の杖は輝きながら空を飛び、だけど突然、その兵の目の前で溶け合って、合わされて、新しい1本の杖に変わってしまったというんだ。

まるで2つのロケットが合体するときのような眺めだったらしいよ」

「2本の杖が合わせり、1本になつた?」

「ラセツたちが大騒ぎをしているのは、それが理由なんだよ。溶け合った杖は、魔力が元の2倍に強くなるんでしょう？」

「その通りだ。その杖を持つ者は、もはや誰にも引けを取らぬ魔力使いとなるつ」

「その杖が、」の岩山のどこかに墜落したことも目撃されてるんですよ」

「なんと本当かい？ ススム」

「本当だよ。兵たちがそう言つているのを聞いたもん。だからラセツは兵たちにたいまつを持たせ、岩山中を探させてるんだって」

「なあ斯スム、もしもラセツがその杖を見つけたら、どうなると思つ？」

「ものすごく強い魔力使いが誕生するね」

「それだけではないさ。非常に危険な魔力使いとなるつ。杖の力を用いて、あの川を越え、人間世界へだつて攻め込んでくるかもしけん」

「まさか」

「まさかではないよ。ラセツとは、強くなることと、権力を得ることにしか興味のない女だ。ラセツに杖を持たせると、本当に困ったことになる」

「姉妹なのに、お母さんとラセツはあまり似てないんだね」

「似ていてたまるか。私は父親似で、ラセツは母親似なのさ」

「じゃあお母さんの母親つて、ラセツに似た姿をしていたの？」

「やうやくススム。とにかく偵察は『苦勞』だったね。とても助かってよ。危ない目にあわなかつたかい？」

「ううん、結構おもしろかつたよ」

「それはよかつた。ではススム、私たちも杖を探しに出かけよう」

「どうして？」

「もちろん、ラセツに杖を渡すわけにはいられないからわ」

「そんなことを言つても、岩山は云いんだよ。あのたくさんの兵たちよりも先に、僕たちたつた二人で見つけることができるはずないよ」

「それはわからないぞ」

「どうしてや？」

「考えてごらん。ラセツが杖を探しているのはなぜだと思つ？ 杖がもはや光を発していないからさ。杖は光るのをやめてしまつたに違ひない」

「なぜなの？」

「あなた、持ち主の手を遠く離れてしまったからかもしれません」

「持ち主であるお母さんが近くへ行けば、また光り始めるかもしれませんことこのつなの？」

「まあね」

「ふうん」

あまり納得してほこませんでしたが、斯スムはお母さんの言つ通りにするしかあつませんでした。いくらいやでも、お母さんと一緒にないと、人間世界へ帰ることだとつてできなのです。

斯スムを轍中に乗せ、お母さんは再び歩を始めました。

「ああそつだ、お母さん。ラセツの城の中で、僕はナコタの姿を見たよ」

「なんだって？」

「ナコタだよ。ラセツの隣にいて、一緒になつて兵たちに指示を出してた。いつの間にこいつへ来たんだろうな」

「それは本当なのかい？ ナコタはどんな様子だった？」

「どうして、こつもと回じだつたよ。どうかしたの、お母さん？ 気分でも悪この？」

「いや、なんでもないのだよ。しかしラセツめ、思に切つたことをしたものだ

「どうして？」

「おまえにはわからないかい？ 私のよつて呪文が使えるわけではな」「セツが、ナコタを」ひから側へ呼び寄せるには…、おや？ あれは何だらう？」

お母さんが立ち止まつたので、斯スムも耳をすませぬことになつました。『ロロ、ロロと突然、空からカミナリの音が聞こえてきたではありませんか。

見上げると、西の空から真つ黒な雲が近づいてくるといふだつたのです。

「お母さん、あれ…」

「雷雲か？」

城の方角から兵たちの大きな叫び声が聞こえてきたのは、この瞬間のことだったのです。

斯スムもヤマメもとつと振り返ることになりました。一人とも同時に気がついたのです。

「お母さん、塔の上で光っているのは、あの杖じゃないかな？」

「ああ、そのようだ。屋根の頂上に立つていろね」

「あそこずっとあつたのかな？」

「ふん。 とんだ『灯台下暗し』ところやつか」

「咲ひお母さん、ナセツもあの杖に気がついたよ。ナコタを連れて塔を登つてゆく。屋根へ上がるつもりだよ。どうするの？」このままだと杖を取られちゃうよ

「こや 스스로、もはやどうしようもないね。杖がラセツの手に落ちるのは時間の問題だ。しかし私は、少し気になる」とある

「なにが？」

「あの黒い雲さ。すんすんこづらへ近づいてくるでないか」

「それがどうしたの？」

「雲の中からカミナリの音が聞こえるであります? 雲はもうすぐ塔の真上に達する。杖は、あの屋根の頂上に立つてこらのだよ」

「あつ

ススムが声を上げぬのと、稻妻が塔を襲うのとはほとそど同時で
二。

このとき、リセツとナコタは共に杖に手をかけていたのです。

稻妻のせいで真っ白な光があたりをいっぱいに照らし、ススムは何も見ることができなくなってしまいました。

やつと光が消えたとき、兵たちもいつたんはどよめきを上げました。しかし奇妙なことに、すぐにそれも静かになってしまったので

す。

兵たちは、ラセツとナコタの死体に気がついたのです。カミナリに打たれ、屋根から転落し、一人とも大地に横たわっているのでした。

死者の国でも人は死ぬものなのか、とススムは不思議な気持ちになりましたが、田の前の光景を否定しても仕方がありません。ラセツもナコタも、もはやピクリともしないのです。

「ねえお母さん…」

ススムは何か言おうとしましたが、言葉が続きませんでした。ヤマメの口から次に出たセリフが、ススムをひどく驚かせたのです。

「父め、はかつたな」

「どうして？ 父って、妖怪王のこと？」

「ススム、あの黒い雲に見覚えはないか？ 父がいつも身にまとっているものではないか」

「やうか

「さあススムおいで。一人で城へ乗り込もう。今さら私に逆らう者はおるまい」

ススムを背に乗せて、ヤマメが城に達する「ひは、妖怪王も兵たちの前に姿を見せていました。といつても、いつもの黒い雲で身を隠したままです。

そこへススムたちが急流し、兵たちが急いで開いた門を通り、城内へと入つてゆくことになったのです。

もうひとすべにヤマメは口を開きました。

「父上は、自分で自分の娘を殺したのですね」

妖怪王は答えました。

「ラセツのような者を生んだのはわしの責任だ。だから自分で始末をつけたのを」

「だがここは死者国。こつときは動かなくなつても、死者が一度死ぬことはありません。ラセツも、いずれまたよみがえつてしまつう」

「だがそのときはヤマメ、おまえの息子が王となつていよ」

「じりでススムは口をせさんでしまつました」

「ねえ王様は、どうしてじりでいるの?」

「ははは、わからぬかいススム君? 君とナコタの手の中から杖を奪い、じりまで飛ばしてきたのは、わしなのだよ」

「じゃあヤマメと僕は、王様の手のひらであやつられていたんだね

ヤマメが言いました。

「私たちだけではない。あやつらっていたのはナコタも同じだ」

「どうしてなの、お母さん？」

「ススム、リセツはビツヤツヒナコタを死者国へ呼び寄せたのだと思つ?」

「さあ? 呪文でも使つたのかな」

「ラセツには無理な呪文さ。そのよつて高度な呪文は、父や私のような者しか使つことができない」

「じゃあ?」

「わからないかい? 幽靈の姿をとつて人間世界へ行き、リセツはみずからナコタを殺したのだよ」

「まさか…」

「やつするしが、ナコタを死者国へ連れてくる方法はないではないか。なんて母親だ」

黒い雲の中から王の手が伸び、ススムの肩に軽く触れたのは、このときのことでした。

「ああススム君、塔の上から、わしの家来が杖を取つて戻つてきたよ」

振り返るとその通りでした。ヨロイを身につけた鬼が一匹、うやうやしくさわげもつて近づいてくるのです。

サイズも見かけも以前と変わらない杖ですが、表面の黒さはより深くなり、つややかさも増したようではありませんか。もちろん、カミナリによつてキズ一つついているわけではありません。

「ススム君、それを受け取ったまえ」

「言われた通りにしましたが、すぐにススムは不思議そうな表情を浮かべることになりました。

「でも王様、これはヤマメの息子が受け取るべき物なんじゃないの？ ヤマメの息子が次の王になるんでしょう？ 僕じゃないよ」

「いや君が受け取るのを」

「どうして？」

「それはススム君、君がヤマメの本当の息子だからさ。せつだらつ、ヤマメ？」

その言葉に、ヤマメはすっかり目を丸くしていきます。

「！」存知だったのですか、父上？

「ははは、知らいでか」

「やれやれ、私は一人芝居をしていたのかもしません」

「やつでもなこさ。どうだいススム君、びっくりしたかい？」

「このがススムは、ゆづくと首を横に振るではありませんか。

「うん、そうでもない。実を言つとね、ゼロ禅師から少し耳打ちをされていたんだ。もしかしたら、僕の正体はそうなのかもしけないって」

「ほつ

妖怪王は感心した顔をしていましたが、ヤマメは違いました。

「あのジジイめ、余計なことをしあつて

妖怪王が振り返ります。

「まあよいではないかヤマメよ。書はなかつたのだ。ゼロ禅師のことは許してやるのだな」

「はい、父上がそつおつしゃるのでした」

「さて、これでわしの仕事はすんだようだ。自分の城へ帰ることにするよ。あとは頼むぞ、ヤマメ」

「はい、みんなの者によろしくお伝えください」

「ああわかった。しかしヤマメ、おまえもたまには城に顔を見せるがいい。みなも会いたがっている。そのときはススム君を同伴することを許されるな。王国の妖怪たちも、新王の顔を見たがっているのでな」

「はい父上

王の前でヤマメが深く頭を下げてお辞儀するので、ススムは手を丸くしたものでした。

ラセツとナコタのいない今、死者国の妖怪たちも、もはやヤマメに敵対することはありませんでした。ラセツとナコタをほうむつた後、新しい杖をポケットに入れたススムとヤマメを、手を振つて見送つてくれたのです。

ススムを背にさせ、今度はあまり急ぐ」となく、ヤマメは荒地を駆けてゆきました。またあの川を手指し、再び渡つて、人間世界へと帰るのです。

店を訪ねると、もちろんオウナは歓迎してくれました。ススムが妖怪王国の跡継ぎに決ましたことを伝えると、姿は見えなくとも手を取り、喜んでくれたのです。

オウナの店を出て、再び一人は荒地を進み始めました。ヤマメが口を開いたのは、このときのことでした。

「斯スム、妖怪王国の王になることを、おまえは本当に承知してくれたのだね？ 不満に思つてはいらないのだね？」

「それが気になるの、お母さん？」

「これでも母親だからな。子の将来は気にかかるわ」

「うふふ、まるで人間の母親と同じだねえ」

「笑いたければ笑え。おまえは自分の運命をのろつてはいないのだ

ね？ 父が死ぬとおまえは人間世界を離れ、妖怪王国の住人となるのだよ」

「運命をのりつてはいなければ、心残りなことがなくはないよ」

「それは何か？」

「お母さんのことだよ」

「私？」

「うん、僕はお母さんの素顔を一度も見たことがないんだもん」

立ち止まり、ヤマメは笑い始めました。

「なんだ、そんなことか。おまえはいいときには話題を出したぞ。人間世界は目が多く、いつどこで誰に目撃されるともわからん。人間でなくとも、野鳥や野良猫に私の真の姿を見られるのもまづいのではな」

「どうして？」

「前方をじりん。あの川が見えているね。私たちはまだ死者国にいるといつじつだ。ここでなら、私の姿を見せてやつても問題はない」

「なぜ？」

「それは見ればわかる。まあ毛皮を脱ぐ」とこいつよ。よべじりんススム。これが私の素顔さ」

ススムの田の前で、ヤマメはするすると毛皮を脱いでいたのです。

それはどうこう姿だったのでしょうか。ヤマメはどんな顔をしているのでしょうか。

「お母さん」

なつかしさのあまり、ススムは声を上げてしまいました。ヤマメの顔とは、彼を思わずそうさせてしまつものだったのです。

ススムの目の前にはあのなつかしい顔。赤ん坊のころからずっと一緒にいた人。病氣で死んでしまつたと聞かされていた人の顔が'affたのです。

もう一度と会つことはないと思つてこた本当のお母さんが、そこにいたではありませんか。

ススムは叫びました。

「やつぱつお母さんは、僕の本当のお母さんだつたんだね。そういうかといふ氣がずっとしてた。妖怪王国から逃がすときに僕をメイドに預けたといふのは、ウソだつたんだね」

「そりゃ。おまえを連れ、私自身が王国を抜け出したのよ。人間たちの間に隠れて生き延び、ラセツを倒すことができる口を待つていたのさ」

「お母さん……」

「ああ斯スム、泣くのはそのへりこむおし。将来のために、おまえにまだたくさんすることがあるのだよ。まず、呪文や魔力をもつと見えなくてはならん。おまえには家来も必要にならう」

「お母さんのフクロウみたいなやつへ。」

「あんなできの悪いのではなく、もつとひょんとした家来をつけてやるや。おまえには呪文の教師も必要だが、それはゼロ禅師にやらせればよからう」

「禅師が引き受けてくれるかな？」

「弓を受けるや。あこつはすつからつおまえに情が移っている。断るはずがない」

「本當に？・自信があるの？」

「あるともや。私の手並みを見ておいで……」

じつして斯スムの物語は終わるのです。彼がいかにして新しい妖怪王へと成長していくかは、また機会があればお話しできるかもしれません。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4058i/>

妖怪禅師

2011年10月18日21時53分発行